
ナイトウィザード2nd 狭界に鳴り響くカプリチオ

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトウィザード2nd 狭界に鳴り響くカプリチオ

【Nコード】

N3500F

【作者名】

刹那

【あらすじ】

夜闇の魔法使い、ナイトウィザード。彼らは人の世に忍び寄る侵魔と日々闘争を繰り返していた。ウィザードのひとり、槍馬秀助はある日敵対するはずの魔王秘密侯爵リオン・グンタにある少女を護衛してほしいと依頼を受ける。だが、少女を狙うのは裏界屈指の大魔王で——？世界の危機をかけた魔法大戦、それがラビリンスシティにて静かに開幕する！【ナイトウィザード未読者の方も美味しく頂ける親切設計です】

0..オープニング

そこは何もない世界だった。

あるいはまだ何も生まれていないのか、もう消失してしまったのか。それとも最初からこういう世界として存在しているのか。

おそらく、完全に解る者はいないだろう。

しかし少なくとも、この空間に傲然と浮遊する少女はそれに興味を持たなかった。

冥く、光源がまったくないここで、しかし艶を孕んで細められた少女の瞳はここに居るモノを見つめている。羽織ったポンチョが、それは人間の常識を歯牙にもかけずに風もなく揺れていた。

ウェーブのかかった美しい銀髪を繊細な指先で弄ぶと、耳の辺りにある三つ編みも揺れる。

「これが、冥魔の王ね——」

歌うような少女の言葉が虚空に響き渡る。人がいたなら、何人も振り替えざるを得ないほどの存在感を持っていた。

少女の外見年齢は十四歳ほどではあるが、纏った雰囲気は決して年相応ではない。人間の枠では計り得ない超然的な、王、悪魔、神、とでもいうしかない貫禄があった。瑞々しい肢体を持ち、だが中身はいかなる人よりを年を経ている。

そのようなモノを、人間は魔と呼ぶ。

そして彼女も魔である。もっとも、魑魅魍魎、悪鬼羅刹とは比べるのも愚かしい存在なのだが。

「あなたを復活させて上げるわ、冥魔王。光栄に思いなさい。あたしが暴れ、貪り、闘いの限りを尽くすことを許してあげる」

——GuuuUU!!

吼えた。

漆黒の闇に縛り付けられた生物が少女の声に応え、吼える。

それは獰猛な獣の歓喜か、傲岸不遜な少女に対する憤慨かはわからないし、やはり少女には関心はない。

ただ興味があるのはこれが起こす事象にある。

掌を中空に突き出すと、正面に魔法陣が現れる。少女の身体を隠すほど大きいそれは円陣の中に図形やルーン文字を内包していた。

発光する魔法陣から膨大な力が指向性を持って、この世界に干渉する。目的は、破壊。ここに充満する闇を粉碎することだった。そして少女はそれを行える。羽虫を払うが如き気軽さで爆撃にも匹敵する破壊を巻き起こせることができるのだから。

力が膨れ上がり、今まさに暴力の奔流が溢れ出そうとしていたその瞬間、少女は異変に気づいた。

「あら……?」

自分以外にもここに人がいた。いや正確には自分のように人の姿をした者がいた、だ。

それだけならば少女は躊躇せず不幸な者を巻き込み力を発揮していただろうが、見つけた者は顔見知りであった。それも少女と特別親しい者の姿である。さすがに問答無用で吹き飛ばすのは気が引けた。

「ちょっと。そこで何してるわけ?」

呼び掛けたと同時に、少女は異変と感知した自分の感覚が正しかったのだと知った。

見知った者、女性の前の空間に硝子のような亀裂が走る。それは白い内部を覗かせながら人一人分の大きさの穴を開き、女性に向け

て何かを吐き出した。役目を終えたとばかりに穴はすぐに塞がり暗闇を取り戻す。

女性は吐き出されたものを抱き上げると、長髪に隠された顔を持ち上げて少女を薄紅色の両目で見つめた。髪から覗く輪郭は、間違いなく少女の同胞のとある女性だった。

女性は寡黙な風貌で、結局一言も口にせず、溶けるようにして姿を消した。

ひとり残された少女は、魔法陣を消し去り掌をおろす。もうこの破壊は無意味である。目的を達することは出来なくなった。

出鼻を挫かれ、怒るところだろうが——少女は唇の端を僅かにつり上げ笑っている。

彼女が自分の邪魔をした理由はわからない。これは想定外の出来事である。

だからこそ、

「——面白いじゃない」

今回はただこの封印を壊して冥魔王をこの世に引きずり出し人間の反応を見て暗躍しようと思っていたが、その前に発生した条件を達成しよう。

「奪われた鍵を取り戻し封印を解く。なんだかゲームらしくなってきたじゃない？」

蠱惑的に唇をなめ、喉を鳴らす。

「まずは愉しませてもらおうじゃない、リオン！ 邪魔する理由はその後聞いたげる」

——裏界の大公、大魔王ベールⅡゼファーは世界の狭間で高らか

に宣言した。

＊

紅い月が朧雲に遮られずに地上を睥睨していた。人気のない街並みを鮮血に染め上げ、不気味に演出している。

紅だけの世界は慣れなければ目眩すらしそうな光景。なのに騒ぐ人間はひとりとしていなかった。

そもそも、騒ぐような常識に捕らわれた人間は前提としてここにいられないのだ。

コンクリートには穴が穿たれ、小さな建物は中破した街並み、そこに数体の怪物が斃れていた。筋骨隆々の巨人、石造りの巨大人形、鋭利な爪や牙を備えた野獣など様々だが、すべてある点が共通している。

それらは人間社会に認知されていない化け物である。

世間に知られている生物は自力でコンクリートを破碎したり、現代建築の建物を簡単に崩壊させたりは出来ない。

極めつけは、事切れた化け物達が風に吹かれて消え去っていくことである。風化というにはあまりに早すぎた。

消えていく怪物を背景にして、学制服の少年がいた。年の頃は服装からして高校生、それも屈強な肉体であるから三年生だろう。

彼は両手に機械仕掛けのトンファアを所持していた。だが一般的にトンファアと呼ばれるものとはサイズが違う。強固な金属の外装を持つトンファアは肉厚で、長さは掌から肩の位置までもある。

トンファアには血痕が付着しており、それも風化して消えていく。これが重量も相当であろうトンファアを操り、怪物を殲滅したのが少年の仕業であると証明していた。

本来は温和なのであろう表情を引き締め、トンファアを油断なく構えながら少年は眼前の女性を睨みつける。

「……侵魔、それも魔王か。いったい僕に何の用です？」

侵魔、それは今や完全に消滅した先程の怪物達の呼称だった。エミューレイター

世界の外側、裏界りかいからこちら側の世界——即ち地球フアー・ジ・アースに侵略してくる魔物達、それが侵魔と呼ばれ嫌悪されているものである。

奴らは人間の魂とも言える力、プラーナ目当てに殺戮を行う人類の敵だ。月を紅く染め上げ、月匣げっこうと呼ばれる空間を作り出して地球に進攻する。

魔王とは、彼ら侵魔の中でもずば抜けた力を保有する者達のことだ。その力はその気になれば簡単に街一つを地図から消し去り、クレーターを生み出すほどである。魔王とは畏怖と敵意を持った言葉だ。そして人類はこれを迎え撃たねばならない。

その魔王と呼ばれた女性は紅い月を背負って、無表情のままに告げる。

「敵対するつもりはありません。武器を収めてください」

顔の半分ほどを覆う長髪の女性は、一見印象の薄いどこにでもいる人にしか見えない。それでも少年には彼女の内包するプラーナの量が凄まじく膨大であることを察していた。これは間違いなく人間に在らざるものである。

「侵魔をけしかけておいて敵対するつもりはない、なんてさすがに信用できないな」

「あなたの力を試すためでした。槍馬秀助」

「……なんで、僕の名前を？」

そうましゅうすけ 槍馬秀助は益々警戒する。自分は見ず知らずの魔王にまで名前を知られるほどの実力者であるなどという過信は毛頭ない。

彼女は抱えていた巨大な書物を開き、淡々と情報を羅列する。

「槍馬秀助。引退した父である槍馬桂^{かつら}を除き、現在対侵魔を想定した槍馬流古武術唯一の使い手。輝明学園秋葉原分校三年三組、出席番号十一番。成績は中の上。趣味は武術の稽古にお笑い鑑賞。——そして、龍使いのウィザード。すべては、この書物に書いてあります」

ウィザード。それは侵魔に対抗できる能力を有する人間のことだ。魔法を操り、現実社会の目に触れないうちに化け物の始末をつける夜闇の魔法使い。

龍使いとは体内の気、龍^{ロン}を駆使して戦う身体能力に長けたウィザードである。

抱きかかえなければいけないほどの大きさをした書物、そこに秀助のパーソナルデータが記入されているのか、女性の口調には淀みがなかった。

息をのみ、得体の知れなさに秀助は恐怖する。侵魔を屠るウィザードと云えども、魔王は驚異的な力を誇る。下手なことをすれば一瞬で消し炭にされるほどの力を持っていた。そのような存在にこうも個人情報暴露されれば、どんなウィザードだろうと恐れを抱くに違いない。

「僕のことをなんでそんなに……。あんたは、誰だ？」

「聞かれたからには、答えなければなりません。私は、リオンⅡグンタと呼ばれています」

その名前を聞いて、秀助は戦慄した。

リオンⅡグンタ——裏界の侯爵であり魔王の中でもトップクラスの実力者である。秘密侯爵の名を持つ彼女の前では、あらゆる秘密は白日の下に晒される。

秀助もこれが初対面だが、名前だけは伝え聞いていた。権謀術数

で幾度となくこの世界を危機に追いやっていた魔王として。ウィザードなら誰でも知っている。

そのような大物に目を付けられることになった理由が、秀助には皆目見当もつかない。

気だるげに細められた薄紅色の瞳で秀助を見つめながら、リオンはつぶやくように小さな声で秀助に声をかける。

「私はあなたに、力を貸してもらうために来ました」

「僕に、裏界の侯爵が？　なんで？　落とし子にもなれ、と？」

「いいえ、ただ協力してもらうだけです。この書物によると、現在すぐ私に協力してくれるウィザードで最も強いのはあなたと記されていました」

「僕が魔王に協力？　この世界を壊す手伝いをしろってこと？」

「それも違います。この世界の危機を退けるための協力、と思ってください」

またも秀助は驚いた。魔王と利害が一致して共闘すること事態はあまり珍しくはないが、あちらから、しかも世界の危機を脱するために協力してくれといわれるなんて考えてもいなかった。

本当に世界の危機が迫っているのなら、秀助は協力するべきだろう。秘密侯爵リオンⅡグンタの書物にはあらゆる秘密や未来が記述されている。片鱗を見せていない危機を察知するのも難しくないはずだ。世界有数の実力者のウィザード達も現在世界の危機を防ぐために多忙であり、お鉢が回ってきたのも理解はできる。

「でも、いきなり侵魔に僕を襲わしてきた相手を簡単に信用できないよ」

「あの侵魔は皆低級、あなたの敵ではありませんから。現にあなたは負傷していない」

「……そのことも分かってたんだろう？　勝てない相手に同胞をぶつけて、無駄死にさせるような人の言葉を鵜呑みにはできない」

「……だって私、魔王ですから」

くすくすとリオンは笑った。素朴ながら可憐な笑みに、部下を悼む色はない。力無き侵魔の死には意もかえさない冷酷さ、それが魔王の魔王たる所以である。

剣呑な空気を流して平然とするリオンに、秀助は不信感を募らせる。何があるかわからないとトンファーを構えたままである。もしこの魔王が攻勢に出れば対抗できるかはわからないが。

「身構えないでください。もうあなたを襲う気はありませんから。それにこの書物にはあなたが協力すると書いてあります」

「勝手に決めないでくれ——」

ずうつ、と秀助は背後に現れる質量を感じた。同時に突き刺すような殺意が襲いかかってくる。

地を蹴って距離をとると、先程までいた場所が破碎した。降り注ぐ破片のなか、秀助は身体を捻って着地し新たな来訪者を視界にいられた。

「なにがもう襲わないのさ！ 背後から侵魔に奇襲をかけさせるなんてッ」

「いいえ、あれは侵魔ではありません」

リオンは若干の焦燥を見せて、その怪物をこう称した。

「あれは、冥魔です」

冥魔。侵魔とは別に近年頻繁に世界へと侵入してくるようになった新しい驚異、それが冥魔だった。

出自は閻界とも冥界と云われているが詳しいことがわからない冥

魔は、人間のプラナ目当てで攻めてくる侵魔と違い知能が低く単純な破壊衝動で行動しており、人類にも侵魔にも厄介な存在である。優秀なウィザードが今多忙なのはこの冥魔の進攻が関係していた。

ここに現れたのは黒き影を圧縮、凝縮した人型の魔物だった。人間の影が三次元空間に飛び出し自立稼働しているようである。

鞭のようにしなませた腕を砕いた地面から引き抜いて、ふらりと秀助とリオンに向き直った——のだろう。顔がなくのっぺりとしているため、前後や筋肉の連動による動作がわからない。

数は三体で、影が紅一色の世界にいる様はホラー映画の一シーンにしか思えなかった。

腕を力なくたらしめた影は自分達の近くにいるリオンと秀助に破壊衝動を叩きつけようと、一步踏み出す。影に衝動の対象とされた秀助は生理的嫌悪感を感じつつ、トンファアの柄を握りしめた。

「もう、こちらの世界に干渉できますか……冥魔王」

「あの冥魔に心当たりが？」

「ええ。しかし話は後にしましょう。冥魔を放置するのはあなたにとっても好ましくないでしょう？」

「わかってるさ！」

ダンッ、地面を蹴って秀助が槍のような勢いで突貫する。影の一团の懷にたった一足で肉薄すると、螺旋を描き機械仕掛けのトンファアを振るった。

「疾ィ——ッ」

複数の敵を一掃する龍使いの技法、《一閃》。

常人では重さに振り回されるだろう重量のトンファアをふたつも自由自在に扱う。当たれば人間なら一撃で全身骨折は免れない。

だがトンファアはその破壊力を影に当てることなく旋風を巻き起

こして通過した。

「すり抜けた!？」

「ダークドールに物理攻撃は通用しません」

そして、とりオンが口にした時、ダークドール三体の攻撃が秀助に襲いかかった。飛来する攻撃を力強く華麗なフットワークで躲すが、この距離ですべてをいなすのは至難の業だった。一体の攻撃が頬を掠める。

ガクンと、秀助の身体から力が抜けた。

「ダークドールの攻撃にはプラーナイターが付随します」

唐突な疲労感に驚かされたものの、秀助はすぐさま力を取り戻してその場を離脱する。

プラーナイター、それは攻撃がかすりさえすれば相手のプラーナを奪い取ることができる一部冥魔が保持する能力だ。プラーナは魂の源であり、それがなくなることは死に直結する。しかしウィザードのプラーナは常人より膨大であり、多少の損失なら問題はない。秀助の離脱と同時にリオンが掌を正面に翳す。すると魔法陣が生まれた。

「魔の三叉槍——《ヴォーテックストライデント》」

濃縮された闇の三叉槍が、ダークドールに向けて放たれる。漆黒の槍はダークドールを捉え、貫き、視界を覆うほどの粉塵を巻き上げた。

恐るべき破壊力、しかもこれは魔王にとって本気に程遠い児戯である。

その粉塵を突き破り、飛翔する影があった。満身創痍で辛くも生

き残った唯一のダークドールが、背から蝙蝠の翅を作り出していた。

「逃がさないッ！——《墜竜》！」

秀助が宙に飛び出し、あっという間にダークドールの頭上を占拠する。一対のトンファアが不可視の風を纏い、小型のハリケーンとなる。龍使いの対空中戦用技法がひとつ、《墜竜》。

それをダークドールの頭蓋に叩きつけた。

物理的な攻撃ではなく、風によって魔法に変換された一撃は影の魔物をふたつにわかし、この世から消滅させた。

宙で体勢を整えながら着地すると、秀助はリオンに視線を移す。

彼女は底の知れぬ微笑を浮かべて秀助を見ていた。

冥魔、そんなものがこのタイミングで現れるなど世界の危機に他ならない。つまりウィザードであるならば、これには対処をせざるを得なかった。

「私の提案、受けてくれますね？ 槍馬秀助」

「……是非もない、と云うしかないね」

リオンⅡグンタは槍馬秀助の返事をうけ満足気に頷く。

「では、参りましょうか。戦いの地——狭界、ラビリンスシティへ」

リオンの背後には、異界へ誘う黒き門が口を開いていた。

＊

森々と木々が繁っている森林の東に、その立派な神社はあった。こんな森の中に建てられたにしては大規模であり、新年には人がごった返している様が容易に想像できるほどである。これだけ大き

いのだから、それはそれは有名な神を祭っているのだろう。

が、今ここには参拝客がひとりもいなかった。いや、そもそもこの神社が建てられてから参拝客が訪れたという記録はまったくない。そして重要なのは実際に参拝客が訪れた事実ではなく、ここに祭られている”神”が自分を崇めにきた者をひとりとして確認していないということだ。

「な、ん、で！ 誰もこのパールちゃんさまを崇め奉りに来ないのよーっ！」

その神様、東方王国の王女、自称超公パールⅡクールは激怒した。年齢は十四歳ほどで、金髪を先端に鈴をつけた紅い紐で結いツインテールにしている。東方風の衣装を身につけており、具体的に言えば巫女服に酷似していた。しかし、袴の丈が短く膝上二十センチくらいであり、もはやスカートと云っても過言ではない。ニーソックスを履いていることがスカート化に拍車をかけていた。長い前紐もリボンのように揺れている。

この元気澆刺とした少女も驚くべきことに魔王と呼ばれる存在だ。しかも強力な魔王を上げろといわれれば、金色の魔王ルーⅡサイファⅠ、蠅の女王ベールⅡゼファⅠ、東方王国の王女パールⅡクールと名が出るほどである。最凶と呼んでもまったく差し支えない実力者だ。

その魔王パールⅡクールは、地球でも侵魔のいる裏界とも違う狭界と称される場所に存在する世界、ラビリンシティで勝手に建造した”東方王国神社”の境内にて浮遊していた。

「どーいうことなのよ！ なんでこのパールちゃんさまの偉大さと高尚さを理解できない愚民しかないわけ？」

「愚民と罵られてまでやってくるのは余程のマゾか変態くらいじゃないかと。そもそもここにはウィザードと魔王くらいしかないわ

けで……」

応えたのは境内に積もった枯れ葉を竹箒で掃いている少年である。十八歳ほどで眼鏡をかけた少年はブレザータイプの学制服を身につけており、パールの空気と相反して陰気な印象を受ける。だが箒を掃いている姿に頼りなさはなく、肉体は鍛え抜かれているのがわかった。

森林のなかに建てられているからか、境内に散乱する落ち葉の数は異様に多い。少年の横には焼き芋がいくらでも出来そうなほどの山が出来ていた。これだけ掃いても汗一つかかないのだから、少年の体力は相当なものである。

「バカ云わないでよ、権^{ゴン}。このパールちゃんさまに罵られるのは至上の悦びじゃない。嫌がるわけがないわ」

「さいですか」

口答えるのをやめて沢木権は掃除に精を出す。下手にパールの機嫌を損なえば殺されかねない。彼女に失態を見せて消された部下の侵魔は数えることすらアホらしくなってくる。権はパールに東方王国神社の管理を任されている落とし子のため、そう簡単に消し炭にはされないが用心に越したことはない。君子危うきに近寄らず、である。

落とし子、それもウィザードの種別のひとつだ。

魔王と契約し、従属することを条件に強大な力を得た者、それを落とし子と呼んでいる。

つまり権はパール配下、彼女風にいえば奴隷である。

手足を投げ出しながら中空で愚痴を吐いていたパールは、可愛らしく唸りながら権を見下ろす。

「ゴーン、あんたも参拝客を増やす方法考えなさいよ。パールちゃ

んの奴隷でしょ」

「……ここの神社って魔王以外に知ってる人はどれくらいいるんでしょう。御利益だってわからないし、知名度が圧倒的に足りてませんよね」

「そ、そうだったわ！ さすが世界でもっとも強くて美しくて賢いぱーるちゃんの落とし子ねっ」

宙で身体を起こして境内の石畳に着地すると、パールはそういえばと思い出したことを口にする。

「またベルがなにか企んでるってリオンがいつてたっけ。ふふんっ、もしベルの計画を邪魔してやればウィザードも大挙してパールちゃんさまを崇めにくるに違いないわ。今までの借りをベルに返してやるチャンスよ！」

我答えを得たりと大はしゃぎのパールとは裏腹に権の顔はやつれていく。彼には嫌な予感しかしなかった。せめてこの予感が外れてくれと願うものの、近年権少年の危機感知は外れた試しがない。類に漏れず、この危機感知も外れることはなかった。

「そういうわけで権、あんたちよっと迷宮街に行って情報収集してきなさいよ」

「……マジですか」

「マジよマジ、おーマジ。掃除は免除してあげるから行ってきなさい」

「い、いやですね？ ベールⅡゼファアの計画といっても手掛かりがそれだけでは探せませんよ？ もっと重要な情報をもらえないと……」

名案、と本人が考えていることを思いついたため機嫌がいいのか、

それもそうねとパールは顎に指をあてがう。

これで難を逃れたかと思いきや、パールはとある情報を口にした。

「確かりオンは槍馬秀助ってウィザードが中心にいる事件、なんて
いつてたっけ」

「――槍馬秀助？」

権の脳内で稲妻が走った。その名前は自分と”親しかったはず”である。途端に様々な記憶が呼び起こされ、断片的なフィルムが脳内を無数に乱舞した。

現実味のない記憶のなかでも特別身近に感じる思い出に、権は無性に走り出したくなる。

権の異変に気づいたのか、パールは首を傾げた。

「んー、どうかしたの、権？ 知り合い？」

「え、ええ。知り合い、ですね。かなり親しかったようです。相棒、
ってやつですよ」

「へえ、そんなに詳しく思い出せるんだー、あんたのボロボロの記憶で。ならやっぱり適役じゃない。これあげるから行ってきなさいよ」

パールがどこから取り出した銀の鈴を権に放り投げた。それを受け取ると、権はまじまじとそれを見つめる。

東方の鈴と呼ばれるそれは、パールが臣下に送る特別な品物である。もっとも、もらった本人が喜ぶかは別であるが。

「じゃ、あたしは焼き芋して待ってるから、その槍馬秀助ってのに会ってベルの計画ぶっ壊しちゃってね」

権は、もう断らなかった。

槍馬秀助に会えば、過去の記憶がもつと”蘇る”はずだと思ったからだ。

そうして権はラビリンシティの中心、迷宮街へと赴くことを決めた。

＊

「めんどうだなあー、わたし貴女みたいな魔王に恨まれる覚えないけど？　そんなにちょっかい出して楽しい？」

憤懣やるかたなしといった様子で少女がボヤいた。

ラビリンシティと呼ばれる世界の一角、迷宮街の最西端にある海岸近くでそれは行われていた。

怒っているらしい少女は高校生以上、社会人未満の年齢で栗毛のショートヘアをしている。服装は比較的ラフな格好であり、休日に歩いていた女子大生といった雰囲気である。が、その片手に所持される巨大な長剣がそのイメージを壊していた。

ざっと二メートル近くある巨大な長剣は、刃でありながら機械である。黒い装甲板で刃の形を作っており、柄に当たる部分も刀身に比例して長く仕立てられているが、実際の持ち手は柄の上部で半月型にくり貫かれた所に設置されている。アタッシュケースや工具箱にも似たような持ち手の作り方があったはずだ。

無機質な外見でありながらしかし、有機物のような生命の息吹を感じさせる脈動感がこの長剣を異端たらしめていた。

そしてこの女子大生に対峙している女性が五メートルほど離れた場所に存在する。

「楽しくはないよ。ただこの計画にはキミの力が必要不可欠だったのだけだね」

「計画って……ラビリンシティの法を破ってまで？　わたしはそ

んなにすごいウィザードとは思わないけど……。ねえ、ユダⅡカエサルさん？」

魔王、ユダⅡカエサル。最近頭角を表してきた中級程度の魔王である。表界ファー・ジ・アースでもよく出てきてはプラーナを強奪したり、ウィザードを蹴散らしている。世界全体の危機とは云えないものの、人類へそれなりに損害を与えていた。ラビリンシティの魔王やウィザードの間でも名前は知られてきている。

炎のような髪でポニーテールを作っているユダⅡカエサルは苦笑して肩をすくめた。

「あんなのは紳士協定だよ。守っている者はそれで得があるから従っているに過ぎない。その協定を破ってでもキミにちよっかいを出す方が得だと思ったからそうしたのさ。もっとも、無駄だったみたいだね」

「勝手に襲いかかって納得しないで欲しいな」

「たとえ云っても今のキミにはわからないだろうからね。もしくは一生涯理解できないかもしれない」

「……どういうことなのよ」

侮られるような態度が気に障ったのか、女子大生は剣先をユダに突きつける。それに困ったのかユダは手を振って制した。

「怒らないでくれないかな、事実を云っただけなんだよ。それにこれ以上やったらここが焦土になるぞ」

魔王の言葉で改めて女子大生が周囲を見回し、頬をひきつらせた。その表情からは、やってしまったという意志が伝わってきた。

いくつもの建物が倒壊し、抉れた地面の断面は高熱で焼けガラス質になっており、悲惨としか云いようのない惨状である。

周りが打ち捨てられ潮風で風化していた建物だからよかったものの、市街地での戦闘なら多大な被害を出していただろう。これらは魔王とたったひとりのウィザードにより起こされたのだから驚きである。

しかもふたりはまだまだ余力を残していたのだから、本気でぶつかり合えばどれほどの被害が出るかわかったものではない。

「これですごくないとは自分を過小評価し過ぎだよ、キミ」

「こんなの魔法の威力が少し強いだけだからね。世界に選ばれた勇者とか、世界の危機を救ったウィザードに比べたら、微々たるものじゃない」

なにをいうのか、とさも当然のように応えた女子大生にユダは渴いた笑みを零すしかない。中級程度とはいえ、魔王の力は一介のウィザードに易々と匹敵されるほど弱くはないのだ。それを当たり前に行う女子大生は、いったいどれほど特異なのだろう。世界有数のウィザードに数えられてもおかしくはない。

「……まあいい。今のキミへの用は済んだ。精々この街で自由気ままに過ごすといい」

肩からかけたロープと紅いポニーテールを揺らして、ユダは女子大生に背を向ける。

「ちょ、ちょっと！ 人の質問には答えてよ！」

「悪いね、答える義理はない。では、また逢おう」

後ろ手で別れを告げると魔王の姿は、歩くシーンのデータだけ跳んでいくかのように忽然と姿を消した。

後に残るのは細波を立てる嘆きの海と呼ばれる海岸と、破壊され

た建物だけであつた。

ひとり取り残された女子大生は、ため息をついて長剣を肩に担いだ。

「もうっ、あの魔王はいつたいなんなのよ」

『さて。ワタシにも近年名を売りだした魔王、以外のデータはありませんね』

突如、長剣が女子大生の声に応えた。それに驚かず、女子大生は眉根を寄せる。

「それくらいわかってるわよ。わたしは一般論じゃなくて貴女の見解を訊きたいのよ、^{アイリス}lris」

『AIのワタシになにを期待しているんですか、ラキ』

lris、正確には疑似人格システムlris ver. 2追加データカード実装型は女性らしい合成音声に呆れを滲ませた。

ラキと呼ばれた女子大生は機嫌を悪くしたのか、声を荒くする。

「そういういい方しなくなつて良いでしょう！ わたしは貴女を大事に思つてるんだから」

『わかつてますよ、ラキ。ありがとうございます』

「……わかればいいのよわかれば」

突然感謝されて恥ずかしさに頬を染めたラキは、視線を逸らしながらも最初の話題に戻った。

「それで、lrisはどう思うの？」

『現状では判断しかねます。良くないことを企んでいるのは想像に難くはないのですが』

AIが想像、などという人間らしい単語を使うことにもラキは驚かない。追加データカードも実装されたIrisは思いのほかに饒舌であり、そこいらにいる人間よりは博識である。これがラキの箒にオプシヨンとして備えられたもののなのだ。

箒。それはラキが担ぐ機械仕掛けの長剣のことである。

実際の箒とは程遠い外見であるし、掃除もすることはできないが、ウィザードはこれを箒と呼ぶ。所謂、業界用語というものか。侵魔に対抗する魔法と科学によるハイブリッド兵器、それが現代の魔法使いにおける箒なのである。

Irisの返答にラキは表情を陰しく——といってもあまり締まらないのだが——する。

「そっかあ。もう関わってこないかもしれないけど、またとかもいつてたし。……でも、もしかしたらこの記憶と関係してたりするのかな?」

『自分が殺された記憶、ですか?』

Irisの言葉にラキは無言で頷く。

ラキには、自分が殺された記憶があった。無論彼女は今もこうやって生きているし、実体を持った人間である。それは疑いようはない。しかし、脳内には自分の死ぬ瞬間が克明に残っていた。

身体から流れる血液の鉄臭さまで思い出せるそれをラキは夢だとは思えないのだ。世の中には過去の記憶を継承し転生したウィザードもいるが、ラキはその類でもない。

いったいこれはなんなのか——ずっと気になっていることだった。

『……それよりも早く退避することを推奨しますが。騒ぎを聞きつけたウィザードと魔王がやってきますよ。相手からとはいえラビリンスシティ内での戦闘ですから嚴重注意は必至かと』

「あ、ああそうだった。なんでウィザードからも逃げる羽目になるのよっ、あのユダとかいう魔王のせいで散々よね」

思考を中断して長剣型箒を下ろして腰掛ける。すると尻の部分が扇状に展開、エメラルドグリーンの放射光を放ち、ラキは空に向かって飛び出した。

——彼女が槍馬秀助と沢木権に出逢うことになるのは、これから数日後のことである。

0..オープニング（後書き）

やけに長いオープニングになりましたー。

ふたつにわけるのは面倒もといテンポが悪いのですよ。

どうも刹那です。

二ヶ月ぶりの投稿作はナイトウィザードのSSとなりました。前回の人化の剣とはまったく一ミクロンも関係ありませんので、本作が初めての方は御安心ください。

そして原作をまったく知らない人も安心して読めるよう、随所に解説が散りばめられています。

そして作中で魔王、などと書かれているキャラクター以外はオリジナルキャラクターになっております。ユダールカエサルは除く。

ナイトウィザードというのは去年アニメ化したTRPGと呼ばれるジャンルの作品で、基本はプレイヤーが各々独自のキャラクターを創作し、同じシナリオなどを遊ばせるものです。故に今作もNPCとなる敵キャラなど以外にもオリジナルなんですねー。

まあかなり端折ってますので、TRPG、ナイトウィザードについては検索してください。

そして今作はソースブック、ラビリンスシティを舞台にしています。

そんなわけでナイトウィザード2nd 狭界に鳴り響くカプリチオ、お楽しみくださいな。

1..混在都市の邂逅

目の前が暗黒に包まれた。そう思った矢先、強烈な光が瞼を貫く。
――槍馬秀助が目を開ければ、そこは既に紅き月も昇っていない
見知らぬ風景だった。

「ここ、は……」

辺りを見回すと建物のコンクリート壁が左右に直立し、陰を作っていた。単純に言えば路地裏である。カビっぽい臭いが鼻を突いた。路地裏、というだけならば驚くに値しない。しかし、建物の合間から覗く世界は秀助の知らない光景だった。

中世や御伽噺、冒険譚に出てきそうほどファンタジックな建造物が建ち並び、だがそこには近代建築物が混じっていた。あまり高層とは行かないまでもビルディングも見当たり、空想と現実が同居し混沌としている。遠近感が狂いそうなそれらは、まるで不思議の国に迷い込んだようであった。

この奇妙さはウィザードとしての活動に慣れている秀助にも新鮮に写っていた。

「これが、ラビリンシティ……」

「その通りです」

感嘆に息をもらした秀助にリオンが頷く。

ラビリンシティ、それはかつて金色の魔王ルー||サイファーが別荘として作り出した世界である。もっとも、今は実権を他の魔王に握られしまっており、敵対するはずの魔王やウィザードが混在するようになっていた。

このような世界を忘却世界、または狭界と呼んでおり、これらは

不安定な地盤のもとに成り立っている。が、このラビリンシティは例外で裏界屈指の魔王であるルー＝サイファーが作り出したが故に他の忘却世界とは比べものにならないほど安定していた。しかし、それでも近年はラビリンシティも世界を構成するプラナ欠乏で不安定になりつつあるようではあったが。

そして最後に、ラビリンシティは地球に存在しないという性質上、一般人には絶対に見からないという利点がある。ラビリンシティを牛耳っている魔王は特別に——無論利己的な魔王のことであるから、自分達の利益のために——ウィザード達もこの場所への出入りを許可しているため、ウィザード組織も支部などを設置していた。

そういう事情もあり、この街には魔王とウィザードの抗戦を禁止する協定まであった。

「……ここに僕を呼んで、なにをさせるんです？」

秀助はひとまず驚きを御して、薄幸のリオンに訊ねた。

魔王がラビリンシティに招待する時は、基本的にこの不安定な世界を保全するためや、ウィザードにも利点がある任務をこなさせるためなどである。事前の口振りから、世界の危機に関わる話なのだろう。

「あなたにしてもらうことは簡単です。……この娘を魔王の手から守り通してください」

するといつからいたのか、リオンの背後からひとりの少女が現れた。

その少女は高校一年程度の見た目で、深窓のお嬢様と云われても信じさせる上品さと可憐さを持ち合わせている。質素な目立たない服装が引き立て役となり、少女の可愛さを嫌みにならない程度に際

だたせていた。

セミロングの頭髮にカチューシャをした少女は、身長差のある秀助を不安そうに上目遣いで見つめる。

「この娘はミラ、今回の件で重要な根幹を担っている少女です」
「ど、どうも」

リオンの紹介にミラと呼ばれる少女が、たどたどしくお辞儀をした。ひとつひとつの動作が慌ただしく、まるで産まれたての赤ん坊のようである。

ほほえましさを感じながら、秀助も挨拶をした。不安そうなミラの表情が僅かに和らぐ。おそらく、あまり対人関係を積んでいないのだろう。

「もしミラが敵に渡ればラビリンスシティを巻き込みながら、表界フアー・ジ・アースにも被害を及ぼす大惨事となるでしょう」

囁くような声に少量の熱を込めながら、リオンは警告する。

「敵、ですか。相手は誰なんです？」

「……大魔王、ベールⅡゼファアです」

「なっ、ベールⅡゼファア!？」

意識せず素っ頓狂な声を上げてしまった。

ベールⅡゼファア、彼女もウィザードなら知らぬ者なしといわれるほど高位な魔王だ。その実力は、裏界を掌握していたナンバーワンである金色の魔王ルーⅡサイファアが失脚した今では裏界のトップといっても間違いではない。いったい幾度世界を滅ぼしかけたとか、指の本数でカウントするには腕を後何本も生やす必要がある。はつきりいって、ウィザードひとりの手に負えるような相手では

ない。そんな化け物中の化け物と戦えというのか。

「そして彼女もここではウィザードを襲わない、なんて紳士協定は守らないでしょうね。大魔王ベルはラビリンシティ内のルー||サイファーに与えられた別荘も使っていませんし」

ラビリンシティにおける安全保障がないことに、思わず生唾を飲み込んだ。

秀助が動揺していると、服の裾を掴まれた。視線を下げるとミラが泣きそうな目で見上げていた。

すがりついてくるミラに、秀助は悟る。多分この娘には今自分しか頼れる相手がいないのだと。

それに狙われているのはこの娘なのだ、怖くないはずがない。なのに涙をこらえている。ならばウィザードとして、否、人間として守ってあげるのが筋というものではないか。

世界の危機もかかっている。ここまできて投げ出せるわけもない。秀助は意を決することにした。

「……わかりました。僕がこの娘を守ります」

「承諾してくれると思っていましたよ、槍馬秀助。安心しました。

……ささやかながら軍資金です。有効に使ってください」

どきりとさせられる大人っぽい魅惑的な微笑を浮かべてリオンが差し出したのは、ウィザードなどで取引されているV・（ヴァルコ）という金銭だった。ちなみに日本円換算で一V・は一円に相当する。それが数百万はする高価なウィザード用武器も買えるほどあった。

手渡された大金に秀助は緊張で顔を強ばらせる。

「こ、こんなに？」

「あなたにはこれからラビリンシティ内で行動することになりま

すから、宿泊費などです。それでは、私も動かねばなりませんので……それでは」

云うが速いか、リオンの姿が陰り出す。半透明な立体映像になり現実味を喪っていく。

「え、まだ話が――」

「――期待していますよ、槍馬秀助」

そうしてリオンは秀助の目の前から姿を消した。路地裏には、もう秀助とミラ以外に気配はない。

訊きたいことがまだいくつかあったのだが、突然去られて紡ごうとした言葉は発音されずに飲み込まれた。

「あの、槍馬さん……よろしく、お願いします」

「うん。よろしくね、ミラ」

疑問はまだあれど、ミラを守ることは結局変わらない。いつまにかはわからないが、この娘を守り続ける限り世界の危機は軽減されるだろう。

安心させるため、秀助は頭を撫でてみる。

「あ、あわっ」

「大丈夫。頼りないかもしれないけど、それでも僕、それなりに強いからね」

ミラは最初慌ててみせたものの、照れて頬を染めるとうつむいた。やりすぎるのもよくないかな、と撫でるのをやめて秀助はミラの手を握った。掌は子猫の肉球のように柔らかい。そんな可愛らしい手を傷つけないよう慎重に手を引いた。

「そろそろ表にどうか。路地裏じゃ空気も悪いし」

強引にならないよう気をつけて進みながら路地裏を出ると、ラビリスシティ——その迷宮街と呼ばれる場所に出た。新旧の建物が所狭しに建てられていて、改めて見ると壮観でもある。

そして迷宮街でひととき賑わっている場所があった。そこには縁日のように簡易の屋台が建ち並んでいる。露天には果物を売っている店もあれば、ウィザード用の魔道具を扱っていたりと十人十色の品揃えをしていた。

無数の露天を見る人間もまた数え切れないほどで、わいわいと賑わっている。いや、ここはラビリスシティであるのだから、名の知れていないだけで魔王や侵魔も数多くいるのだろう。一般的なウィザードとして戦っていた秀助にはこの様子は新鮮だった。

「へえ、凄いや。ラビリスシティってもっと殺伐としてるのかと思ってたよ」

なにせ敵対者同士が一堂に会しているのである。お互いに知能があり時に協力する関係といっても、普段は敵対しているのだ。陰悪になってもおかしくはない。

しかしラビリスシティにその傾向は見えなかった。もしくはこの迷宮街が特別なのだろうか。確かにこれだけ数がいたらわざわざ意識しあうのも馬鹿らしくなるだろう。

「うっ……人、沢山います」

秀助の背中にミラが隠れる。これだけ人間がいる場所を見たことがなかったのだろう。秀助ひとりにすら警戒していたのだから、いきなり人が沢山いる所に連れて来られたら怖がりもするはずである。

小動物を彷彿とさせるミラに苦笑しながらも、勇気付けるため繋ぐ手に力を込めた。

「そんなに怖がらなくても平気だよ。別にあの人達がミラを襲うわけじゃないんだから」

「ん……っ」

ミラが秀助の手を握り返す。そうするといくらか安心してくれたらしく、力んでいたものが緩む。対人への恐怖をいくらか取り除けたことに秀助はほうっと息を吐いた。

まるで世間知らずの妹を連れているようだな、とくすぐったくなる。

だが、と気を引き締める。

秀助の任務はミラの護衛なのだ。いつどこから敵が襲ってくるかわからない。背中にも目があるように集中しながら警戒していよう。実際、秀助がその気になれば幼い頃から受けた武術家としての鍛錬、ウィザードとしての実戦経験で叩き上げられた五感などのおかげで、擬似的に背後を視るという行為もできた。

こんなたいいけな少女をむざむざと魔王の手に渡らせるわけにもいかない。

そうやって集中力を高め鋭敏になった秀助の聴覚が、ある日を境に聞こえなくなった声を捉えた。

「――秀助っ！」

＊

沢木権は眼鏡がズレ落ちそうになるのも構わずに知らず声を張り上げていた。

東方王国神社のある大公の森を西に抜け、迷宮街にやってきていた権は馴染みの”あったはず”の背中を見た瞬間いてもたってもい

られなくなった。

稲妻が走った、とでもいうのだろうか。それほど権にとって秀助の存在は衝撃的なものであった。

秀助が声に振り返ると、目を零さんばかりに見開いた。

「権!？」

ああ、と権は安堵する。あれは自分が知っていたはずの秀助に違いない。背中を預けた戦友の姿に相違ないと、そのことに胸をなで下ろした。

眼鏡を中指で押し上げると、手を挙げて答える。

酷く驚いた様子の秀助は、間近にやってきた権の肩を喜びながら叩いた。

「権! 今までどこにいったのさ、あの任務以来連絡寄越さないで。もう何ヶ月経ってるんだよ。生死不明で心配してたんだ」

「すまん、俺も色々あったんだよ。心配させたな。だけどまたお前に会えるなんてなあ!」

意識しないで権の口から言葉が溢れる。自然に出てくる台詞とその充実感に、権は記憶が定着していくのを感じた。きっと数ヶ月前にはこれが日常だったのだ。その事実がすっと胸に落ち、空虚さを埋めていく。

再会の感動を手を叩いて分かち合うと、秀助は疑問に思っ て訊ねてくる。

「でも今までなにやってたの? 権の両親を心配させないために任務の依頼主の人が近衛を派遣して説得したりしてたんだよ? 連絡ならO—P h o n eを使えば月匣以外ならどこからだって連絡できるだろうし……。それになんでラビリンシティに?」

0—Phoneはウィザードの必需品となっている情報端末で、主要機能は一般の携帯電話と変わらない。しかし霊界回路という独自の回線を使用しており、通常の電波障害を突破して通信することができる。唯一、侵魔の展開する月匣と呼ばれる結界内では電波は遮断されてしまうのだが。

秀助の追求に一瞬答えを迷ったものの、この戦友ならば掌返しはしないと、信用に裏付けされた判断の下で権はすべてを話すことにした。

「……実はあの任務で、死んだんだよ、俺。だけど、偶然その場にいた魔王、パール・クール……様に助けられて落とし子になったんだ。それ以来、このラビリンシティに住み着いてるよ。0—Phoneは戦いの時粉々、さ」

「パール・クールの落とし子！？ そっか……権も大変だったんだな。でも、生きててくれてよかったよ。十年來の親友が死んだなんて嫌だからね」

「お前も元氣そうでなによりだよ。それにまた強くなってるんじゃないか？ ガタイも前よりしっかりしてるぞ」

軽口をたたき合いながら、しかし権は後ろめたさを感じていた。悪ガキ時代から一緒だった秀助にも教えていないことが、ひとつだけある。それだけはどうしても口にすることができなかった。

——俺には生前の記憶がない。

そのことを。

厳密に言えば、記憶はある。しかし、所々に欠落が生じていた。そのため虫食いだらけのものしかない。

だがこれだけだったら、権にはたいした問題ではなかっただろう。重要な記憶は覚えているし、人付き合いなども頑張ればなんとかあったかもしれない。それになくなった記憶は、主にエピソード記憶

と呼ばれる今まで体験した出来事のみで、所謂思い出というやつである。なくなることはとても悲しいが、これらはポジティブに考えればまた新しく埋めていくことができる。断片的な記憶は残っているのだから。

身体の動作や言葉など日常生活に異常をきたす部分は一片たりとも損傷もしていなかった。

なら、ほとんど問題はないように思える。が、本当に重要なのは次だった。

それが起こったのは、蘇生するタイミングが死亡してから大分時間が経ってしまったからか、あるいはパールの蘇生が杜撰だったのかはわからない。しかしパールとクルが権の死体を見つけて興味本位で蘇らせた時——権の脳は致命的欠損を負った。

それは過去の自分の体験が、他人事に思えてしまうこと。

断片的に覚えている記憶すべてが夢の出来事と錯覚してしまう。同一人物でありながら、まるで他人の人生を見せられたような言い知れぬ感覚、それにより権は連絡を絶ってしまった。その必要性すらないように思ってしまったのだ。

両親にすら、連絡をする気にはなれなかった。こんな空虚なままで接するのは、あまりに酷い仕打ちだと思ってしまったから。

しかし忘れ去った記憶も完全に消去したわけではなく、パール曰わく『頭の中混乱してるんでしょ。人間って敏感ねー。なくなるんならなくなるでハッキリしなさいよ』とのことなので、特定の記憶に対する回路が混線しているだけだった。

その証拠に、秀助のことを細かく思い出すことができた。そして秀助との記憶もまた他人事のようでありながら——とても、馴染む。彼は親友だということが自然と納得できた。

だから、話さない。こんなこといきなり打ち明けるわけにはいかない。話す時は、すべての記憶が自分のものであると納得した時にしよう。秀助と邂逅した権は、そう決めた。

そうして久しぶりの親友との会話に花を咲かせていると、近くか

ら視線を感じた。何故だか敵意と怯えが入り混じったようなそれに首を傾げる。権は魔王の落とし子をやっているが、主に神社の管理だけしか行っていないので恨まれる理由はないはずである。

その視線の主は秀助の背中にいた。

「あうっ」

権が目を合わせると、びくっと震えて秀助の背中に隠れてしまった。鍛えられた体格のいい秀助の身体は、その娘を完璧に正面から隠してしまうほどに広いのである。

ちよっとした金属細工の施されたカチューシャをした少女の存在に困惑しながら、権は眼鏡越しに秀助へ詳細を求めた。

「……その娘はどちら様で？」

「え、ああ、この娘はミラっていうんだ。僕が護衛することに――」

その時、秀助と権の鍛え上げられたウィザードとしての感覚が殺意の接近を察知した。

思考よりも反射でふたりは身体を動かす。秀助は振り返ってミラを抱きかかえて飛び出し、権も秀助に続き同方向に跳躍する。

そして秀助と権、ミラがいた場所に災厄が招来した。

轟ッ、と紅蓮の炎が地面に直撃し、高熱で地面の表面がバターのよう溶け――熱風が周囲を巻き込んだ。

＊

迷宮街にひとときわ高くそびえ立つ塔がある。まるで天と地を支えるように建つ塔、はたして、この状況でそこに人影があることを理解したウィザードがいただろうか。

下界の狂態を嘲笑を浮かべながら傲岸不遜に見下すのは、ポンチ

ヨを揺らす少女である。

ポンチヨの下は秀助が身に着けている輝明学園の制服、その女子用だった。彼女はその学園に通ってはいないが、この制服のことを愛用する程度には気に入っていた。

ウェーブ掛かった髪の毛を風に揺らしながら、金色の瞳でさながら天上の神のごとき威厳で人間達の狂乱を観察する。

表情は嗤いで固定しながら、少女はひとりつぶやく。

「さあ、楽しみましょう。ウィザード達……あたしの魔の手から、その娘を守ってみせなさい」

童女の声は鈴を転がすようで、そこには紛れもない愉悦が混じっている。この状況を、この少女は紛れもなく楽しんでいた。

誰もこの少女の快楽を注意はできない。誰もこの悦楽を制止できない。

そして、少女はこの破壊的行為を楽しむことを止めはしない。

「——だって、これはゲームなんですもの」

あまねく空往く者の王、大魔王ベールゼファアはグランギニョルを観戦する。

2..群れた獣は強力無比

速度を持った超高熱の火焰が地面を熔解させる。

爆風とそれに吹き飛ばされた瓦礫が、跳び退いた秀助に飛来した。とっさに秀助は宙でミラを抱きしめて庇うと、大小の瓦礫が凶器となって背中に激突する。さらに数千度の熱風が露出した肌を舐め、追い討ちかけた。

歯を食いしばり、痛みに耐えながらも秀助は着地する。

「槍馬さん!？」

「この位、ウィザードならどうってことないよ!」

悲鳴をあげるミラに秀助は平気だと訴える。

事実痛みこそあれ、秀助には怪我どころか火傷ひとつない。速度が乗っていたとはいえ熱で地を溶かす炎である、その熱風を受ければ常人ならすぐさま火傷で水膨れができるだろう。それに瓦礫もあれだけ喰らえば、最低でも打ち身、最悪骨折し臓器に突き刺さってもおかしくない。

しかしウィザードとは身体の強靱さも常人の比ではないのだ。それはひとつ飛びで襲撃地点から二十メートル以上も離れたことがその証明である。

特に幼い時から武術を仕込まれた龍使いの秀助は、まさしく全身凶器。その肉体強度は鋼にも匹敵した。

秀助の真横に権も無傷で着地すると、突然の襲撃者を確認して驚きに声を上げる。

「なんで侵魔が仕掛けてくるんだ!　ここはラビリンスシティだぞ!？」

魔王、その配下である侵魔はウィザードを襲わない。それはラビ
リスシティにおける暗黙の了解である。だが、侵魔はたった今迷
宮街にてウィザードを襲撃した。

しかも数は一体ではなく、

「……なんだ、こりゃ」

権が呆然とつぶやいた。それも無理はない。背後に広がる侵魔の
数は、その個体の強さを鑑みると目眩がするほどに多かった。

それらは総て比較的強力な侵魔、キマイラである。

その一体一体はラビリスシティに来る以前、秀助が戦ったダー
クドールよりも強い。ライオンに山羊と蛇の計三つ首を持ち、炎の
鬣を揺らす威風堂々たる姿は屈強な肉体と合わさってその強靱さを
主張していた。

方々からウィザードや魔王の声が上がる。これだけの数がいれば、
さしものキマイラといえど短期間で殲滅されるだろうが――

「くそっ、ターゲットはミラか！」

秀助が吐き捨てた。

ウィザード達に補足されなかったキマイラ達が総て秀助、正確に
はミラに狙いを定めている。戦闘の目標がこちらなら、今足止めさ
れているキマイラも包囲を抜けてくる可能性は十二分にある。

そしてつまり、協定を無視するということはキマイラをけしかけ
て来たのは、あの大魔王ベールゼファ―に他ならない。

しかも通常のキマイラと形状に差違がある。おそらくこれはベ
ールゼファ―により強化された――ベルキマイラとでも云おうか――
ものだろう。

ラビリスシティを訪れて早々にこの数の特注侵魔による襲撃、
しかも魔王であるリオンが離れた時を狙ったとなると、ベールゼ

フアーは最初からこちらをある程度捕捉していたに違いない。

最大にして最強の敵であるベールⅡゼフアーに早期発見をされたことは重大な失敗だ。この場を切り抜けても、こちらの行動が筒抜けでは安心などできるはずもない。まさしく一寸先は闇、である。

「オイッ、秀助！ その娘が狙われてるってどういうことだ!？」

目の前が暗くなっているのを感じた秀助は、権の声ではっと我に返った。例え進む先が暗闇であっても、ここを凌がねばその暗闇にすらたどり着けない。

秀助は停止しかけた思考を振り払って敵を睨みつけた。

「後で話すよ！ 今はここを離脱したい、協力してくれる!？」

「誰に云ってるんだよ、相棒！ —— お前にもちゃんと話してもらいたいからなッ」

権は口元に不敵な笑みを浮かべて応えれば、ベルキマイラが吼えた。

「Gu、G A A A A A A A A A ! !」

一体のベルキマイラが地表を蹴爪で抉り、飛び出す。弾丸さながらの驚異的な速度、二十メートル以上もの距離をあっという間に詰めてくる——それに秀助も対応した。

ミラを後ろに庇い、秀助は虚空に両手を突き出すと手首が水に埋まるように消失する。そこで何かを掴む感触を得ると、両手を虚空から引き抜いた。

すると両手に握られていたのは、巨大な機械仕掛けのトンフアーだった。

手首のスナップで素早く半回転して構えたその名は、トンフアー旋棍型箒

〈ドラゴンブルーム式〉。

「槍馬流迎撃術——」

左足を前に踏み出し、腰を溜めてさながら強弓のように右腕を引き絞る。

ベルキマイラはその秀助に喰らいつこうと頭上で凶悪な牙の並んだ顎^{アギト}を開き、

「——《九頭竜》ッ！」

だがそれより、槍の如き神速の一撃が胸部を打つのが速かった。ベルキマイラと激突した衝撃で秀助の足下が陥没する。が、本人は不動。

目にも留まらぬのカウンター、それが鋼鉄の筋肉を突破しベルキマイラの肋骨を砕いた。三つ首が同時に声を失う。

神速のカウンター《九頭竜》、後手でありながら先手を凌駕する龍使いの技法だ。秀助のそれは並の龍使いには扱えぬ《九頭竜》に槍馬流の理念である『槍のような鋭さと突貫力』によりアレンジされたものである。

動きの鈍ったベルキマイラヘトンファーを叩きつけトドメを刺すと、風化してこの世から消滅した。

しかし、一体を葬った程度で決着がつくほどこの戦場は甘くない。

「秀助ッ！」

消え去ったベルキマイラの背後から、また新たなベルキマイラが接近していた。

「チィッ」

速い。

巨体に似合わぬ侵魔屈指の走破力をフルに活用していた。

秀助だけなら防御と同時に吹き飛ばなりして対応できるが、それではミラを危険に晒す。かといってこのタイミングでは他の手段は使えない――。

「遮れ、アイゼンブルグ！」

そんな秀助の前に浮遊する巨大な積層シールドが割り込んだ。

二つに別れた飾り気のない無骨なシールドがベルキマイラの突進を受け止める。僅かに装甲が軋むものの、積層構造の盾は完全に威力を相殺した。

相手が動きを止めたのを見るや、秀助はシールドを飛び越えベルキマイラの頭上を獲った。

体内の気、龍ロシを循環させそれをトンファーにも影響させる。

「《竜炎》ッ！」

龍使いの能力により炎を纏ったトンファーが無防備な背中に鉄槌のように落とされた。背骨をへし折り、体内を紅蓮が焼く。ベルキマイラは苦悶の悲鳴を上げて姿を消した。

秀助は権に振り返って親指を立てた。

「権、助かったよ」

「ま、防御は俺の役目だったからな」

そういつて権は手元に自立可動積層盾型箒へアイゼンブルグを呼び戻した。

突然現れた秀助と権の箒、両者の武器は巨大だ。とてもではない

が隠して持ち運ぶことは不可能である。では、いったいどこから取り出したのか。それはウィザードが持つ特殊な能力に係関係していた。その名は月衣、かぐやウィザードの持つ個人結界である。空間を隔離する月匣の簡易版ともいえるこれをウィザードは常に展開している。この結界は人間などの生命体以外を格納する能力があり、ウィザードは月衣を使って武器を運搬しているのだ。

月衣の能力はそれだけではない。この個人結界は展開しているウィザードを常識から遮断してくれるのである。銃弾を受けても怪我はしないし、宇宙でも生身で活動することも可能だ。深海を何食わぬ顔で遊泳することも出来る。

そして侵魔が展開する月匣という空間にも侵入、活動を可能にしてくれる優れものである。

これらの有用性から侵魔にも逆輸入されてしまっている。もつとも、侵魔は常人の活動を不可にする月匣を作り出すのだから常識的手段による打撃を受けない、などは対して重要ではないが。

ベルキマイラを斃した秀助と権は、ふたりで行う連携を懐かしく思っていた。

数ヶ月前までは秀助が攻撃役、アタッカー権がそれをフォローする防衛役なのが当然であった。ある程度ひとりで戦うことに慣れたふたりには、その戦闘パターンが戦場にありながら心地良く感じる。

しかし今は懐旧に浸っている場合ではない。

「だけど秀助、これはまともにやり合うには分が悪すぎる！」

権も切羽詰まった様子だった。

ウィザードらの戦闘で数は確実に減っているが、ミラを標的にしているために続々とこちらに集結してきている。一体つつ相手にできるなら斃せない敵ではないものの、一斉に襲われたならミラを守りながら戦う絶対の自信はない。

秀助は戦闘で高ぶった思考を落ち着け、冷静に判断を下す。

「……ここは逃げよう。ウィザードだけの街なら被害も心配ないし、こっちはミラを守り通せば今は勝ちだ」

強化されたキマイラの集団といっても、これだけの数のウィザードにかかれば人的被害を出さずに対応できるだろう。ラビリンスシティだからこそ可能な逃げの一手である。

権も頷いて同意すると、秀助はトンファーを手放してミラの背中与膝裏に腕をまわして抱き上げた。

「しっかり掴まってねっ」

「は、はい！」

ミラが首に腕をまわしてしがみつく。普段なら緊張させられるだろうが、今の秀助にそんな余裕はない。

秀助の傍らには手放した一对のトンファーがひとつに合体して、不自然に浮遊していた。長方形で板状のトンファーはさながら空飛ぶスノーボード。

それに飛び乗るとトンファー、ドラゴンブルーム式は物理法則を意に介さずに舞い上がり、ベルキマイラの集団とは逆方向に飛び出した。

向かい風に僅かに目を細め、秀助は建物を背後に流しながら疾走する。ミラは恐怖で目をぎゅっと閉じ、首にまわす力を強めてくる。自分の希望的観測を込めて秀助は呟く。

「逃げられたかな……？」

「いや、まだみたいだぞ」

空を往く秀助に追隨する権が口にしたのは、期待していたものはなかった。

そして権も一対の積層シールド状の箒、アイゼンブルグを両足で踏みしめスキーのように空を滑っていた。盾の後部が展開されて、そこから噴き出すエメラルドの光を推進力としている。

魔法使いの箒とは、得てして空を飛ぶものと相場が決まっている。現代の魔法使いの箒も類に漏れず、飛行能力を有しているのだ。

「さすがに相手も足が速い——！」

秀助達にベルキマイラが追いつがる。地を這うものでありながら、その屈強な肉体が生み出す速度は尋常ではない。左右に曲がって翻弄してみるが、直線になると距離が見る間に縮められていく。

普通なら振り落とされてしまうだろう無茶な軌道を描きながら、ふたりは建物の間を駆け抜ける。壁ぎりぎりを通過したせいで建物の窓ガラスが衝撃で連続的に碎け、雪のように地上へと降り注いだ。無論ウィザードと同じ常識遮断の月衣を纏う侵魔にこんなもので傷を付けることなど有り得ない。

屋台や散乱した果実を踏みつぶしながら駆けるベルキマイラの数是最初より減っている。ここまで来るにもウィザードは数多くいたからである。ずっと逃げ続けていればやがては総てを撒けるだろうが、それまで捕捉されないでいられるか――

ドラゴンブルームを傾け空気抵抗でブレーキを掛けながら秀助が高層ビルを強引に曲がると、頭上に影が差す。

「G a a a a I I I！」

そこには壁に爪を立ててしがみつくベルキマイラの雄々しい姿があった。

回り込まれたと瞬時に理解するが、既に獣の臭いすら漂う程に接近を許してしまっていた。

「こんの——ッ」

喉の奥底から烈火の舌を覗かせるベルキマイラに、秀助はとっさにドラゴンブルームの後部へ重心をズラして前部を跳ね上げた。丸みを帯びた前部が破城槌のようにベルキマイラに叩き込まれる。

「GUウツ!？」

ドラゴンブルームの出力でくの字に身体を曲げるベルキマイラごと無理やり急速上昇する。ビルさえ見下ろす高度に達すると、ベルキマイラを放り出し、拳を握った。

その拳は数年にも及ぶ修練により鍛えられた、これだけで剣や槌にも勝るとも劣らぬ破壊力を内包した凶器である。

そう、これは技などではなく単純に拳が強力になりすぎて常時武器に変貌しているのだ。

しかし敢えてこの状態を龍使いの言葉でいうならば、《竜爪》と呼ばれる破碎の拳。

そしてこの腕は視覚化できるほどの高圧電流を纏い、

「——《雷竜》ッ!」

落とす。

紫電を纏わせた拳をベルキマイラの鼻っ柱に叩き込むと同時に、稲妻が落ちた。

雷で形作られたそれはまさしく一匹の竜である。それが拳の一撃に便乗して解き放たれたのだ。

この二重攻撃に耐えられる道理はない。

ウェルダンにされ力を失い落下するベルキマイラを、秀助は両手でミラを抱えなおしながら確認した。しかしその表情に安堵はない。一体の撃破——その代償は大きい。少しでも足を止めてはいけな

いほど切迫していたのに、足止めされてしまった。

重力を無視してベルキマイラ達が、ビル群を駆け上がってくる。目を爛々と光らせた魔獣達が獲物に到達するために必要な時間は、これだけで充分であった。

「逃げろ、秀助！」

「くそッ、」

迎撃しようにも数はあまりに多く、
権が防御しようにも数は無情で、
侵魔は宙にいる秀助とミラに向けて牙を剥いた。

＊

「……ねえIris、なんだか騒がしくない？」

ラキと呼ばれる女性が、屋台で購入した鯛焼きを頬張りながら空を見上げた。

ラキの右手に嵌められた指貫グローブ、その甲側に設置された四角形の物体が中央にある平面の輝石を明滅させながら応える。

『戦闘のようですね。最近協定を守らないで暴れ回るろくでなしが増えて困ります』

四角形の物体、それはAIがインプットされたシステムボックスだった。

四六時中あの長剣型箒を出しておけるわけもなく、あれを月衣に収納している間はこうしてAI部分だけ抜き出しているのである。

中央の輝石、プラーナが濃縮され結晶化した——魔石、あるいは賢者の石と呼称されるそれが空気を震わし擬似的な音声も作り出し

ていた。ちなみにこの石がIrisの人格などを司る中核でもあったりする。

Irisの言葉にラキは左手に抱えた袋に入った鯛焼きを次々と消費しながら、うんうんと何度も頷く。

「だよねえ。人の迷惑を考えないのかな。何のための協定なんだか、まったくわからなくなるよ」

『……ワタシは先日のラキのことを皮肉ったわけなのですが』

「ええ！？　だってあれは正当防衛じゃないの！」

『限度を知らぬ抵抗は過剰防衛というんですよ、ラキ。それと右手で食べないでください。滓がワタシにかかってます』

Irisの指摘に不満そうな顔になりながらも、ラキは鯛焼きを食べることはやめない。まだ袋に半分ほど鯛焼きが残っており、このペースでも食べ終わるまではまだ時間がかかりそうだった。

ラキは間食をしながらも、戦火が迫って来ているのに気づく。ガラスが地面に叩きつけられ甲高い音を立てたのを鼓膜が捉えた。そのすぐ後にラキの頭上をふたりのウィザードが箒で通過していく。

「GOOOOOOu u u！」

それを追っていたキマイラの一体が、すぐそこで怒声を放った。

進行先には鯛焼きを口にするラキ。距離はもうなく、キマイラは邪魔者を轢いてしまおうと足に込める力を強めた。

肉が断たれる。

引き裂かれた血管からは鮮血が噴き出し、キマイラの眼前に広がった。

鼻腔に充満する血臭、だがキマイラは地面を転げながら違和感を覚える。

なんで自分の身体が半分に活断され、それが視界にあるのだろう。

殺す、はずなのに、なんで、自慢の足がなくなっているのか。どうして、地を舐めているのか。ああ、それは下顎が視界の先にある活断された半身の方についているからだ――。

絶命したキマイラには目もくれず、ラキは銜えていた鯛焼きを手も使わず器用に口に入れると咀嚼し、嚥下する。

月衣から取り出した長剣型箒、その刀身に付着した血糊を払いながら、ラキは顔をしかめた。

「うー、血の味しかない」

『人間の味覚は嗅覚の影響を多大に受けますからね』

グローブからIrisを取り外すと、ラキは箒のオプションスロットにセットする。小気味良い音を立ててパーツが嵌った。

鯛焼きの袋を月衣にしまい、ラキは箒に腰掛ける。

「人の至福の時間を邪魔するなんて……許すまじっ」

箒のウィングを展開し、一気に上空へと飛び上がる。十秒とかわらず眼下には大量の建物が広がった。

『十時の方向に直線で九十八メートル先、敵対認定をした侵魔がウィザードと交戦しています』

「そっちなね!」

箒の剣先を調整して弾丸のように飛び出す。空気抵抗は月衣のおかげで微風に吹かれる程度しかなかった。

ビルの壁を駆け上がるキマイラの集団がぐんぐんと近くなる。大きくなってゆく敵集団目掛けてラキは手を突き出した。

魔法陣が展開され、ラキは呪文を紡ぎ出す。

「……絶対の光を持って闇を払う。曙光が総てを無に返す。魔を駆逐するのはわたしの光——」

魔法陣に眩い光球が生み出される。それは急速に肥大し、膨張し、やがて臨界を迎えた。

「絶対必中ウ！ 《サンライトバースター》——ッ！！」

光が無数の矢となり軌跡を残しながら疾走し、それらはたったひとつの例外もなく、キマイラの集団を串刺しにした。

2..群れた獣は強力無比（後書き）

絶対必中？日本語を話してください。どうも刹那です。

とりあえずネタとノリと悪ふざけの台詞だから突っ込まないでくださいねー。

サンライトバースターじゃダメージ上限のせいでベルキマイラを一撃で倒せないとかも。まあ使いたかったんだからしょうがない。ちなみにサンライトバースターはアニメDVD三巻目初回番に、ベルキマイラは一卷のデータ使っています。

眠いのでこれにて。

3.. 天空にて語る

打つ手なし———そう思い、秀助がせめてミラだけでもとベルキマイラに背を向け庇おうとした時だった。その矢の軍勢が現れたのは。

光を凝固させた矢が、横殴りの雨であるかのようにベルキマイラに降り注いだ。

圧倒的な暴力。

秀助の目の前で光の雨は総てのベルキマイラを余さず捉え、肉達磨のサボテンを無数に生み出す。

直撃した衝撃でベルキマイラの身体は秀助に達する前に、見当違いな方向へと流され落下していった。

今まで自分達を苦しめていた侵魔が一掃された事実、秀助と権は呆氣にとられた。あまりにもあっさりとした幕引き。

そこへ箒で悠々と飛行する女性が顔を出した。

「お、貴方達が追われてたウィザード？　大丈夫？　まさかわたしの魔法掠ったりしなかったよね？」

今の侵魔を殲滅したであろう女性、ラキが箒に腰掛けて朗らかにいつてのけた。

先程の矢はサンライトバースター、標的を追尾し絶対に命中する魔法である。なかなか優秀な攻撃魔法であるが、普通こんな威力がでただろうか。

そんなことをやってのけた当のラキはというと、鼻にかけた様子もなく当然のような顔をしているのだから底が知れない。または自覚すらしていないのか。

「……ん、どうしたの、みんな黙っちゃって？」

不思議がるラキの言葉によって、今まで真っ白になっていた思考がふたりに戻ってきた。

そうして最初に口頭に乗ったのは、やはり感謝の言葉である。

「い、いや……その、ありがとう。助かったよ。援護してもらわなかったら、今頃僕もこの娘もただじゃすまなかったからね」

「わたしはあの侵魔へ私怨晴らしたただけなんだけどなあ。ちようど一カ所に固まってたし。でもなんであんな数に追い回されてるの？

……もしかして魔王に喧嘩売ったとか？」

「……喧嘩は、売ってないよ」

語尾の辺りで声を潜めるラキに、秀助は肩をすくめて否定した。

狭界で魔王と敵対する、というのははっきり云って自殺行為である。何故ならば、表界で戦う魔王とそれ以外の世界で戦う魔王の戦闘能力はまったくの別物なのだ。

表界、地球が魔王や侵魔、冥魔などという化け物の危険に晒されて今尚健在なのは何故か。それはなにもウィザードが尽力しただけではない。

世界結界。

そう呼ばれるものが表界全体を結界で包み込んでいるのだ。その巨大な結界は月匣や月衣と同じ種類のものでありながら、常識遮断の結界とは相反するものだった。

——世界結界が淘汰するのは非常識である。

魔法など存在しない。妖精はいない、悪魔はいない天使はいない魔法使いなどもってのほか。そんな非常識なものは存在しない。してはならない。そう否定することにより、表界からは人間が考えた常識的なもの以外を駆逐する。

世界結界は裁定者プリンシパルと呼ばれる過去の偉人達が世界の法則や常識を発見した時に、世界を科学という名の常識で覆ったのだ。いや、こ

れは正しくない。林檎が地面に落ちるのは重力があるためである、地球は太陽の周りを公転している、などの法則は発見されたのではなく、その偉人が定めたものなのだ。当人達さえ知らぬうちに、無意識で。

やがて世界中の人間の常識という想いを得て、世界結界は非常識を許さない防御壁となった。人々が常識を信じ続ける限りこの世界結界は維持され続ける。

だが、この世界結界はウィザードにとっても驚異であった。なにせ放逐される非常識には魔法使いも分類されている。なんと世界結界は今まで外敵から身を守ってくれていたウィザードまで排除してしまうのである。

ウィザードは力を失っていき、最悪その人間が世界に存在していたという事実すら抹消されてしまう。それはウィザードとしてはどうしても避けたかった。

そんな時に編み出されたのが月衣である。月衣はウィザード個人だけの小規模な結界であり、これで外界の法則とは別の理で行動することができた。世界結界の影響を受けなくてすんだのである。

しかしこれは既にご存知の通り侵魔に流用されてしまった。

月匣。それは侵魔版月衣といっても差し支えない。ただし規模などがウィザードのそれとは違った。

月匣は、構築した空間の因果を切り離すものである。展開された場所と結界内は似ていながら、まったくの別物だ。いってしまえば表界の一部というジオラマのレプリカを作り出し、そこで暴れるのである。故に月匣内の損害は現実に影響を与えない。しかしここに捕らわれた一般人は無力化されてしまうので危険なのだ。

そのようにウィザードも侵魔も対世界結界用の技法を編み出したわけだが、それでも世界結界が表界を守る壁になっているのには理由がある。

魔王とは巨大なプラーナの塊だ。しかしプラーナが膨大であれば膨大なほど、世界結界は侵入させまいと抵抗する。なので魔王が表

界に侵入する時には、写し身というプラナを削減した分身を送り込む。無論それは本体とは比べ物にならないほど脆弱である。それでも、ウィザード単体と比べれば圧倒的に強いわけだが。

しかし世界結界は表界しか守っておらず、よってこのラビリンスシティでは魔王は大量プラナ削減したものではない。通常よりも数倍強力なのである。

もし喧嘩でも売ったならば、間違いなく瞬殺されるだろう。

——そして正確には、今の秀助は喧嘩を押し付けられたのである。今更ながら、大魔王と敵対したことに後悔をせざるを得ない。若干頬肉を引きつらせた秀助にラキは目を丸くする。

「え、やっぱり魔王が相手なの？」

『侵魔に追い回されるのなら、手引きしているのは魔王に間違いないでしょうからね』

突然箒からの声に、ラキ以外の三人はぎょっとする。視線を集めた長剣型箒が申し遅れました、と再度電子音声をあげた。

『この長剣型箒に搭載されたA I、I r i sです。以後お見知りおきを』

「あ、わたしはラキね。あなた達は？」

いわれて、まだ名乗っていないことを思い出した。命の恩人に訊ねられては応えないわけにいかない。

「槍馬秀助です。槍に馬と書いて槍馬、秀才の秀に助太刀の助で」「沢木権。権は選挙権、とかの権だな。秀助の窮地を救ってくれて感謝してる」

「それと、この娘がミラです」

最後にミラが秀助の腕に抱かれながらハムスターのようにこくるとお辞儀をした。

自己紹介を訊いて、ラキは人差し指を口元にあてる。

「ふたり共変わった漢字があるんだね。槍に権かー」

『槍馬は相馬の当て字でしようね。権、は今では古典の教科書くらいでしか拝見しませんね』

「それで、そのミラちゃんは見たところウィザードじゃないみたいだけど、もしかしてその娘が魔王にでも追われてるの？」

「そうなのか、秀助？」

ふたりが秀助とミラに注目する。権にも後で話すと先送りにしたので、現状では秀助しか知り得ないのだ。

ミラは自分の話題が出て恐縮したのか、縮こまりながら秀助の制服を小さな手で握りしめた。

今自分達がラビリンシティ内で対応してしまった侵魔をけしかけたのが、あの大魔王ベールⅡゼファーである、と闘い終わってしまってから告げるのに僅かばかり逡巡して、しかしだからこそ話しておくべきだろうと判断する。

秀助はラキの予想に首肯して、ミラを任された経緯を大まかに話した。そもそも詳しく話そうにも、限られた情報しかないのは秀助も同じなので簡単に終わってしまう。

魔王や冥魔、世界の危機に関することであるという説明。

その話を聞かされたふたりは、やはりリオンⅡグンタが表界を守ろうとしてミラを秀助に託したらしいことと、今の侵魔はベールⅡゼファアの配下のようなのである、のふたつに着目した。

「リオンⅡグンタがベールⅡゼファーから表界を守ろうとしてる、ねえ。ただ事じゃなさそうだね」

『両者は魔王の中でも比較的頻繁に行動を共にしているとデータがあ

ります。この両者が対立しているのは気になりますね』

「魔王が冥魔から表界を守るのは、将来自分達が手中に収めようとしているのに消滅させられては困る、という理由があるから理解はできるな。それでも、何故大魔王ベールⅡゼファーに対立するんだ？ ベールⅡゼファーの手引きで冥魔が侵攻したんなら逆に手を貸しそうなものだが……」

「それに、なんでミラを狙っているのかもわからないよ」

断片的な情報からしか推測することが出来ずに、唸り声が空に響いた。

己の利益を優先する冷酷非情な魔王達の中でも比較的——上辺だけかもしれないとはいえ——友好な関係を築いていたふたりが対立するとは考え難い。確かに魔王は自分の利益にならないと判断したら同胞を即座に裏切るとはいえ、いまいち腑に落ちなかった。

対立する友好であるはずの魔王、知能なき冥魔、狙われるミラ、世界の危機。

現状では不明な点ばかりである。

それに、何故ミラが狙われなければならないのか。見たところプラナ量などはイノセントと大差なく、しかし月匣で行動するだけなら辛うじて可能な程度の微小な月衣のようなものを纏っている。月衣以外は常人と代わり映えしない少女がこの世界の危機における重要なファクターなのか——。

『悩むのも結構ですが、なにか忘れてはいませんか』

思考が袋小路に入りだした頃 Iris が割り込んできて、脳内に漂っていた先の見通せない靄が霧散する。

自分の筈に邪魔されたことにラキはご立腹の様子で、ばんばんと尻に敷いた筈を叩く。

「なによー、せっかく久々に頭使ってるのに。なんで貴女が邪魔するのよ」

『ワタシはAIであるからこそ思考を重要視する今のラキの態度は好感を抱くに値します。が、そろそろ撤収することを皆さんにも推奨させていただきます』

それで秀助や権も気づいた。内側に意識を埋没させていたからわからなかったが、眼下に人が集まりだしている。箒に乗ってこちらに向かってくるウィザードもいた。あまり長居してやってきたウィザードに事情を詮索されるのは得策ではない。

秀助はミラを魔王に任されたのである。不信な目、はあまり向けられないだろうがミラが好奇に晒されるかもしれない。なにより彼女は重要な存在である。ウィザードやその組織にこの件が伝達されれば、保護されてしまう。そちらの方が遙かに安全ではあるのだろうが、魔王に託された少女なのだ。対応が良いとは思えない。

それに世界を守護する側の人間は、迷わず大を生かすために小を切り捨てる類の人種だ。それは守護する側からしてみれば限りなく正しいことであるけれど、正論は必ずしも万人を納得させるには至らない。

ミラを付け狙うということは、過去の事例などからも察するにミラが死ねば世界の危機はなくなるという可能性もあるかもしれない。そうになったら自由なフットワークは望めないし、秀助は腕の中の少女を失うことになる。

気分は、よろしくないに決まっていた。

万が一それしか方法がないのならば別としても、不明瞭なことが多い今はウィザード組織への協力要請は急がない方がいいかもしれない。

「とりあえず、僕はここから逃げるよ。落ち着いて考えたいことも山ほどあるからね。他のウィザードにもあまり簡単に話せることじ

やないしさ」

「待て待て、俺もついていくぞ。こんなに訊いて放ってはおけないしな。毒喰らわば皿まで、だな」

それに落とし子としてはあまり知らないウィザードとは関わりたくない、と苦笑する。権自身にはなくても、主であるパール・クルに恨みを抱く者は数え切れないほどのいるのだ。落とし子も難儀なウィザードであった。

権が落とし子であると明かしても気にした素振りを一切見せないラキは、逃げようとする秀助の肩を叩いた。

「わたしも協力するよ、秀助くん。成り行きでも訊いちゃったしさー。このままはい、さよならはできないよね、ウィザードとしても人としても」

ラキはウィंकをしてみせ、そう言った。

ふたりの言葉に胸打たれたのか秀助は感動しながら、頭をさげた。

「みんな……ありがとう」

「あ、ありがとうございますっ」

秀助に抱えられたミラが緊張しながらもお辞儀をすると、バランスを崩して危うく落下しそうになる。

そんなミラを抱えなおして、秀助は頬をゆるめた。

「あ、でもわたしも後で話したいことがあるからみんな聞いてね。まずは落ち着かないと。人気はない方がいいよね」

『ここで人氣がなく落ち着ける場所、というのは限られそうですね』

ラビリンスシティの経験が一切ない秀助には検討もつかない。リ

オンから提供された費用で宿泊しようにも、今回目立ち過ぎてしまったので避けた方がよいだろう。どこか森の中にでも姿を隠そうか。すると顎に手を当てていた権が控え目に手を挙げた。

「場所なら……まあ、ないこともない。一応宿泊も可能な場所で」

なんだか、苦虫を噛み潰したような表情をしていた。あまり連れて行きたくはない、という感情がひしひしと伝わってくる。

権は陰鬱に溜息を吐いて、

「俺の提案した場所でいいなら、ついて来てくれ。……あまり、オスメはしたくないんだけどな」

＊

「ふぁ？」

ツインテールの少女が焼き芋を頬張りながら振り返って発音した言葉は、文面に表せないほど不可思議で間抜けなものであった。

森の中にでかでかと建造されている東方王国神社、その境内には枯れ葉の燃え滓が山を作っている。色を失った枯れ葉の群はまるで陽光を受けながらも横たわる暗闇である。

鈴付きリボンで髪を結った巫女服もどきの少女——超公パールⅡ
クールは両手に袋一杯に詰め込んだ焼き芋を抱え、その内一本を口に銜えたままだった。

「ですから、」

面食らった様子のパールに、権は頬を緊張でひきつらせながら再度己が主に問い返す。

「友人である槍馬秀助と、彼女らふたりをしばらくここに住まわせたいのですけど」

もぐもぐと焼き芋を噛み締め、慌てて黄金色のそれを可愛らしい喉を上下して飲み込むと、パールは目を厳しくした。

「い、いきなりなにを云い出すかと思えば……。なんでパールちゃんさまの為にある高尚で豪華絢爛なこの神社に、自分の落とし子でもない人間を住まわせなきゃいけないのよ！ 駄目に決まってるでしょう、駄目に。そんなことでパールちゃんのおやつタイムを邪魔するなんて……。万死に値するわ」

その量でおやつなのか、とは秀助と権、ミラにラキやIrisも追求することはない。何故ならパールから不穏な空気が発せられていたからだ。

こんがり焼けた芋の表面みたいな色をした黒いプラーナを漂わせて、パールは体軀を怒りで小刻みに震わせる。頭の鈴が小刻みに鳴った。

リミッター
世界結界のないラビリンスシティで、パールⅡクールは何物の妨害を受けることもなく片手に目を瞞るほどのプラーナを集めた。

「もうムカついたんだから！ このまま消し飛ばして——」

「パール様！ 彼らは大魔王ベールⅡゼファアの計画を邪魔しようとする者達なんですよ！」

あまりに沸点が低いパールの行動。彼女が膨大なプラーナを集めたのを感じ取って権は声を上擦らせた。パールが片手間で集中させた力でさえ、まともに喰らったら命が刈り取られるレベルである。

消し飛ばす、などの発言も彼女にとっては簡単に有言実行できてしまう言葉であり、躊躇う倫理観もなければ他人に逆らわせるような半端な力の持ち主でもない。力がある故にパールⅡクールはどこまでも独善的、天上天下唯我独尊なのである。

だがパールⅡゼファアの名前が出て、パールは一方的な怒りで叩きつけようとしていた破壊を中断した。

「……パールⅡゼファアですって？」

ええ、と権は頷く。宿敵、と勝手にパールⅡゼファアを目の敵にしているパールにとってその名は聞き捨てならなかった。

元はといえばパール自身がパールⅡゼファアの計画に槍馬秀助が関わっている、といていたのだから最初に気づいていて欲しいものである。思わず口を滑らせそうになり、権はすんでのところで飲み込んだ。

「パールⅡゼファアはその彼女、ミラを付け狙っているようにして。その娘をリオンⅡグンタから託されたので、この三人で護衛しているんです」

「へえ、あのリオンにね。このあたしにベルのことを教えたのも彼奴だったつけ。ふふんっ、どうやらこのパールちゃんさまの偉大さをわかってきたみたいじゃない！」

もっと崇拜なさい尊崇なさい、と上機嫌にパールは謳う。その彼女が邪魔をされた、と感じないタイミングを見計らって権は訊ねた。

「なので、この東方王国神社で匿っていいでしょうか？」

「いいわよ。あのベルが手に入れたがってたものを先に奪い取る……最高じゃない。あはっ、ざまあ見なさい、ベル！ ついに鼻をあかしてやったわ！」

巫女服の裾を揺らして舞いながら高らかと哄笑するパールが怖くなり、ミラは秀助の背に隠れる。ラキはパールをおっかないなあと思いつめながら微笑した。秀助は権の主に前途多難な予感を覚え、権は疲れて眉間を揉んだ。

——こうして、東方王国神社での生活が始まったのである。

＊

大魔王ベールⅡゼファーにとって、ウィザードとの戦いはゲームである。

ウィザード側が必死になるのが滑稽なほど、ベールⅡゼファーは駆け引きや戦場という名のゲーム盤を楽しんでいた。

魔王というのは、人間とは寿命などの規格が大きく逸脱している。何千何万何億と姿も変えずに生き続けるのである。つまり毎日が冗長であり、張りがなく、つまらない。

だからこそ、相手が必死になってくるこのゲームとやらはこの上ないほどの娯楽となってベールⅡゼファーを魅了するのである。

しかし、ベールⅡゼファーは天性の負けず嫌いだ。やるからにはどんなに小さなゲームとて勝つつもりでことに臨む。

ベルキマイラをもあらかた撃破されたベールⅡゼファーは、遙か遠くの東方王国神社を見つめていた。

「まさかあのパールの落とし子に関わってくるなんてね。なんていうか、つくづく鬱陶しい娘よね」

一方的にライバル視してくるパールに幾度となく計画をおしやかにされたことのあるベールⅡゼファーは、パールという駒の登場に柳眉を寄せた。

しかし、一瞬後に現れたのは唇の両端をあげたアルカイックスマ

イル。

面白い。こういうトラブルやアクシデント、珍入者などがあるからゲームはやめられない。

「さて、次はどうやって攻めようかしら」

ポンチョを揺らしながら、ベールⅡゼファーは楽しそうに思考する。様々なパターンが脳裏をかすめては消えていった。

「つかの間の休息を与えてあげる。頑張ってあたしを楽しませてね、ウィザード」

ベールⅡゼファーの姿は闇となり蠅となりあるいは霧状になって、そこから姿を消してしまった。

残ったものはなにもなく、

魔王の残り香さえ、風に吹かれてなくなった。

*

おそらく、ここはラビリンスシティのどこかにある住居スペースだろう。

華美な装飾もなく、貧相というわけでもない。特徴のない内装をした一室、その窓際に佇むものがいた。

真っ赤に燃える髪をポニーテールにして、肩にロープ引っ掛けた女性である。顔立ちは幼さを覚えるほど生気に満ち溢れていながら、行動ひとつとっても子供っぽさはなくピアノを奏でる奏者のように優雅で繊細だった。

彼女は窓からベルキマイラが現れ、消えていくまでを見ていた。魔王の視力ならば、別段難しくはもない。

それでも建物の死角などはある。だから見ていたといっても一端

だけであつた。

でも、この魔王には確信がある。これで大丈夫だと。

「まず、第一段階はクリアか」

このまま万事上手く行くか、と不安も感じつつ魔王はつぶやく。
急拵えの計画である。上手く歯車が噛み合うかはすこしばかり不安
だった。なにせ、この魔王は万能ではない。未来を易々と見通す力
もない。

だが、それでも魔王がことをなすには充分であつた。

「姫様を守ってやりなさいよ、騎士達^{ウィザード}。世界も守りたいならな」

魔王ユダールカエサルは、なにを考えているかわからない言葉を吐
いてひとり窓の外を眺め続けていた。

3.. 天空にて語る（後書き）

文化祭で更新が遅れましたー、刹那です。

うん、そのくせ今回は説明回なんだ。ごめんなさい。あまり進展はしていません。

しかしようやく三人が合流しましたので、ようやく中盤になりました。次回からは東方王国神社にて日常的なシーンになるんじゃないですかねー。今までは説明しながら戦ってばかりでしたから。

ではでは。

4…胎動、脈動、鼓動

「それで、ラキさんの話ってなんなの？」

八畳間の和室で、秀助は卓袱台^{ちゃぶだい}を挟んで向かい側に座っているラキに訊ねた。

場所は東方王国神社本堂から少し離れた位置にある居住スペース、その和室のひとつだ。東方王国神社には旅館と見紛うばかりの部屋の数が用意されているのである。もともと、普段の使用人数は雀の涙程度すらないのだが。

ずずずつ、と煎茶をすすっていたラキは湯呑みを卓袱台に置いて、思い出したように頷く。

「ああ、そうだった。わたしもみんなに話しておかなきゃいけなかったんだ。ちよつとばかり厄介なことだしねえ」

『ある意味、貴方達は爆弾を抱えましたね』

「……ただでさえ大魔王なんてのが相手なのに厄介事はまだ増えるのか？」

辟易した様子で秀助の隣に座る権は卓袱台にひじを突く。もう片方の手でズレた眼鏡を中指で押し上げた。

秀助のもう片側にはミラがおり、お茶と卓袱台中央にある煎餅を見たことがなかったのか、目を輝かせている。見た目からして和な物とは縁遠そうなのは想像に難くはなかったのだが。

「大丈夫大丈夫、大魔王が相手とかよりは全然インパクトないからさ。それにミラちゃんは秀助くんを守ってもらってもんねえ？」

「え、あ、あう……」

ちょこんと座布団の上に正座をし、おっかなびつくりと煎餅を口にしていたミラが顔をあげた。

いきなり自分に話を振られたことに動揺したのか、煎餅をかじったまま硬直する。まるでハムスターみたいな仕草だった。

それに母性を刺激されたのか、ラキがミラの身体を抱きしめて頭を撫でる。

「もうっ、この娘はぬいぐるみみたいで可愛いなあ！ うひゃあ、肌もぷにぷにしてるよ。赤ちゃん肌だねー」

「あ、あうあうあう……。や、やめてください」

「ふっふっふっ、この可愛さはまるでわたしに匹敵にするわね」

『自画自賛もほどほどにしたらよろしいかと』

「……ミラを玩具にしないでね、ラキさん」

秀助は目を回すミラと、それを抱きしめるラキに苦笑する。

しかし、ラキもラキなりにミラの緊張をほぐそうという心使いがあるのだろう。ただでさえ人見知り気味で内向的な性格であるのに、現状そこには多大なプレッシャーがかかっているのだ。気遣わなければならぬ。護るというのは、なにも肉体的なことだけではないのだ。

だから、ミラには早くこの場に馴染んでストレスを軽減してもらうためにも、ラキの対応は効果的だった。

本来はラキも、初対面の人間ばかりで気後れしそうな状況であろうはずだろうに。もっとも彼女はなににもかもナチュラルなのかもしれないが。

秀助の言葉を聞いて、ラキはミラを片腕で抱いたまま不満気な表情で指を突き出す。

「それ、さん付けはなんとかならない？　なんだかくすぐったいだよね」

『ラキは他人に敬称を付けてもらえるほどの人物ではありませんからね。槍馬様の親切丁寧な対応が気に喰わないようです。いっそ、ラキのことは雌豚とお呼びください。この雌豚が』

「……………雌豚？」

はて、とミラが目丸くした。それを見てラキが眉を吊り上げた。

「こらIris！一言も二言も多い！むしろ全部余計よ。それにミラちゃんの前で雌豚ってなにいうのさ！？」

『無論冗談です』

なんとも人間的感性をお持ちのAIである。そもそも人工智能にそこまでの感性などがあるのか疑わしい。だが、どうやらこのAIには世間一般のSFなどに登場する人工智能に対応した認識は当てはまらないらしい。

指貫グローブに装着されたIrisを視線だけで壊れるとばかりに忌々しげに睨みつけて、ラキは秀助に向き直る。

「ともかく、さん付けじゃなくていいから。呼び捨てでいいよ。権くんもね。わたしもこれから呼び捨てにさせてもらうから。もうわたし達命を預けあうんだからさ、遠慮はいらないよね」

「まあ、そうですね。じゃあラキ、と。こんな感じかな」

「で、そろそろ脱線した話を戻してくれないか？」

権は話が一区切りついたと見て提案する。このままではレールを脱線したままラキという電車が独走してしまう、と権は判断した。

当初の予定を思い出し、そうだったとつぶやいてラキはミラを解放して座布団に腰を下ろす。

ようやく解き放たれたミラは、ほっとしながら煎餅をかじった。この動作もひまわりの種をかじるハムスターのようで小動物然とし

ていた。

「わたしね、実は魔王に付け狙われてるのよ」

一同が、静止した。

あまりに自然と夕飯の献立を語るような気軽さで言っただけのけられた言葉の衝撃に、秀助や権もしばし絶句する。

反応がないことにラキは納得して何度か頷いた。

「やっぱり驚かないか。さすが大魔王と戦うウィザードなだけあるね！ ちなみに魔王はユダⅡカエサルとかいってたかな」

「平然としていたわけじゃない、驚愕していたただけだ！ 普通そんな話を今するか！？」

「だって話す間がなかったんだもん」

権とラキの口論を尻目に、秀助はユダⅡカエサルという名を脳内で検索していた。

ユダⅡカエサル。

実力は中級程度の魔王で、最近表界に頻繁な出現をしている。そんな程度の情報しかない。大魔王のようにどんなウィザードでも知っているような大事件は起こしてはいなかった。

だが、もしベールⅡゼファー本人、もしくはその配下と戦っている時に現れでもすれば状況は絶望的なものになる。魔王は単体で戦局を左右する存在なのである。

ラキという助っ人は素直に嬉しいが、秀助やミラには悩みの種が増えてしまった。

心配そうにしていた様子に気づいたのか、ラキは陰気を吹き飛ばすように笑う。

「もしユダⅡカエサルが現れてもわたしひとりで追い払うよ！ そ

もそこそこ数日襲ってこないしさ。秀助とか他のウィザードもいるんだし、もうちょっかい出してこないでしょう」

平然と魔王相手にひとりでなんとかする、といい切ったラキには無理や傲慢、自慢すらない。ただ純然たる事実をいったのだろう。その力には驚嘆させられるばかりである。

なら、ユダⅡカエサルについては心配し過ぎることはないかもしれない。そもそもベールⅡゼファーに思考を裂くだけで手一杯なのである。中級魔王に構っていられるほど状況は気楽ではない。

しかし、気になることがあるとすると、

「……ラキ、もしかして僕らといればユダⅡカエサルに襲われないとか考えてたでしょ」

「……まあ、爪の先程度には」

なら目をそらさないで頂きたい、とは秀助の弁である。

しかし、これでもようやく総ての情報は出揃った。もう厄介が増えることもない。

秀助はしばし思考に耽ると、ひとまずではあるが今後の方針を口にした。

「情報、といってもまだわからないことだらけだ。この東方王国神社に構えて様子を見るしかないね。わかってることを整理して情報収拾することも忘れないようにしないと」

「まあ、それしかないわな」

権とラキが同意を示したことにより、今後の行動がまとまる。まずはミラを護りながら相手の出方を探らなければならない。

だが、作戦が固まったことに秀助は肩の力を抜いて安心した。今まで張っていた糸が弛むと、疲れが一気に身体へのしかかる。

秀助は侵魔と冥魔を相手にした後でラビリンスシティに送りこまれ、さらにまた侵魔と戦闘を繰り返したのだ。短時間に三連続の戦闘は相当堪える。ウィザードといえども疲労や一度負った怪我が簡単に自然回復するほど人外ではない。

両手を畳について酷使した身体を秀助が休ませていると、突然ミラが小さな声でつぶやいた。

「……すいません。私のせいでご迷惑をおかけしてしまって」

いつの間にか煎餅をかじる手をとめていたミラは、顔をうつむけている。その自分を責める様は痛々しく、惨い。

カチューシャから漏れた髪の間隙から、ミラの沈痛な面持ちが一瞬かいま見えた。自分自身に戦う力がなく、周りに頼るしかない己を攻めている。あまつさえ自分の存在が不幸をばらまく。その事実を理解し過ぎて、自己を責めていた。

ジクリ、と秀助の胸が痛む。

——彼女の姿に既視感を覚えてしまった。

似ていた。今のミラは在りし日の秀助の姿に重なる。だが、これほどまでに当時の自分は己を戒める気持ちはなかったし、あれば今の自分はなかっただろう。

それでも、無力さに打ちひしがれる彼女の気持ちを秀助は痛いほど理解することができてしまった。故に、槍馬秀助はミラを放っておくなどという選択肢を選ぶことは万に一つもできない。

「迷惑なんかじゃないさ」

だから、せめて秀助はミラの重荷を分けてもらいうくらいの気持ちで言葉を紡ぐ。こんな重い気持ちのまま日々を過ごさせるのは、あまり酷い仕打ちだ。

「それをいうなら、すいませんじゃなくてありがとうございますだろう？ 僕は笑って感謝されたほうが、泣きながら謝罪されるよりずっと嬉しいよ」

「右に同じ。なんのために護ってるのかわかったもんじゃないしな」
「わたしもわたしもーっ、やっぱり感謝されるってのは気分いいよね」

『謝罪より感謝の方が骨を折った甲斐がある、とワタシの知識からも発見できます』

権とラキにIrisも便乗して秀助を支持する。

責めるわけでもなく、謝らずに笑ってくれという言葉に顔をあげたミラはしばし呆然とした。

そして、嬉しさが胸の奥からこみ上げてくる。それをなんと言葉にするべきかミラを逡巡して、すぐに簡単な答えへ行き当たった。

この気持ちを伝えるのに相応しい言葉といえば、これしかないじゃないか。

「——ありがとうございます」

ミラは、泣き笑いをうかべながら感謝の言葉を口にした。

やはり、感謝の方が断然いい。ミラの笑顔を見て少々ときまぎししながら、秀助は確信した。

そんな時に、ラキの背後にあった襖が音をたてて開かれる。廊下から顔を出したのはこの部屋を貸し与えた魔王、パールⅡクールその人である。

リボンについた鈴の音を鳴り響かせながら、不平を訴える——しかし可愛いらしい声を腹の底から吐き出した。

「やっと、話が、終わったわね……。このパールちゃんを待たせるなんて良い度胸だわ。さあ権っ、とっとと夕餉の用意をしなさい

！」

「ええっ！？ パール様さっき焼き芋食べてましたよね、しかもひとりで」

「おやつと夕飯が同じ胃袋に収まってるなんて卑小で矮小で無知蒙昧な人間が作り出した虚偽なの！ それよりアンタ達も夕餉の準備を手伝うのよ、働かざる者食うべからず！」

唐突に現れたパールは嵐のように場を引っ掻き回す。一方的に理不尽なまでに台風は権を働かせ、他の居候にも命令した。

洩る権を脅して無理矢理立ち上がらせるパールを見て、ラキが意地悪くチェシャ猫さながらに笑う。

いきなり月衣の中に手をつ突っ込むと、ラキはひとつの紙袋を取り出した。それに腹を空かせたパールの鋭敏な食物探知が反応する。雷のような速度で振り返ったパールに、ラキは紙袋を指差した。

「冷えてますけど、鯛焼き、いります？」

「いるっ！」

即答だった。人間の神経伝達速度では到底不可能な対応の速さだった。

鯛焼きの登場に飛んで喜ぶパールに、ラキは囁く。

「お夕飯の準備、免除してもらえます？」

「賢い女ねっ、承諾！」

「ありがとうございますー」

『悪知恵だけは一流なんですから』

さっきのはミラのとは似ても似つかぬ腹黒い感謝の言葉に、irisは人間なら溜息に当たるであろうニュアンスの音声を発した。ひとりだけ仕事を免除されたラキを睨みつける権の構図を見て、

修学旅行のような賑やかで楽しい気分になりながら秀助は立ち上がった。すると、胃袋が栄養をくれと抗議を発する。

腹の虫にラキが気づいて、パールに紙袋を渡す際、鯛焼きをひとつだけ取り出した。

「はい、秀助にも上げるよ」

「ああ、ありがとう。助かったよ、お腹減ってたんだ」

恭しく受け取って、秀助は鯛焼きを頬張る。冷えてはいてもアンコの甘みは健在で、多少生地がふやけているのを無視すれば今の胃袋にとって何物にも代え難いご馳走だった。

そうして鯛焼き一個に夢中になる秀助は、真横で繰り広げられることには到底気づかない。

ミラは嫉妬するように目を細め、ラキは鼻を鳴らして視線を受け流す。からかわれたことに気づかないミラは秀助の服の裾をぎゅっと握り、ラキは悪戯が成功したことにほくそ笑む。

和やかな時間はこうして過ぎ去っていった。

これがすぐに瓦解してしまう、薄氷の上にある仮初めの安らぎであるとは気づかずに。

＊

夜闇よりも冥い。それは深海や宇宙空間よりも尚冥い。光という法則が抜け落ちたように漆黒の帳が支配するそこでは、いかなる視覚も意味がなく、眼球は有名無実な飾りと化する。

それほどまでの暗黒。

人では見通せぬ暗闇。

よってここは人間の認識する世界ではない。実際に光が生まれてもそれを塗り潰し、喰らう、などという闇は人間の法則には存在しないからだ。

少なくとも、一般人にはないだろう。

その生きた暗闇の中で、異常が起こった。

空間に小石を投じたような波紋が広がる。いくつもいくつも、波が虚空に生まれて消える。

そして、腕が現れた。

ひとつの波紋の中心から腕が現れ、また別の場所から足、身体、頭が現れた。浮かび上がったそれは、やがて地面に落ちる。いや、ここに地面という概念が存在するか疑わしい。ただ落下して動きを止めたから地面と表現したに過ぎなかった。

生まれ落ちたその姿形はあくまで人間である。

外見はあくまで人間なのである。

中身は、少なくとも人間という性能の範疇を遥かに逸脱した存在であることはプラーナの内包量で判断できた。

ならば、これはウィザードなのか。

否。断じて否。

これはウィザードなどという存在ではない。かつてはそうだったかもしれない可能性はあるが、これはもう人間というより魔王や魔王の性質の方が近かった。

正しくいうならば、これはウィザードでありながら冥界に堕ちてしまった者――。

「……まだ、」

それ、である男が身を起こすと表現して差し支えない動作をする。

「また……」

色が抜け落ちた老人のような白髪をしていた。左腕は肥大化し、刃物のような爪を備えている。あまりにアンバランスな腕は、熊の腕を無理矢理接合したようにも見えた。変質している左腕は鱗状の

物体で覆われており、それは顔の右半分にも現れていた。人体を浸食するウィルスのようなものである。

頬も痩けて骨を浮かび上がらせた顔と白髪が合わさって、本来なら二十歳前半であるのだろうが、荒波にもまれて俗世から離れた世捨て人のような印象を覚えさせた。

屈強な筋肉で黒革製のジャンパーを押し上げながら、男は吼える。地の底から、天空の人間に怨嗟を叩きつける。

「……イイさ。まだ殺せと云うなら殺戮してやる。また侵せと云うなら蹂躪してやるッ！ 冥魔王……我が忌むべき主よ、貴様が望むならこの監獄から解き放とう。ああ、それが力の代償だからな——」

まるで己に云い聞かせるようにして口にすると、男は爪を打ち鳴らして浮遊した。

白濁とした亡者の瞳で虚空を一瞥すると、男は姿を消失させた。

さすれば、再び訪れるのは痛いほどの静謐。

だが、そこで音もなく鳴動している。来たる日の復活を待ち望んでいる獣が。

この禁じられた破滅を振り撒く災厄で最悪な獣、それを人はこう呼び、獣もそれを己の名とした。

其の名は、冥魔王——。

5..虚構の幸せ—Happy Nobody—

小鳥のさえずりが聴こえた。ここにも小鳥がいたのか、と驚き、もしかすると幻聴だったのかもしれないと思い直す。表界で同じことをしていた時は聴こえていたから、それを脳が発掘でもしたのかもしれない。そもそも今は昼時、似つかわしくはなかった。

木造の道場、その窓から光が埃を吹雪のように浮かび上がらせながら差し込み、床を光らせる。

冷たく凜とした空気が肺を満たす。

場所は違えども、あるものは同じである。ここは身体を鍛え高める場所だ。

神聖とさえ思えるほどの水を打ったような静寂が道場を支配している。

そこにただ直立している少年は衣擦れの音すらたてず、呼吸音すら聞き取れない。まるで精巧な彫像であるかのようにすら思えた。少年、槍馬秀助は瞼を開き、裂帛の気合いのもと拳を突き出す。

「破ッ！」

拳が鋭く宙空を穿つ。声は静かだった空気に波紋を作り、拳はそれを叩き割る。

一撃目を繰り出したなら、と秀助は流れるように二撃目、三撃目、と脚や肘を仮想敵に向かって繰り出していく。

実家の道場で繰り返してきたトレーニング、それを繰り返す。強大な敵を目の前にしたからこそ初心に帰る。自分の拳を見失わぬように、また弱い拳に戻らぬように、鋼の拳をさらに鍛え抜く。

やがてその行程が一段落つく——道場の外にある渡り廊下をスリッパが叩く軽快な音がした。瞬間、入り口の引き戸が開け放たれる。

月衣に入れていた胴着を纏った秀助が振り返ると、カチューシャがトレードマークの女の子がいた。

「あ、お邪魔でしたか？」

ミラがはっと気づいて眉尻を下げる。うるさかったのではないかと心配したのだろう。秀助は笑みを浮かべながら否定する。

「大丈夫、ちょうど今終わったところだから」

「それなら良かった……。じゃあ、はい、タオルです」

うっすらと汗をかいていた秀助にミラが真っ白なタオルを差し出した。それに礼を述べて秀助はタオルで汗を拭う。武術家として若いながらも卓越している秀助は、これほど運動をしてもあまり汗をかかないものの、それでも生理現象として汗は少なからず生まれてしまう。

額の汗を拭うとタオルを首にかけて、秀助はにこにこしているミラに視線を戻した。

「それで、どうしたの？ わざわざタオルを届けにきてくれたわけじゃないだろう？」

「あ、はい。お昼の用意が出来たので呼びに来ました」

「そういえば、もうそんな時間なんだね。ごめんね、料理手伝わなくて」

「いえ、槍馬さんはお気になさらず。私にできることはこれくらいですから」

ミラの表情も段々と明るくなってきたなあ、と嬉しく思いつつ、秀助はミラと並んで渡り廊下を歩く。

東方王国神社の離れにある道場、秀助はそこを使わせてもらって

いた。表界にいる時の日課、それをしないとイマイチ調子が出なかったからだ。

——あれから早三日。

今の所、変わったことは起きていない。侵魔やベールⅡゼファールはなんらアクションを見せてはいなかった。まったくもって平穩無事に日々が過ぎていく。パールⅡクルの根城を砦としたから、それが抑止力となっているのかもしれない。誰が好き好んで強大な魔王と敵対しようなどと思うものか。

結果、なんの進展もなく秀助達は東方王国神社にて比較的のんびりとした生活をしていた。秀助の通う輝明学園はウィザードの養成機関的な意味合いもあり、出席数にはいくらか温情もはかられるためそちらも心配し過ぎることもない。

居間、という表現が正しいかはわからないが、秀助達がそのように利用している一室に入ると、黒壇のテーブルに食事が並べられていた。

「お、来たねご兩人。仲睦まじいことで」

エプロン姿のラキが食事を並べる手を止めて、ふたりに顔を向けるなりはやし立てる。

ミラが瞬時に頬を林檎色に染めて、ラキを上目遣いに睨んだ。

「な、なんてこと仰るんですか！ その、私と槍馬さんはそんな仲間じゃ……っ」

「うん、睦まじいじゃなくて睦み合うじゃないとミラに悪いんじゃないかな」

「え、どう違うの？」

『睦まじいはお互いに思い合って仲がいい、睦み合うはお互いに仲がいい、ですね』

Irisの補足にミラはあう、と声を洩らして肩を落としたことに秀助は気付かなかった。実は秀助の照れ隠しであったりするのだけど、察したのはにやにや笑うラキだけである。

ラキの片手に付属するIrisが、秀助の姿を見て——多分中央部の結晶が目の役割も果たすのか——感心したように告げた。

『トレーニングですか。お疲れ様でした。まったく、この自主性はラキにも見習ってもらいたいものです』

「むっ、わたしは料理してるじゃないの」

「そうそう、ラキもお疲れ様だよ。相変わらずすごい量だね」

「まあ大食らいがいるからねー」

談笑する秀助の服の裾を、不服そうにミラが引っ張る。

「私も作りました!」

「ああ、そうだね。ミラも頑張ったね」

秀助の言葉に満足したのか、ミラは機嫌を直して座布団に腰をおろした。

同姓同士だからなのか、ミラは所々でラキにライバル心を燃やしている。内向的な少女の適度な自己主張に秀助はいい傾向だな、と思っていた。その鞘当ては自分がそれなりに原因だという事実には秀助が気付く様子はまったくない。

ミラをからかうような表情を一瞬浮かべるとラキも席に着いたので、秀助も座布団に胡座をかいた。

「この匂いご飯! ま、まあ、なかなか美味しそうじゃないの?」

すると、縁側から障子を開けてツインテールの魔王様が現れる。匂いに釣られてやってきた大食らい魔王パールIIクールその人であ

る。

香りで勝手にやってくると踏んでいたらしいラキは、既にパールの食事も用意していた。むしろしていなければパールは怒って暴れ出す。

「はい、パールちゃんのもありますよー。なんと今ならエビフライが増量中」

『揚げ物が増えて栄養バランスは悪いんですがね』

「ふふんっ、大儀だわラキ。このパールちゃんさまがほめてあげる。でもちゃん付けは気安すぎよ、様にしなさいっていつてるでしょ!」

不遜に鼻を慣らしたパールとエプロン姿のラキはIrisの小言を黙殺した。パールが畳にしかれた座布団に座ると、秀助はひとり足りないことに首を傾げた。朝食の時にはいた親友の姿がない。

「あれ、権は？」

「沢木さんなら出掛けましたよ。迷宮街で話を聞いてくる、とか……」

ミラが声を萎めたのだから、十中八九ベールⅡゼファー関連のことだろう。いつまでも秀助達が後手ではいけない。護衛とは受動側に見えるが、警戒対象がはっきりとしているなら能動的に動いていくべきなのだろう。そのために権は情報収集に行ったに違いない。

「そっかあ……ひとりで行かせちゃって悪かったかな」

「秀助、権のことなんていいから早く食べさせなさいよ!」

意外に礼儀よくいただきますを待っているパールに急かされて、秀助は一時考えを中断させる。

自分に声をかけてくれればよかったのに、と思いつつ秀助は箸で

料理をつついた。

＊

ラビリンシティの住民はたくましい。

というより、そうでなければこんな場所にはいられないのか。

先日の戦闘で破壊された建造物など、それらはすべて損傷が跡形もなく修復されていた。今やあの傷跡があったことを証明しているのは道の脇に集められた硝子片や残骸だけだ。今日中にあれも撤去されるだろうから、もう誰もあの戦闘跡を垣間見ることはないだろう。

たった三日という速度で修復できたのは、ひとえにウィザードだけしかないという状況故か。

そう分析しながら、相変わらず活気に溢れた迷宮街を沢木権は進む。しかしただ歩いているわけではなく、その間も辺りの話に耳を傾けていた。

今日の間ウィザードなどに話を訊いて、わかったことはあまりない。少なくとも、事態が進展するとは到底思えないことしかなかった。

曰わく、ベールⅡゼファーはラビリンシティを破壊しようとしている。

曰わく、ベールⅡゼファーは冥魔と一枚かんでいる。

曰わく、ベールⅡゼファーは——などなど。

例え真実が含まれていたとしても、決定的なものがない。こちらが優位に立てる情報はまったくなかった。

当然と云えば当然か。この事件は世界の危機が関わっているといっても、ウィザード側に認知されていない事柄である。それにこの事件も魔王が起す数多いひとつに過ぎない。特にラビリンシティは魔王が多く滞在し、ここ特有の出来事も数多く、ウィザード側が把握しきっているわけではないと落とし子の立場である権は知っ

ている。

おそらく今回の事件に一番深く関わっているのは自分達であり、それ以上を他に求めるのは最初から不可能だったのかもしれない。となると、無駄足だったか、と権は落胆する。有益な情報は出回っておらず、籠城するのが得策とわかっただけで吉とするしかない。幸いにして東方王国神社は、立てこもるにはなかなかどうして優れた場所である。土地は広いのでストレスはないし、兵糧も豊富、なによりパール・クール人居城であるのが大きい。時間をかければパール・ゼファールが計画を頓挫させる可能性もあるいは出てくるかもしれないと推測する。天文学的可能性でしかないのに、権はそんなことになるんじゃないかと期待した。

弛んでいるのかもしれない。

たった三日なにもないだけで？

きつと権ひとりならもつと緊張していただろうが、今は頼もしい仲間に主がいる。それは絶大な安心感を権に与えていた。

過去の仲間と再会して記憶が活性化されていることによる高揚感も少なからずあった。

それは第三者から言わせてみれば、とてつもない油断である。あれほど強大だと認識した敵なのに、権は今——彼だけではなく秀助やラキでさえ——間違いなく相手を軽んじていた。

人間は、凶器を持った殺人鬼に追いかけられれば例外なく逃げ出す。しかし時たま振り返り確認しなければ自分の危機感を維持できない。夢だったのかもしれない、妄想かもしれない、本当だったとしても振り切れたかもしれない。そう自分に都合のよい解釈を持ち出す。もし、振り返った時真後ろに危険人物がいなければ、人間は安心してしまいうだろう。驚異が真横でナイフを振り上げているにも関わらず——。

このラビリンシティはルー・サイファールが当初避暑地として創ったからだろう。表界と同じく陽が沈んでは月が昇る。天体という概念ではないだろうに、陽が半ばまで水平線に沈み、辺りは夕焼け

になっていた。後ものの数分で夜闇がラビリンスシティを支配するだろう。

と、狙ったように権の腹の虫が珍しく鳴った。昼飯すら食べていなかったからの抗議だろう。権は苦笑しつつ、夕食は東方王国神社で食べようとO—Phoneを取り出して連絡を入れようとした。今まで東方王国神社の炊事洗濯家事全般は権の担当だったが、最近ではラキとミラ、秀助が手伝ってくれていた。今日の炊事は多分ラキとミラだろう。

O—Phoneを開いて——電波が届かないことに気づいた。

「ん……？」

一向に電波が回復しない。O—Phoneはめったなことで電波障害を起こす機械ではなく、こんなことは月匣を展開でもされない限り起こり得ない。

それにラビリンスシティには世界結界はなく、月匣を作る意味はあまりないし、象徴的な紅い月も昇っていなかった。

なら、何故電波が届かない。

「……………それに、近しいこと？」

霊界を通る電波を乱すということは、つまり、空間が不安定になっているということだ。

ぞくりと悪寒が背筋を駆け抜けた。

即座に月衣から取り出した盾型箒を展開、周りの人間が不審な目を向けるよりも速く権は飛翔した。

東方王国神社へと権は疾走する。

間違はなく、油断していた。目を背けていた。今が少しばかり楽しかったせいで、目を曇らせていた。

本来なら、少ない戦力を割いてしまうなどではいけなかったの

だ。特に防御能力へ特化した権が陣地を離れてしまっ
てはいけなかった。

「クソ、間に合えよ——ッ」

権は眼鏡がずれるのも構わず速度を上げた。
夢の終わりが、近づいていた。

5..虚構の幸せ—Happy Nobody—(後書き)

ノーバディで虚構とは言わない、自分で先に突っ込んでおきます刹那です。他人みたいな嘘のような幸せ、そんなニュアンスでよろしく願います。

英語の成績が悪くて悪かったな！それでも高校生だよ！

最初は普通に虚構とネットで英語を検索しましたが自分で単語を読めなかったので止めたのは秘密。意外とHappy Nobodyっていう響きは気に入っていたりする。

今回は風邪を引いたり学校でイベントがあったりして更新が遅れてしまいました。申し訳ない。来週は四日間も修学旅行などで潰れるため、またしても更新は遅れます。実に申し訳ない。

それでは。

6：悪夢－nightmare－

陽が飲み込まれていく。水平線の彼方に溶けて消えていく。

半分ほど身を沈めた夕日を、秀助は縁側に腰をかけて柱にもたれかかったままぼんやりと眺めていた。

平和だ。

世は並べてこともなし。昨日と同じ今日がゆったりと過ぎていく。今日も何事もおこらず一日の半分以上が過ぎ去り、終わりが近づいてくる。敵の気配も感じられず、秀助はやることも見つからずに夕焼けを眺めていた。

ぎしり、と床板が軋む音がして秀助が振り返ればお盆を手にしたミラがいる。夕日は月匣の紅い月とは違うオレンジの光でミラを照らしていた。

「お茶、持ってきました。槍馬さん、ずっとそうしてましたから」

「……あ、そうだったね。そんなに気を使わなくてもいいのに」

「いえ私も暇でしたから」

「あ、なんだか僕が職務放棄の暇人みたいないい方だね」

「違っ、そういう意味でいったんじゃ……っ」

「冗談だよ。それより座ったら？ お盆持ったままじゃ疲れるよ」

ミラが意地悪、とつぶやいてお盆を秀助との間に挟んで縁側に腰を下ろす。

漆のお盆には煎茶が注がれたふたつの湯呑みと、煎餅が入れられた器とがあった。秀助は湯呑みを手にして、湯気をのぼらせる淹れ立ての茶を口にする。程良い渋味が熱を持って口の中に広がった。

「あ、美味しい」

「それはよかったです」

ミラも笑みを浮かべて茶をすすする。日本人とは違う顔立ちのミラが日本文化を口にするのを見ることに秀助はもう慣れていた。ラキも日本人とは言い難いし、パールも金髪でありそもそも人間ではないのだから。

秀助が醤油煎餅をかじっていると、ミラが様子を窺いながら控えめな声で訊ねてきた。

「あの、お聞きしたいことがあるのですが、いいですか？」

「ん？ 僕で答えられる範囲でいいならどうぞ」

「……なんで私を助けてくれるんですか？」

不安に揺られた、それは頼りない声だった。

煎餅を食べる手を止めて、秀助はミラみ見る。顔を俯けたまま、ぽつぽつと続ける。

「助けてもらえて私は、嬉しいです。すごく嬉しかった。でも、槍馬さん達とは縁もゆかりもありませんでした。なのに、なんででしょう？」

「なんで、かあ……」

改めて問われて、秀助はミラがずっと不安だったのだろうと気づいた。秀助達に受け入れてもらえても、きっと彼女には理由がわからなかったのだ。

なんで護衛してくれる気になったんですか——。理由のわからない親切ほど恐ろしいものはない。裏になにがあるかわかったものではないからだ。

でもミラは今日の今日まで聞かないでいたのは、彼女なりに秀助達を信じてくれているからだろう。信じたいからだろう。そうじゃないと、わざわざ今訊ねになど来ない。

自分なりに信じているから、信頼を裏切られるのを恐れて不安になっている。なら、秀助は取り除くために真実を口にする。しなければならぬし、わざわざ隠すつもりもなかった。

「世界の危機を防ぐためには、今は君を護らなくちゃいけないみたいだから」

「……そう、ですよ」

ミラが落胆したのか肩を落とした。お前を護ってるんじゃない、世界を護ってるんだ、といわれたのだから傷つくのは当たり前である。

しかし、秀助は続ける。

「と、いうのがウィザードとしては正しい答えなのかもしれないけどさ」

それはあまりにもテンプレートに嵌めた世界を守護するウィザードとしての答えだ。

ウィザードの理想的な答えがそれであっても、実際にそんなことなどいえないしなかった。ミラという護らなければならない少女と出会い接してしまえば、どんなウィザードも無味乾燥なお題目を唱えることはできない。できるものがあるとすれば、それは冷徹に個の感情を押し殺し世界を守護するということを絶対的な目的とする鋼鉄の意志の所持者だけである。

そして秀助は世界を護りたいとは思っていても、目の前の少女も蔑ろにしたくはなかった。いやこの場合、世界という漠然なものよりも、身近なミラを護りたいという気持ちの方が強い。

「僕はミラも護ってあげたいんだ。もし魔王に君が連れ去られたらなにをされるかわからないしね」

「……だから、なんで護ってくれるんでしょう？」

「助けちゃうことに、そこまで詳しい理由が必要なのかな？」

表情を先程よりも明るくしながら、なおも訝しむミラに秀助は困ったように笑った。意外と頑固というか、用心深いというか、それか単に他者が恐ろしいのか。

秀助はわずかにうなり、煎茶を口にして喉を潤す。中空に目をやりながら、渴きを癒やした喉を震わせた。

「ちょっと古い話になるんだけど、僕も昔はすごく弱かったんだ」「槍馬さんが、ですか？」

ミラにとっては予想外のことだったのか、驚きに目を瞬いた。

うん、と苦笑しながら秀助は頷く。ミラにはそんなに強く見えていたのかとくすぐったいような気持ちになる。

「ウィザード関連は特にね。武術のお陰で腕っ節は強かったけど、それだけ。侵魔と戦ってもすぐ危なくなっただけ。父さんに助けてもらってたよ。だから、父さんの広い背中では忘れたことがないな」

あの時は本当にどうしようもなかった。たいした戦果も上げられずにいて日々の修行すら投げだし、ぐずっていた。思い出すだけで恥ずかしくなる。だが、これは秀助の戒めだった。あの時に戻りたくないと思えるから、今の秀助は上を向いて歩き続けることができる。

そうだ。もう自分の不手際で他人が傷ついてしまうのだけは御免だった。絶対に。

「ある日、僕は大変な失態をした。たまたま侵魔を連続で斃して調子に乗ってたんだ。相手はそれほど強くはなかったのにね。で、敵

の群に突撃した。無謀だったよ。……すぐに後悔した。目の前には侵魔の親玉である下級の魔王もいたんだからね。抵抗して侵魔を薙斃してもすぐ限界がきた。もう一步も動けなくなった時、魔王が僕にトドメを刺そうとして魔法を放ったんだ」

傷ついた当時の秀助では回避は愚か防御しようと思えなかった。それほどまで魔王との力の差は歴然で、もしあの魔法を喰らっていたら消し炭になっていたのは簡単に想像がつく。

「でも僕は魔法を受けなかった。……庇ってくれた人がいたんだ。父さんが敵陣を無理矢理突破して、魔法を背中にもろに受けたんだ」
重症だったよ、と遠い目をしていえば、おずおずとミラが口を開く。

「まさか、槍馬さんのお父様は……」
「ああ、いや、生きてるよ。じゃなきゃあの魔王に昔の僕が勝てたわけないし。でも高威力の魔法を背中に受けて戦闘をしたから、脊髄とかいろんなところを傷つけた。ウィザードの治療でなんとか日常生活に支障はないけど、侵魔と戦うことはできないようになったよ」

だから、と秀助は拳を作る。

「もう僕のせいで誰かを傷つけたくはない。父さんみたいに、誰かを護ってあげたい。……そんなわけさ。僕がミラを護ってあげたいと思う訳はね。長いうえに恥ずかしい話だろう？」

思いの外長くなってしまった話に肩をすくめる。こんな長々とした話を聞かされればミラも辟易としてしまったかもしれない。もし

そうであればすまなかったと思う。

だけど、ミラを護りたいと思うのが嘘でないと証明するのに秀助が一番説得力があると考えたのがあの昔話であったのだ。秀助が槍馬流古武術を継ぎ、名を汚さぬように寝食を忘れ研鑽に励みだしたきっかけの話。

「えーと、信じてはもらえたかな？」

「……はい。その、ごめんなさい。私のせいでそんなことを話させてしまった」

「こっちこそ長話でごめんね。でも、信じてもらえてよかった。僕の理由はあるものだけど、権やラキもミラを護りたいのは変わらないと思うんだ。だから安心していいよ。ミラは、僕達が護ってあげる」

そうして、ミラの表情に元気が戻り、年相応の笑みをこぼした。

「あ、ありがとうございます——」

だが、それは儚く、ほんの一瞬垣間見えただけだった。

空が裂けた。真っ二つに、冥く、その身体の内부를眼下の人間に見せつける。

「なっ——」

秀助が驚き、縁側から身を乗り出した。

見上げた空は、それが立体映像だったとでも錯覚させられるように裂け目ができていた。亀裂から見える内部は闇に満たされており、ウィザードの視力を以てしても中身を見ることは叶わない。ならば、あれは、異様であり異常なのだ。

全身が総毛立つ。あれは、危険である。この上なく、危険である。

ウィザードとして培った一級の危機感知能力が告げていた。

そして、闇の中にそれを見つけた瞬間、秀助は無防備に空を見つめるミラに向かい手を伸ばしていた。

「ミラッ！」

ぎゅっと華奢な身体を抱き締める。否、庇った。

同時、着弾。

余波で地響きすら起こしながら、それは現れた。秀助は振り返る。そこにあるものを見るために。

東方王国神社の庭に、小型クレーターが出現していた。

直径は五メートルかそこらだろう。粉塵を巻き上げながら、空の割れ目から落ちてきたらしい者はクレーターの縁に足をかける。

一陣の風が吹き、粉塵が吹き飛ばされた。

その後に残るのは、人の姿を借りた化け物である。

「それが、鍵であり半身を身に封じたものか……」

肥大化し凶器と化した左腕を揺らし、黒目のない血走った眼が秀助とミラを捉えた。

あれは狩人の目だ、と秀助は直感する。なにを狩りにきた。あれはなにを狩りにきた。決まっている。秀助という障害物を”狩り取り”、ミラを奪いにきたのだ。

それは、冥界からの篡奪者。

幸せな日々にもう手は届かなかった。

＊

「——なんだっていうのよ！」

ウェーブがかった銀髪を乱して、魔王ベールⅡゼファアは怒りを露わにしていた。

そこは、裏界に存在するベールⅡゼファアの支配する場所だ。場所というものの、あらゆる物理法則や極度に歪曲された混沌世界である裏界にあって特定の空間だけを指定することなど無意味であり不可能だが――敢えて人間の言葉にまで位を下げ、理解させるには場所という言葉がもっとも適切だった。

彼女が支配する牙城の一室、ベールⅡゼファアの背後でふたつの歯車状のものが重なり合い、緩く回転している。

先程まで腰深く座っていた椅子から弾かれたように立ち上がり、ベールⅡゼファアは手の中にあるコンパクトを勢いよく閉じた。

遠見のコンパクト。鏡面に使用者の望む場所を見せるというベールⅡゼファア愛用のマジックアイテムである。それに写し出された光景に、かの悪名高い大魔王は憤慨した。

「冥魔王……ッ、封印されて手も足も出さないと思っていたのに……。それでも、身体から部下を外界に放てるなんてね。予想以上に強大じゃない。でもね、タイミングが悪過ぎよ」

ベールⅡゼファアはゲームが好きだ。ゲームと名を冠した争いは彼女の生きがいといっても差し支えない。

リアルタイムゲームのアクシデントは愉快だと思うし、思いも寄らない幸運が自らに訪れれば踊り出したくなる。

しかし、忘れてはならない。大魔王ベールⅡゼファアは負けず嫌いだ。それは他の魔王に劣っていると見下されたりすれば全面戦争も勃発させるほどだ。少し気に入らないと思えば同胞であるはずの魔王を妨害するためにウィザードとも手を組むなども日常茶飯事である。

そんな彼女は、今回静観していた。ウィザードを放置し油断させ潰け込む。そう考えていた。人間を墮落させ破滅させるのはベール

Ⅱゼファアの十八番なのである。

ラビリンシティでいきなり襲撃したのも、最初の衝撃が強ければ警戒をせざるを得なくなるからだ。でも人間は警戒心を維持できない。特に表向き安全と思われる東方王国神社にいれば尚更である。そして今回策は見事に機能しており、舞台が整ったゲーム板をこれからベールⅡゼファアは動かそうとしていたのに――。

「……許し難いわね、冥魔王。調子に乗り過ぎよ」

それを自分の背後にいた者が突然ひっくり返した。これは援護などでは断じてない。分を弁えない愚者の行為だ。そんな無礼をこの裏界の大公が許せる道理などない。

いくら自分が味方をしてあげているとはいっても、このような思いつ上がったマナー違反は看過できるわけがなかった。

だがしかし、これで怒りにまかせ冥魔王を消滅させても面白くない。そんな程度では目の前から出来上がったご馳走をゴミ箱に捨てられたベールⅡゼファアは納得できなかった。

ならば、過程を超越しよう。

「……乗り気はしないけど、こんな所で終幕よりはずっとマシよね」

ゲームに重要なのは勝敗などの結果よりもそこにたどり着くまでの過程なのだが、そこは緊急事態により目をつぶろう。甚だ遺憾なことであるが。

「おとなしくあたしを待っていればよかったのに……。けど仕方ない。今回だけ見逃してあげるわ。ただし――」

部下を差し向けるのはベールⅡゼファアを信用できないといっているも同然であり、それは大公のプライドとして見逃せるものでは

到底ない。今すぐ制裁を喰らわせたい。だが今だけは背信行為を不問としよう。

「鍵はあたしが手に入れる。大公の力の前に、わざわざ部下を差し向けた己の愚考を悔い改めなさい……！」

ベールⅡゼファ―は輝明学園の制服の上にポンチョを羽織ると、宙に浮かんでかき消えた。

目指すは、関わりたくない魔王のいる地――
――ラビリンスシティ、東方王国神社。

7..さよなら

このような状況におかれた秀助の動きは、鈍速ではなく高速。ミラを即座に背に庇うと月衣からドラゴンブルーム式式を取り出して構える。一連動作の所要時間は僅か一秒半にも満たない。緊急時の対応なのを踏まえれば驚異的な速度といえた。

突如として空から降ってわいたモノに油断なく視線を向ける。

間違いない、と唾を飲み込む。得物を手にとって観察をし、確信する。こいつは敵だ、と。

衣服は人間のものであり姿形も人のそれであるが、中身は汚染されている。最早あれは人間などではなく、魔王と同質の化け物に他ならない。

だが、このプラーナの感じは魔王とは違った。それでも秀助はこのプラーナを知っている。

「お前は、冥魔か……」

「肯定であり否定。オレは冥界の闇に染まったただけの間抜けな人間だ」

人間であつたのに冥界の力を持つ——それに類似した例を知る秀助は目の前の男がなんであるかを理解した。

「まさか、冥魔の堕とし子！」

なんでそんなものが、と秀助は困惑した。ミラを狙っているのは魔王のはずだ。冥魔、それも堕とし子を使役できる知能を持っていると推測されるそれがミラを狙うのか。

堕とし子、要は落とし子の冥魔版である。落とし子は魔王に従属するが、堕とし子は冥魔の闇の力により理不尽な支配を余儀無くさ

れる。

そもそも、秀助は冥魔とは最初に交戦していた。秀助はもっと知能なき冥魔と断じた存在を怪しむべきだったのだ。

「その少女を渡してもらおうか。そうすればお前に危害を加えるのは避けよう」

思考能力も汚染されているはずの堕とし子が放つ、おそらくはもつとも紳士的な言葉だった。

「断る。僕が傷つくのはもとより承知だ。お前の目的は知らないけど、ミラは絶対渡せない」

「交渉は決裂か。ならばもう力づくしかあるまいッ！」

理性の仮面がいきなり弾けた。抑えていたのだろう暴力的な殺意が風となって秀助達に襲いかかる。

秀助の背後でミラが震えていた。常人なら失神ものの一方的な殺意の波動。これを受けてミラが意識を保っているのは、信頼する秀助が目の前にいるからだだった。なら、秀助は期待に応えることに全力を尽くそう――。

肥大化した左腕を振りかざし、堕とし子が疾駆する。それと同時に秀助も地を踏み抜き相手に肉薄した。

腰の捻りで力を増し、速度の乗ったドラゴンブルームを容赦なく解き放つ。

刀の斬線にも似た鋭利な軌跡を描き出したドラゴンブルームが堕とし子に命中した。

――のだが、

「効かんッ」

鱗のような結晶状のものに覆われた巨大な左腕により攻撃は受け止められていた。ドラゴンブルームにより増した打撃を受けても、左腕はほとんど損傷しない。なんという強度。

だが、秀助の攻撃は単一ではない。

ワンテンポ遅れてもう片腕による一撃が墮とし子の胸を叩いた。手榴弾でも爆発したような衝撃が墮とし子を貫く。

苦悶の表情を見せるが、これは決定的ではない。故に秀助は追い討ちをかける。

「《竜炎》！」

体内の龍^{ロン}を活性化させ、ドラゴンブルームに火焰を纏わせた。吹き上がった高熱の化身が墮とし子の身に喰らいつく。

しかし並の浸魔なら必殺だったろうが、墮とし子の身体はそれほど安くできてはいなかった。炎を無視して右腕を秀助に向けて突き出す。

顔を掴もうとする腕から秀助は滑るようにして後方へ逃れた。

と、距離が開いたことにより墮とし子は炎から解放され、今まで防御に使っていた左腕が自由になる。右腕を引くと墮とし子は左腕を真っ向唐竹に振るった。

結晶のような素材で出来た五本の爪、それぞれ刀と見紛うほど研ぎ澄まされたそれらが大気を切り裂き脳天に迫る。

疾ッ。

鋼すら豆腐のように分断するだろう爪による攻撃、それを一對のドラゴンブルームが火花を散らしながらも無事受け止めた。

だがこの腕の力故、秀助は両手での防御を余儀無くされる。下手に攻撃へ転じようとするればこの爪に三枚卸しにされるのは必然だった。

冥界に堕ちた者の白濁とした双眸を秀助は睨みつける。冥魔にミラを渡してやるなど真っ平御免だった。

その時、秀助は上空で魔力の高まりを感じた。

「――《ソードレイン》ッ！」

墮とし子に向けて天空から無数の聖剣が放たれる。それらは狙いを違えることも誤って秀助に掠ることさえなく、総てが墮とし子に殺到する。

秀助の眼前に光の剣が突き刺さるものの、それらは地面を抉るだけで墮とし子は捉えていなかった。間一髪で気づき、墮とし子は飛び退いていた。

それでも、暗澹たる闇を祓う聖者の御剣達は簡単に躲しきれない代物ではない。

天の属性を持つ装着する魔法、ソードレイン。それは冥魔を効率よく駆逐するためウィザードにより創り出されたものだ。

さらに空から落ちる光の剣を回避仕切れずに墮とし子は身体を刻まれた。

「ぬうッ」

致命傷にはなり得ない。だが今の攻撃としての効果は充分だった。秀助の隣に魔法を撃ったのだろうラキが長剣型箒を携えて舞い降りる。

ラキは秀助とミラの無事を確認すると胸をなで下ろした。

「良かった良かった、ふたりとも無事みたいね」

『到着が遅れ、申し訳ありません』

Irisは箒にセットし直されているようで、ラキのグローブには装着されていなかった。グローブを見た拍子に、秀助はラキの腕に浮かぶ幾何学模様を捉えた。

それはウィザードなどに魔装と呼称されるものだった。発動までにタイムラグがある魔法とは違い、魔装は身体に直接魔法を刻みつけることにより瞬時に発動できるようにした技術である。有事の際以外には刻印も姿を現すことはない。

「ラキ、Iris……助かった」

絶妙なタイミングの援護には感謝するしかない。

そして形勢も逆転した。

堕とし子の戦闘能力は厄介で秀助単体なら苦戦を強いられるが、優秀な魔法攻撃をこなすラキもいる状態でなら負けてしまうとは思わない。

負傷を確認して問題ないと判断したらしい堕とし子から目を離さずに、ラキはミラのいる場所まで下がる。もしもの時のために誰かはミラについていないと危ない。

そのもしもが起こらないに越したことはないのだが――

――ウィザードの判断は外れず、それは現実となる。

再び異変が発生した。

せっかく空が元に戻ったというのに、今度は庭の一部分が陽炎のように歪んだ。変化は一瞬、それは東方王国神社に現れる。

「こんな所に自分から来るなんて思わなかったわ……」

頭痛を堪えるような口調で来訪者は嘆息した。

ウェーブがかった美しい銀髪に、あどけない顔立ちでありながら人を惑わす魔性を兼ね備えた美貌。ポンチョの下には紫を基調とした輝明学園の制服を身につけている。

見た目は見目麗しい小悪魔のような少女であるが、実際は小悪魔などというレベルの存在ではない。

直接面識のない秀助でも、その特徴から該当するモノが誰か簡単

に見当がついた。いや、自分達の最大の敵のことをわからない方がおかしいのだ。

「大魔王、ベールⅡゼファー……ッ！」

秀助が驚愕し、二の句を紡げない。それは絶望を人の形にしているようだった。

圧倒的なプラーナが肌に突き刺さる。ただそこにあるだけで次元の違いを否応なく突きつけられる。生きている世界があまりに違すぎた。秀助の背後でラキとミラも固まっているのがわかる。

自分に目を奪われた秀助に表情を一転させて、ベールⅡゼファーは艶笑する。ミラより二歳も見た目は年下のはずであるのに、それは心臓を捕まれるほど壮絶なものだった。

「あら、貴方がリオンの選んだウィザードね。ふふっ、初めまして。……へえ、最近のウィザードにしてはちゃんとしてるじゃない？ 見所はあるわよ」

声をかけられているだけで秀助は生きた心地がしない。これが間違はなく自分の敵であると知っているからだ。ベールⅡゼファーに比べれば、堕とし子すら地べたを這いずる畜生と変わらない。

足が竦みそうになるのを堪えるので精一杯だった。世界結界に阻まれない大魔王の力とはこれほどまでに圧倒的なものなのか。

だが、しかし、秀助はなけなしの勇気を奮い立たせねばならない。

「さて、冥魔王の下僕は下がちなさい。あの鍵……ええと、確かミラちゃん？ だったっけ。ならあたしが届けてあげるわ。光栄に思いなさい」

——何故なら、あれはミラを奪い取り世界と彼女を滅ぼす存在だ

からだ。

「——ッ、うおおおおおおお!!」

自身を鼓舞するように怒声をあげて、秀助は榴弾の如く飛び出した。ウィザードとしての力と武術で培った技術を最大限にいかしたそれは筋肉の動きを余すことなく地面に伝え、ベールⅡゼファーへの神速の肉薄を実現する。

秀助がラビリンシティのベールⅡゼファーに勝てる手段があるとするれば、防御する瞬間を与えない奇襲しか有り得ない。ならば、まだこちらを軽んじてアクションを起こさない姿は間違いなくベールⅡゼファーの隙だ。

そこにつけ込み、一撃で致命傷を与える!

地面が悲鳴をあげて陥没するほど踏み込み、秀助はベールⅡゼファーの華奢な体躯にドラゴンブームを打ち込んだ。

「——《神竜》ッ!

体内で練り上げたプラナと龍、それらを一気に放出することによってドラゴンブームによる一撃は以前と比べ物にならないほどに上昇する。

文字通り竜を形作った氣を纏うドラゴンブームはベールⅡゼファーの身体を貫く。

その筈だった。

「……いきなり殴りかかるなんて、ちょっと失礼なんじゃないかしら?」

秀助の攻撃は、彼女の眼前に描き出された紅い魔法陣により阻まれていたのだ。しかしそれでも龍により強化されたドラゴンブー

ムの一撃は魔法陣を打ち消し、ベールⅡゼファーに届いていた。

「でもすごいじゃない。狭界にいるあたしの髪の毛を一房落とすなんて」

でも、それだけだった。

頭を傾けてドラゴンブルームを躲したベールⅡゼファーは余裕の微笑を浮かべていた。

とっさの攻撃とはいえ、《神竜》はその時に出せる最高の技である。しかも隙を突いたと思った攻撃だっただけに、それがこうも簡単にあしらわれたことに驚愕を禁じ得なかった。

「なら次は、こっちの番よね」

そして、安易に魔王に接近し攻撃を無力化されたこの状況はあまりに危険過ぎる。

この僅かな思考の乱れは、魔王という相手にしてみれば決定的なまでの隙だった。

ベールⅡゼファーの唇が死を口ずさむ。離脱しようと地を蹴るが、突き出された魔王の纖手は秀助の胸から離れず彼我に変化は現れない！

「《ディヴァインコロナ・ザ・ランス》」

囁かれた言葉は、光輝なる破壊を撒き散らす。

ベールⅡゼファーの掌に巨大な光冠コロナが生み出される。高熱をも孕んだそれは槍状に収束し、暴風をあげながら秀助の胸で爆発した。

「ゴォ——ッ!？」

零距离で放たれた雷火に秀助はなすすべなく吹き飛ばされた。

直進する槍は直下の地面をも抉りとりながら秀助の身体を弄び、
ディヴァインコロナ・ザ・ランス
後方の東方王国神社に直撃した。高位魔法の破壊力は止まることを
知らず、東方王国神社の棟をいくつも崩壊させた所でようやく消失
した。

だが、《ディヴァインコロナ・ザ・ランス》自体が消えても、こ
れが通過した地点は高熱の擦過により炎上している。

かなり巨大な建造物であるはずの東方王国神社、それを端から端
まで一直線に破壊するほどの魔法を片手間に発動する——それが大
魔王ベールⅡゼファアだった。

呆氣にとられる一同の中、ミラが真っ先に声を上げる。

「槍馬さんッ！」

何百メートルも吹き飛ばされた秀助の姿をミラには見つけること
ができなかった。そもそも秀助がまだ生きているかも疑わしいほど
の威力、しかも零距离での命中である。

失敗しちゃった、とベールⅡゼファアはつぶやいた。

「この身体はあんまり使い慣れないわね……まだ威力のセーブもイ
マイチかな」

悪びれる様子は一切なく、まるで小石を蹴飛ばして観測した結果
を自己分析する子供のようであった。

そうして秀助への興味をなくして、膝をつき破壊された場所を見
つめているミラに向けて歩を進める。

「まあいいか。さあ、あたしと一緒に来てもらおうかしら。ミラち
ゃん」

「……この娘を簡単に連れていけると思ったら大間違いなんだから」

『断固死守させていただきます』

ラキがミラの前に踏み出し、箒を構えいつでも魔法を打ち出せるようにする。いざとなればこの箒で切りかかることも可能だった。

しかし、それがこの魔王に通用するかはわからない。

ベールⅡゼファアの戦闘能力はユダⅡカエサル之物とは別格である。ラキでもどうなるかはわからない。武術を身につけた龍使いの秀助でさえあれなのである。後衛ウィザードのラキがひとりですぐまでやれるかは不明だった。

「……いや、オレもその鍵を奪うことが目的である。それは協力させてもらおう」

ベールⅡゼファアの他にも冥魔の堕とし子までいる始末。天秤は不利に傾き過ぎていた。このふたり相手に逃げられる可能性もない。いつもの余裕を消し去り、冷や汗を流しながらラキが箒を握りしめていると、どこからともなく鈴の音がした。

それをラキとミラは知っており、ベールⅡゼファアは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「……よ、く、も……パールちゃんさまの神社を破壊してくれたわねえ？」

鈴を転がすような天真爛漫な声で猛獣のような唸りをあげて、巫女服に似た衣装を身にまとう魔王がひとりの人間を手にして風穴から登場した。

それはこの神社に奉られる神にして裏界屈指の大魔王、無邪気な東方王国の王女——パールⅡクールだった。

髪を結ぶ鈴を鳴らしながら、パールは怒りに小さな身体を震わせている。その怒りといったら、大気を乱して服や髪を巻き上げるほ

どだった。伝承にある神の怒りとは、このような状態なのかもしれない。

黒曜石の瞳でライバル、ベールⅡゼファーを射殺さんばかりに睨みつけた。

「ベル！ あなた、おいたが過ぎるんじゃないかしらあ……。ここがパールちゃんを奉る由緒正しい神社だと知っての狼藉？」

「あーあ、また面倒なのが出てきたわね……。これだから来たくなかったのよ」

渋い顔で髪の毛を指先で弄るベールⅡゼファーのつぶやきにパールが拳を握り魔力を収束させるが、それを撃つことはミラが走り出したことにより中断された。

「そ、槍馬さん！」

パールに引きずられていた者、槍馬秀助にミラが抱きつくようにして駆け寄る。そして惨状に思わず声を失った。

輝明学園の制服はウィザードが在籍する性質上、魔術的効果が付与されている。編まれた糸一本一本に強度を増すように手を加えているのだ。

なのに秀助の上半身の制服は完全に消し飛んでいて、その肌を晒していた。胸や腹部の損傷も酷い。あまりの威力に肌が炭化し、脂肪の焼けた酸っぱい臭いがした。それでもまだ息があるのはウィザードだからだろう。常人ならまず助からない。上半身と下半身が今生の別れをしていない時点で奇跡である。

浅く呼吸を繰り返す秀助を呆然と見つめるミラに、さすがのパールもわずかに表情を曇らせた。

「……このパールちゃんが助けてあげなきゃ今頃消し炭よ。もし身

体を鍛えてる龍使いじゃなかったら死んでたけど」

秀助は《ディヴァインコロナ・ザ・ランス》を受ける直前、龍を操る龍使いの技法で肉体の耐久力をあげていた。もしとっさの防御が間に合わなければ秀助はあの魔法で死んでいただろう。今でさえ死にかけなのだから。

「ごめん、どいて」

「あ……」

秀助の元にやってきたラキがミラを押しつけ、切迫した表情で手をかざした。

すると回復魔法が発動し、秀助に暖かい癒しの光が降り注ぐ。だが、傷があまりに大きすぎる。回復特化のウィザードでないラキでは焼け石に水だった。良くて現状維持にしかなくていい。本格的な治療を一刻も早く行わなければ命に関わる。魔王ほどの力の持ち主ならば、この状態でも持ち直させることが可能だろうが、ベールⅡゼファールがいる状況でパールに治療を頼めるわけがなかった。

「……一応、あなたが手をかけたのはパールちゃんのお客さんなのよね。さらには下僕のお友達。しかも神社まで壊した。いいたいこと……わかる？」

パールが不自然に穏やかな声音になり、ベールⅡゼファールは目を逸らして誤魔化した。

「……えー、あんたの辞書にも情けなんて言葉があったのね」

「死んで詫びろっていつてるのよ！」

直後、力の奔流がベールⅡゼファールに打ち出された。

爆音。

単純な魔力のキャパシティはベールⅡゼファーを上回るパールの魔法による攻撃は雷神の鉄槌のように地を穿った。

土煙の緒を引きながらベールⅡゼファーが姿を現す。

「いきなり馬鹿みたいに強い魔法をぶつけてくんじゃないわよッ」

「パールちゃんの怒りを思い知るがいいのよ、蠅女！」

「いつてくれたわね、この東方かぶれ！」

罵倒し合って魔法の乱れ撃ちが始まる。その膨大な魔力の応酬は辺り一面を焦土へと変えていった。森林が吹き飛び、木々が宙を舞う。

その中を墮とし子が走り抜けて秀助達の元にいるミラへと迫る。結晶爪を研ぎ澄まし、邪魔なラキへと狙いを定めた。

「薙ぎ斃す——ッ」

「こっちの邪魔しないでよ！」

片手で箒を操り墮とし子を迎え打とうとすれば、両者の中間にひとつの鉄壁が生まれた。それは自立浮遊し稼働する盾型箒、アイゼルブルグ。上空から地面に打ち込まれ、墮とし子の動きを遮った。しかしそれは本来一対のものである。ならばもうひとつは、

「ウェポンマウントラッチ、貫けえ！」

上空、自由落下する沢木権の右手に巨大な盾があった。盾の裏側に設置された隠し腕、ウェポンマウントラッチ——マニユピレーターが長剣を掴み、墮とし子に向けて打ち出した。

盾先から延びる凶器に舌打ちして墮とし子が飛び避けて距離をあけた。

入れ替わりに権が地面を滑りながらも着地し、駆けつけた。重傷の秀助にさしもの権も眉を歪めて吐き捨てる。

「遅かったか……。ラキ、秀助は助かるか？」

「わからない。わたしヒーラーじゃないから回復は得意じゃないのよ！ 今治療を続けてるけど……」

「クソ、危ういな。とりあえず俺はあの男を止める。ラキは治療を続けてくれ」

一対の箒を権が手元に呼び戻し、墮とし子と対峙しようとする。が、自体は最悪な方向に転がり落ちていく。

「——おっと、ここで乱入させてもらおうか」

竜の吐息に酷似した炎、火の中級魔法が頭上から権とラキに降り注いだ。ドラゴンフレイム

当たればひとたまりもない灼熱の業火、権は一対の盾を展開して自分と秀助、ラキとミラを庇った。マグマのような火焰をアイゼルブルグは発熱しながらも耐えきる。四人の周りの炎を受けた地面は熱量のあまり溶解していた。

新たな介入者を見上げれば、ロープを羽織った魔術師然とした紅髪の女性が掌を秀助達に向けて突き出していた。見覚えのある顔にラキが目を見開く。

「そんな……なんで貴女がここに来るのよ、ユダカエサル！」

「はて、また現れないともいつてないんだがね。まあ今回はキミが目的じゃない。ただキミが私の目標の近くにいただけさ」

「……………目標？」

ユダを警戒しながらも、ラキは回復の手を休めずに訝しむ。ただ

この状況からユダのいう目標がなんなのか、ぼんやりと想像できていた。大魔王と冥魔に付け狙われる存在、そこに中級魔王が加わった程度なら今更驚くに値しない。

「ミラを貰いに来たのさ、私もね。その娘は冥魔王を解き放つ鍵なんだ」

「冥魔王の、鍵……？」

「ああ、そうだ。……ん、そう身構えるな、冥魔王の堕とし子よ。私は冥魔王復活を支援するだけだ。ミラはお前に渡すさ。どっちにしろ、やることは変わらないからね」

宙に浮かぶユダが再び魔法陣を作り出し、魔法の再発射の準備を行う。もう一回を撃たれれば危険である。また権がアイゼルブルグで防御するしかなくなる。そうすれば今度は堕とし子が合わせ突撃してくるだろう。ラキが迎え撃てればいいが、そうすれば秀助への手当てが間に合わない。

戦闘を長引かせれば長引かせるだけ不利になる。パールはホームグラウンドなだけあってパールゼファールと互角以上の戦いをしてるものの、消耗が激しい。あの強力な力による援護は期待できない。

絶体絶命とは、まさにこのことだ。

進退窮まった状況、これを逆転する秘策、現状でそれを実現する方法は見当たらない。

今にもユダⅡカエサル魔法は放たれようとしていた。炎が膨れ上がり、地獄の業火が魔法陣から解放されようとする。

万事休すか、そう誰もが思った時、この盤面をひっくり返すまさしく魔法の呪文を口にした者がいた。

「——私を、連れて行ってください」

その名は、ミラ。

少女は両足を震わせながらも立ち上がり、そういった。

目元に涙を溜めて、握った拳も震わせながら、精一杯の勇気を振り絞ってミラは魔王と冥魔に再度要求する。

「私を連れて行って！ だからもうみんなを傷つけないでっ！」

必死な少女の訴え。これは護られてばかりの少女が恩に報いるために考えた秘策だった。

秀助達が戦わなければいけないのは自分がいるからなのだから、それがいなくなればいい。そうすれば彼らが襲われる理由はなくなる。これ以上傷つくことはない。

自分を護ってくれること、それはミラにとってすごく嬉しかった。自分なんかを助けてくれるのが嬉しかった。

でも、ここまでだ。これ以上やったら全員死んでしまう。そんなのは嫌だった。

だから、今彼らを護るのは自分の番だ。

ベールⅡゼファー等に捕まれば何が起こるのか、ミラはそれを知っている。堪らなく怖い。怖いが、自分の平穩の象徴となってくれていた秀助達がいなくなるのも同じくらい恐ろしかった。

ミラの言葉に場が凍りつく。誰もが動きを止めた。あの唯我独尊を地で行くパールすら戦闘行動をやめていた。

ユダも魔法を収め、決意の少女を見下ろしている。

権とラキもミラに対してなにもいえなかった。それが最善であるとかわかってしまっているからだ。しかしそれを実際にミラが行おうとしている。この事実に打ちのめされた。

ミラが誰にも邪魔されずに歩みだす。庭の地面を踏みしめて、ベールⅡゼファーの前までやってくる。自分より小さい魔王を涙目で挑むように見つめた。

「……私を連れて行ってください」

ベールⅡゼファアは一拍間を置き、頷く。

「いいわ。彼らに手を出さないことも約束してあげる。蠅の女王の名に誓ってね」

ベールⅡゼファアがミラの手を取り、身体を浮き上がらせる。

ミラが自ら去ろうとしている。それを誰も止めることができなかった。

ユダⅡカエサルは目的が達成されたからなのか無言で消え去り、墮とし子は大魔王に続いて宙に浮く。

沈黙する者共の中、パールだけは状況に困惑しながらも溢れんばかりの敵意をベールⅡゼファアに向けていた。

「ちょっと、なんで誰も止めないのよ！ あの娘を護るっていったんじゃない！ それにベル、パールちゃんとの決着がまだよ！」
「とてもじゃないけど、あたしはそんな気分じゃないのよね。……
決着がつけたかったら自分で殴り込んできてちょうだい」

ベールⅡゼファアとミラ、墮とし子の姿がかすれ出す。消え去るその瞬間、ミラは気づいた。

斃れていた秀助がミラに向かってボロボロの腕を伸ばしているのを。

「だ、めだ……行っちゃだめだ、ミラ……！」

秀助が全力を賭して臓腑から振り絞った懇願。しかしそれは悲愴だからこそミラには届かない。彼女は二度と秀助にそんな声を出してほしくないから、消えねばならないと突き動かされたのだから。

ミラの啞内にしょっぱい味が生まれた。それは、自分の涙だった。

「さようなら……檜馬さん。楽しかったです……」

夢はいつしか儚く消える。ここが夢の覚め時だった。

駄目だ、止めなくちゃ、そう思うものの秀助は言葉にできない。身体中が千切れたみたいに痛くて、舌が回らなかった。

今にいたって秀助は気づかされた。ミラは対人恐怖症でも秀助達を信用していないのではない。彼女は他人を巻き込んで傷つけるのがとても嫌だっただけなのだ。秀助と同じである。そうわかっていたはずなのに、それを表面的にしか理解しようとしていなかった。それが悔やまれ胸が痛い。

とても優しい女の子だけで、東方王国神社での出来事をいつも一番楽しんでいて、なのにも自分がそれを壊す異物だと責めて疎外感を持っていた。

違う。助けると決めたのは秀助自身だ。だから頼っていい。その結果秀助が傷ついたって関係ない。お願いだから悲しまないでほしい。

——さようならなんていうな。今度こそ僕が護ってみせるから——
今度なんて来ないのに。いつかなんてもうないのに。秀助は手を空へと伸ばした。

笑ってみせてほしい。だけどミラは泣いている。さようならと泣いている。もうこの手は届かない。二度とミラに触れることはない。彼女の表情が雄弁に事実を物語っていた。

ベールⅡゼファールとミラ、堕とし子が音もなく消える。

後には後悔だけが横たわっていた。

8..怒れる魔王とイカれた魔術師

私の目覚めは近い。

何百、いや何千年かもしれない。人間にとっては永劫の時を眠っていた。

だが、もうすぐ覚醒する。眠りは少女の犠牲で取り払われるのだ。この私が蘇ること、それは即ち――

――世界の破綻。

＊

意識を回復して最初に秀助を迎えたのは内臓を抉るような激痛だった。

「……………あっ！」

敷き布団の中で微睡む時間すらなくハンマーでたたき起こされる。痛みに慣れた身とはいえ、寝起きに突然襲いかかられたら誰だって声を上げそうになる。それを喉元で食い止めた秀助はなかなか優秀であった。

苦痛の中心である胸を押さえれば衣服とは違う感触がする。涙で霞む視界で確認すれば、拘束されているのかと思うほど包帯が幾重にも巻きつけられていた。純白の包帯は血が染み込み、黒ずんだ斑模様を作っている。

上半身はほぼ包帯で覆われており、布団の中の下半身は身体を圧迫しない楽なスラックスである。しかしこちらの中は包帯が巻かれているのか、密着感が強かった。

「目が覚めた？」

『そのようですね』

真横から声がして振り向くと、ラキが座布団を敷いて鎮座していた。Irisもグローブに装着されている。彼女の周辺には簡易の治療キットとおぼしきものが置かれていた。包帯で手当てをしてくれたのは彼女だろう。制服は上下共に檻褌檻褌になっていたはずだから、この真新しいスラックスと下半身の包帯による処置もラキによるものであるのは明白だった。それは余すところなく身体を見られたというわけで気恥ずかしさが込み上げる——直前、自分が負傷した理由が怒涛のように脳内で湧き上がった。

「……っ、ミラはどうなっ……!」

跳ね起きて、あまりの激痛にもんどり打つ。指先を動かすだけで痛み、まるで神経を走る生体電気が高圧電流に変わってしまったのかと錯覚しそうなほどだった。

慌ててラキが秀助の肩を掴んで制止する。それも秀助には痛みを生じさせたが、さっきの激痛と比べたら蚊に刺されたようなものだった。

「ダメだって、動いちゃ! パールちゃんどわたしが治療したけど、まだ健康体じゃないんだから。傷口が開いたらどうするつもりよ」

「僕のことはいい……っ、それよりミラはどうなった?」

「……連れ去られた。というより、自分から、ね」

自分の身よりもミラのことを意の一番に口にする秀助を見て、ラキは不謹慎だと思いつつ少し嫉妬心を抱きながら、しかしミラを止められなかった自分の不甲斐なさに声を沈めた。

見る間に秀助の顔に絶望の色が広がる。ミラが敵の手に渡ってしまった。それを再認識してしまうと身体の痛みも忘れ、口を無様に

半開きにして脱力する。

力なく四肢を布団に投げ出した秀助は、しかし、またすぐに立ち上がろうとした。ラキは秀助を止めようと手を伸ばす。

「だから寝てなきやダメなんだよ。起き上がれるような身体じゃないんだからっ」

「平気。お陰様でもう直った。ほら、僕龍使いだから頑丈だし」

嘘だ。それなら額を脂汗で湿らせているわけがない。歯も砕かんにばかりに噛み締めている。どう見てもやせ我慢だった。今の台詞を口にするだけでも意識が飛びそうになったはずである。それほどまでに傷は深い。なにしろ治療前は五臓六腑が酷い有様で、骨もいくつか砕けていたのだから、その深刻さがわかる。高位魔王のパールがいなければ間違いなく今頃土の下だった。

そう指摘してラキが寝かせようとしても秀助はある種の脅迫概念に突き動かされるように頑なに拒む。すると、ついにラキが聞き分けない秀助に向かって怒鳴った。

「いいから布団から出ない！ 年上の忠告は素直に聞きなさい、そんなことしたってミラは帰ってこないんだから！」

「――」

ラキが珍しく声を乱して怒り、そしてその内容に秀助は絶句した。そうだ。今起き上がってもいったいどうなるっていうんだ。これは子供が自分の失敗を認めたくなくて申し訳程度に行う誤魔化しと同じだ。気づいてしまつて、秀助はおとなしく腰を落とした。

騒ぎを聞きつけて、廊下から足音がした。襖を開けて、鼻に眼鏡を引っ掛けた権が現れる。

「秀助……目が覚めたのか」

「ああ」

答える声に覇気はない。どうしようもない無力感だけがあった。ここまで自分を情けなく思ったことなど秀助にはない。この身体を支配するそれは驚くべきことに父親が大怪我を負ってしまった時のよりも酷かった。

秀助が無事に安堵しながらも、権は暗い空気を漂わせるその姿に顔をしかめる。

「ミラは……もういないんだね」

「……………」

「助けてあげられなかったんだ」

「ええ。あんたたちが無能だからベルなんか連れ去られたのよ」

独り言になったそれに応えたのは権の背後から現れたパールだった。いつもの衣装で苛立たしげに腕を組み、三人を見回し吐き捨てる。視線には明らかな侮蔑が乗せられていた。

「あそこでミラが勝手な行動に出たのは、間違いなくあんたらが弱いからよ。秀助が先走らなければもっと有利に戦えた。権の到着が速ければ秀助をフォローできた。ラキは慣れない治療より短期決戦を仕掛けるべきだった。どれもあんたらの思慮が浅いからこうなるのよ」

どの言葉も一同に深く突き刺さる。一人一人の弛みが、こんな最悪の事態に至らせた。その事実が重く肩にのしかかった。

「そのせいでパールちゃんはベルとの戦いに水を差されたし、ミラをみすみす持っていかれてベルの計画を阻止するっていう意向も無視した。……ええ、この場の全員を八つ裂きにして侵魔の餌にして

やりたい気分よ」

それは冗談などではなく、今にもパールの力のはちきれそうになっている。東方王国神社を消滅させるにあまりある魔力が渦巻いた。自分の部下の些細なミスを指摘し、お仕置きと称してひねり殺すのが趣味のパールが秀助を治療し今まで全員生かしたことが奇跡なのだ。パールに制裁されても不思議はまったくなかった。

怒髪天とツインテールの金髪を震わせるパールは、弾頭が切り離されようとしている大陸間弾道ミサイルに他ならない。しかも核融合を起こす筋金入りの危険物。そこで触れば炸裂しそうなパールを止めたのは、落ちて着いた女性の声だった。

「——本当にベルの計画を挫きたいなら、彼らを殺してはなりませんよ。魔王パールⅡクール」

なんの前触れもなく、和室にひとりの女性が現れた。長く床にまでつきそうな黒髪に質素なドレスのような衣装。上半身を隠すほどの巨大な書物を抱いている。

秀助、いやこの場の全員が彼女のことを知っていた。

秘密侯爵リオンⅡグンタ。秀助にミラを託した張本人である。

「彼らウィザードという手駒を喪えば、冥魔王復活の阻止を行えなくなりますよ?」

リオンは得体の知れない微笑を浮かべた。それは総ての秘密を手にする者だからこそできる笑みなのだろうか。

リオンの言葉にパールはますます機嫌を損ねた。

「リオン……。パールちゃんに指図する気? 侯爵が超公と対等に話せると思ってるの?」

今日のパールはとにかく気がたっていた。相手が魔王だろうがなんだろうが喧嘩を売るのに見境はないようだった。

しかしリオンは笑みを崩さない。自分が襲われることはないと知っている者の余裕だ。

「あらあら、そんなつもりはないのですが。私はただ、ベルの計画を瓦解させてミラを助け出す方法を教えにきただけです」

その言葉は磁石のように全員の注目を集めた。リオンの発言のインパクトにパールは今し方までの怒りを綺麗さっぱり忘れた。

「なんですって！？　まだベルの計画を邪魔できるの？」

「はい、可能です。ベルの計画が成就していれば、今頃狭界はなくなっているでしょうし」

和室の部屋から見える外は暗い。夜だ。秀助が一日中気絶していたなどではないなら、あれから数時間経っている。しかし騒ぎは感じられない。世界の危機に直結する事態が起こるのなら、たとえば森の中に建設されている東方王国神社でもわかるはずである。

——まだ、間に合うのか？

「まだ、ミラを助けられる……！」

それだけで秀助の中に沈殿していた暗澹たる闇が払拭された。ミラは生きている。助ける術があるとこの秘密侯爵が知っているのだから、信用する価値は充分にあった。

「鍵であるミラには時間稼ぎの細工が施されていますから、鍵穴に同化するまでは人間時間で後二時間あります。助けるのであれば――

「」
「ちょっと待った」

進んでいく話に権が手を挙げてストップをかけた。パールが猛烈な勢いで彼を睨むが、冷や汗を流しながらも無視する。

「そもそも冥魔王とかミラが鍵やら、わからないことが多い。あの堕とし子やユダⅡカエサルについても気になる。パールⅡゼファーも何故こんなことをやり始めたんだ？」

もったもな疑問だった。秀助も聞かされずにいたため、興味がある。ラキとパールもそれには関心を示した。が、そんな細かい部分よりパールⅡゼファーに横槍を入れられるらしいことだけで後者は満足のようで、そちらはついといった雰囲気である。

秘密を訊ねられれば、秘密侯爵は躊躇うこともなく饒舌に暴露し始めた。

「時間がなかったので槍馬秀助にも話していませんでしたね。冥魔王とは、文字通り冥魔を統べる王のことです。正確にはそのひとり、”悪食のけもの”。人間にとっては気が遠くなるほど昔、時空の狭間に封印された冥魔です。かの存在を危険視した魔王キースⅡラグランジュとウィザードが協力することにより、その封印はなされました」

“冥魔王”悪食のけもの”——。昔の魔王とウィザードにより封印された魔物。古から封印された冥魔などは、それなりに前例がある。人類有史以前から月に縛り付けられた冥魔などもウィザードの歴史にはいたのだ。最近冥魔の動きが活発になっただけで、表界にも少なからず存在はしていたのだろう。

そうなると、鍵といわれるミラの秘密も臆気ながら想像できた。

長年封印を維持する方法——そのひとつに転生がある。対象の封印、または封印を開く鍵となるものを人間に仕込み、それを身体に内包させたまま転生を繰り返すのだ。無論、これ以外にも手段は星の数ほどもある。ただ、この転生——生まれ変わり——を利用した封印の数が比較的多いのだ。

鍵などと呼ばれこの方法を思いついた秀助だったが、それをリオンが次の瞬間に斬って捨てた。

「次にミラですが——そもそも彼女は人間でも侵魔、冥魔ですらありません」

「はあ……っ!？」

これにはパールも含め全員が驚いた。

ミラは簡易の月衣こそ纏っていたが、あくまで少しプラーナの多い人間にしか見えなかった。泣きもするし笑いもする。料理もできれば食事もできた。あれのどこが人間でないというのか。

全員の困惑を感じ取ったリオンが話を続ける。

「彼女は冥魔王を封印する一部——いわば安全装置です。ベルによって力づくで封印が破壊されようとした時、冥魔王の核と呼べる部分を宿して、人間を模倣し産み落とされました。彼女は冥魔王を抑えつける封印の重要部位である”鍵”が人の姿をとったに過ぎません。ミラというのも私が名付けましたから」

秀助は、まだ自分がミラを誤解していたことに気づいた。リオンの口振りからしてミラはまだこの世に生を受けてから五日も経っていないということになる。秀助と初めて出会った時はもっと短かったに違いない。だからあんなにも人に慣れていなかった。きっと秀助はミラが初めてまともに会話した人間だったに違いない。

突然産み出されて、しかも命をねらわれる。それは不安なはずだ。

初対面の時あんなにも緊張していたわけである。

それなのに自ら浚われるような状況にしまった自分の弱さが秀助には悔しくてならない。

リオンがちらりと責めるようにパールを見た。

「……パールならミラの異常性に気づけたはずですが？」

「うっ……な、なによ、パールちゃんだって気づいてたわよ？ 本当なんだからね！」

ならばそんなに動転することはないだろう——とわざわざ口にする馬鹿はいなかった。

顔を紅くしてそっぽを向くパールを尻目に、リオンはこちらの問いに対する回答を次々と提示してくる。静かな口調に淀みはなかった。

「……あなたたちを襲った墮とし子は過去に部下だったものを冥魔王が復活させたものでしょうね。槍馬秀助は表界でも冥魔王操るダークドールとも交戦したはずです。緊急でミラを産み落としたため封印にほころびが生じたでしょう。ユダⅡカエサルは……ベルに便乗して世界を滅ぼすつもりですね。だからミラ奪還に協力したのです」

リオンから語られたことにより、疑問が解決していく。

ベルがミラを狙うのは今封印を破壊しても冥魔王は指向性のない力として一緒に死滅してしまうからだろう。なにしろ核は鍵でもあるミラの裡にあるのだから。

「猶予は二時間。それ以内にミラを奪還すればこちらの勝ちです」
「……リオン、貴女超公であるパールちゃんを差し置いて勝手に話を進めすぎでない？」

今度はパールがリオンに物申した。もしかするとパールと権の主従は似たもの同士なのかもしれない。

再び水を差されたリオンは、それでも顔色ひとつ変えずに首を傾げた。

「まだ気になることでも？　ベルの計画を邪魔するのに異論があるのですか？」

「いいえ、ベルに落とし前をつけさせるのには賛成よ。パールちゃんも協力したげる。でもね、まだリオンがベルと敵対する理由を聞いてないのよね」

ミラを救える、という情報に捕らわれて敵側の情報をかき集めるのに集中し過ぎるあまり秀助達もすっかり失念していた。リオンはいつもならベルに協力しているはずなのに、何故今回に至っては対立しているのか。

これは重要である。ここに来て味方だと思っていたリオンに寝首をかかれる可能性だってあるのだ。先程の情報も本当かわからなくなる。ミラをわざわざ秀助に託すなどしたリオンを今更疑うのは無駄に思えるかもしれないが、完全に信用する材料を持っていない相手の口車に乗るのはとても危険だった。

おおざっぱに見えてきちんと指摘するパールにラキとIrisが感嘆に声をあげた。

「おー、暴れてるだけじゃないんだね。びっくりした」

『ええ。ワタシもてっきり口より先に手がでる類の魔王かと』

「あんたら褒めてるのか貶してるのかどっちよ！？　まったく……それとリオン、わざわざミラを狭界に連れてきた理由もいいなさいよ。あたしたちが強くなる狭界より、表界の方が護り易いと思うんだけど？」

パールと言葉にリオンが返答に窮した。さっきまではまるで台本を読み上げるかのような調子だっただけに、パールは不信そうに眉を寄せる。

「どうしたの？ まさか云えないなんてわけじゃないでしょ？」

「いえ……どう話したらいいか迷っていました。まず冥魔王の力について話さなければなりません」

「話逸らしてない？」

「私の目的を説明するには必要なですよ、パール」

復活を阻止しなければならぬ冥魔王の力、その凶悪極まりないものをリオンは語った。

「冥魔王の力とは、魔王アゼルⅡイブリスと酷似したもの——プラナーの吸収です」

魔王アゼルⅡイブリス。それは全身を魔殺の帯という包帯状のものでだけで隠している魔王である。彼女にはプラナーの吸収能力があり、それは常時発動してしまっている。アゼルⅡイブリスに近づけばウィザードでさえ一瞬でプラナーを吸い尽くされて消滅してしまうのだ。とんでもない能力である。それは魔王にすら凶悪的な存在であり、しかもアゼル自身止めることができないのだから始末が悪い。

そんなアゼルは衣服もプラナー奪い吸収してしまうため、自分の力を押さえる魔殺の帯を全身にまいて荒野と化した領地で孤独に過ごしているという。

「彼の吸収能力はアゼルにこそ及ばないまでも、即座に吸収したプラナーを自分の力にしてしまうのは驚異です」

「冥魔王が凶悪なのはわかったけど、それとリオンの目的に関係があるの？」

「ええ。冥魔王の封印がとければ、まず衰えた力をつけるために近場の世界に侵入し、プラーナ吸収能力でそこを喰らっていき力をつけるでしょう。この時はまだ表界には侵入できません。世界結界を突破できませんから。だから、冥魔王は一番手近なラビンススティに現れるはずですよ。私はこの世界に滅んでほしくないのですよ」

そこでリオンは恥ずかしそうに書物で口元を隠した。髪に隠れた真っ白い頬を少しばかり紅くして、

「その、この世界にある図書館にはまだ未読の本があるので……」
「……あつ、そう」

そんな理由かよ、と一同は呆れて肩を落とした。それだけでベールゼファアに反旗を翻すとはたいした魔王である。

全員の呆れた視線を受けて咳払いをひとつすると、リオンは氣を取り直す。もう顔は能面のような無表情に戻っていた。

「それで、何故ラビンススティに止まらせたか、ですが……そうする他なかったんです。表界にミラが入れませんので」

「どうということ？」

これはパールではなく秀助だ。またしてもミラの名前がでてきたために強く興味を惹かれた。

「ミラは不完全な月衣を持ってしまったがために世界結界に守られた表界には侵入できません。月衣は元来世界結界の干渉を防ぐためのものですが、不完全な月衣は世界結界を阻みきれず逆に積極的な排除対象として認識されてしまう」

だからラビリンシティにいる必要があった。もし無理やり表界にミラを押し込めば、その存在は抹消されてしまっていただろう。だからベールⅡゼファアの力が強くなると知ってもラビリンシティにいないければならないジレンマだった。

「だから私は軍資金も槍馬秀助に与えたのです」

「……返した方がいいですか？」

「別に構いません。依頼料と思ってください」

東方王国神社にいたせいで食費にしか使い道がなかったため、まだまだかなりの金額が秀助の月衣に収められていたりする。当分なくなりそうになかった。

リオンは全員を見て、これ以上質問がないか確認する。リオンによりもたらされた情報はこれから戦略を練り、ミラを助け出すには現状で充分なほどの量だった。秘密侯爵リオンⅡグンタでなければ到底もたらすことは不可能な情報だっただろう。

しかし、そこで秀助が痛みに顔を歪ませながらも小さく挙手していた。一番ミラを助けたいと思っている——少なくともリオンにはそう見えた——が、さっきとは打って変わりやけに落ち着いた冷酷ともとれる表情で主張した。

「——ミラを助ける必要性はあるの？」

8..怒れる魔王とイカれた魔術師（後書き）

正直すまんかった。刹那です。

いやこういう所で止めるのは作者の自己満足に他ならないとは思っているのですが、時間的にここまででした。次はできるだけ早く更新しようと思います。

さて、主人公達は反撃するのかしないのか。続きにご期待してくれればよいなと思ったりする。

9..選ぶ意志、求める翼

秀助の言葉に場が凍った。世界が音を忘れ去ったのかと思うほど、この一室は静謐だった。

数秒後、世界が息を吹き返す。

真っ先に音を思い出したのはパールである。彼女は相手が怪我人であるという事実を忘れ——仮に認識していてもそうしただろうが——勢いよくつかみかかった。

「ちょっとあんた、いきなりなに云ってんのよ！ さっきまで助けられるって喜んでたじゃない」

「……それとこれとは関係ない」

痛みに顔をしかめながらも、秀助は掠れ声でつぶやく。

「ミラを見捨てれば、この二時間で……他にもっといい方法があるんだよ」

目を伏せて秀助は極めて冷静に持論を提示する。

「二時間後、冥魔王が復活する。だけど、その状態では世界結界も突破できないほどに弱い。なら復活した直後なら、まだどうにかできるんだ。今からラビリンスシティのウィザード組織に協力要請をして、侵入してくる冥魔王を待ち受ければ……安全に処理できる」

今最大のネックなのは二時間以内にミラを奪取しなければならなということだ。そうしなければ冥魔王は復活してしまう。だが、この問題を見無視しあえて冥魔王を復活させるというのなら——二時間という猶予でもっと効果的な作戦を行える。

ラビリンスシティのウィザードは中途半端な強さはしていない。彼らが大勢で冥魔王に攻撃を仕掛ければ、勝利することは難しくはないだろう。

それにもしミラの救出に成功しても冥魔王自体は消滅せずに残ってしまうのである。元凶は確実に断っておいた方が遙かに安全だ。少なくとも秀助達少数でミラを救出に行くよりは成功の可能性も高いだろう。なにせこちらはある合わせの準備ですぐに向かわねばならないが、二時間を使えばどのウィザードも装備を整えられる。確実に世界の危機を防ぎたいならば、小を切り捨てた方がいい。だが、パールは激怒する。その意見は断じて通せない。

「なによそれ、自分でミラを護るって……」

「……護れなかったんだ。もう最善の事態にはなりえない。なら、最低でも最悪の事態は防がなきゃならない。そのためなら、ミラは——もう無理だと諦めるしかない」

秀助は小を殺して大を生かす、な思想は好きではない。むしろ腸が煮えくり返るほどに嫌いだった。しかし、それを主張していいのは自分の役目をこなしているときだけである。今の秀助は護衛という役目を果たせなかった。役目め果たせなかった未熟者が無謀な賭けにでるのは、無責任極まりない。役目を果たせなかった自分には思想に反発する資格はないのならば、今度はウィザードとしての義務を果たすべきだ。

敵である冥魔王の詳細を改めて聞かされた時に、秀助の頭の中でスイッチが切り替わっていた。冷徹な世界を守護する者として。諦観の入り混じった秀助の言葉にパールが喉笛を喰い千切らんといい気迫で吠えた。

「このっ、情けないことを……！ 冗談も大概にしてほしーわね、あんた。どこぞの世界の守護者みたいなこといって……まさかミラ

が人間じゃないから見捨てていいと思ったわけ！？ 人間ってよっぽど高尚で素晴らしい生物なのね、反吐がでるわ」

「――違うッ！」

秀助は喉を裂かんばかりの大音声で否定する。続いて出たのは驚くほど弱々しい声だった。

「そんなんじゃない……。ミラは、ミラだ。変わらない。あの娘は、ただ少しばかり月衣が張れるだけの女の子だ……」

声は弱くとも、秀助の言葉に偽りは無い。ミラが本当は人間でないからといって、なにが問題であろうか。それで彼女の笑顔が変わるわけではない。人間ではないというだけで彼女の価値が下がったというような輩がいるならば、秀助は断じて許すことはできないだろう。

「なら、自信がないのね。手ひどくやられたから尻尾巻いて逃げるのよ」

「自信？ ……こんな状況でまだ自信が残ってるなら、それはただ身の程知らずじゃないか。自分の力のなさが今の事態を招いたのに、弱いままの自分がこの状況をひっくり返せると自惚れてるんだから……っ！」

「秀助……」

ラキが、小さなうめきを洩らした。

秀助は痛む拳を力いっぱい握り締める。包帯には血がにじみだし、爪が掌の傷をえぐっているのがわかった。しかし秀助の苦悶の表情は肉体的痛みでなく、精神的な痛みに由来するのかもしれない。辛くないわけがないのだ。秀助はこのメンバーの中で一番ミラと親交が深かったのだから。ミラとの会話頻度もダントツである。護

衛任務も張り切っていた。でなければ、いくら大魔王が隙らしいものを見せたといっても接近しようなどという蛮勇——それは振るうことすらできなかった。

しかし秀助はウィザード、しかも現在は世界の危機の渦中にいる。私情だけで動くなどできるわけもない。

騒然とする和室にひとときわ不釣り合いな衣装のリオンは、秀助の論を裏付ける。

「……まあ、その方法なら冥魔王の撃退も可能でしょうが」

『成功確率は低くない作戦だとは判断しますが』

秘密侯爵と高性能AIのお墨付きももらった。ならば、躊躇する時間が惜しい。すぐにウィザードの組織に連絡をいれなければならぬ。刻一刻とタイムリミットは迫っている。

助けることを放棄する——そんな空気になっていた時、ずっと黙っていた権が眼鏡のレンズ越しに秀助を射抜くように見た。

「それでお前は満足なのか？」

「……満足だとか、そういう問題じゃ、」

「そういう問題なんだよ」

腕を組み、権は背を壁に預ける。視線は固定したまま秀助から外さない。

「お前はミラを見殺しにして助かった世界でのうのうと暮らしていくことになって満足か、と聞いてるんだ」

それは電流となって秀助に走り抜ける。世界、ミラ、見殺し。漠然とした映像、ミラの喜怒哀楽、それが絶望に染まったイメージ、それらが脳内で暴れまわる。

ぎり、と音が鳴った。それは秀助が齒を軋ませた音に他ならない。

満足か、そう問われれば答えはひとつ。

——否、だ。

満足なわけがない。そんな世界は真つ平御免である。瞼を閉じればミラの表情はまだ鮮明に思い出せる。これはとんでもなく重い十字架だった。

「だけど……、だけど、そうしないと世界は滅ぶかもしれない」

まるで自分に言い聞かせているような口調。だが自分すら信じていない上辺の言葉は、人の意見で容易く壊れる砂丘だった。

「あくまで”かもしれない”——なんだろう。なら逆に世界は滅ばないかもしれない」

「それは詭弁だ。自分に都合のいい解釈に他ならない。それならミラを見捨てても世界は滅ぶかもしれない、ともいい出せる。キリがない」

Ifという言葉に縋るなんて、世界を護る者にはあってはならぬことである。そんな不確かなもので動く人間を誰が信じられるだろうか。それにもし、と立ち止まっていたらどんな選択だって出来はしない。だから、その時もっとも確実と思われる手段を選ぶ。そして人間はそれが失敗したら、もしあの時あえていけば、と悔やむ。二度と判断を間違えないように。自分の戒めとする。

だけど、と秀助の中で感情が疼いた。ミラはまだ過去じゃない。現在だ。助けられる可能性はある。いや、それでも確実じゃない。だから自分はミラを助けないといったんじゃないか。

いつか、もしあの時ミラを助けようとしていればと後悔するかもしれない。でも少ない人間の後悔で世界が救われるなら、安い。安

い決断だ。天秤は拮抗することすらない。

なら、これを飲み込むのが正しいじゃないか――。

「……秀助、お前が本当にやりたいことをいってみろ」

じつと権は秀助から視線を離さない。

やりたいこと。ウィザードとしてではなく、槍馬秀助という一個人が実行したいこと。

それなら決まっている。迷うことすらない。秀助は自分でも誰に向けたのかわからない怒りを孕ませ、即答した。

「……くないさ」

「なんだ？」

「見捨てたくないさ、僕は！ 当たり前だろう、あんな娘を犠牲にするなんて割り切れるわけないだろう！？ でも、でもさ、僕には力がないんだよ、彼女を取り返す力が！」

傷だらけの身体。これで戦うなど不可能である。侵魔一匹斃せない。なによりこの傷は弱い自分を象徴している。

無理なのだ。今の秀助には力と思いがつりあっていない。とてもじゃないが、助けになどいけないではないか。

「――なら決まりだろ」

しかし権は難儀そうに溜息をついて壁から背を離した。

「ミラを助けたいなら、助ければいい。どっちも助けられる可能性はまだあるんなら、それが多少難しくてもやるに越したことはない。ウィザードは世界の危機を救うんだろう？ なら、ひとりくらい多く救ってやるさ。お前ひとりじゃ無理なら、俺がいる。いくらでも

協力してやる」

「わたしも！ 助けるために戦うのは依存なし。全部救えるならそっちの方が断然いいよね、やっぱり」

『確実性には欠きますが、それがこのメンバーの最善の選択であると思います。それを行うなら全力でサポートしましょう』

みんなが手をさしのべた。秀助はひとりじゃない。優秀な仲間がいる。しかし、彼らに頼っても成功するかと問われても、やはり低い。低いから、秀助は見捨てようと思った。酷い行為とわかっていても、堅実さがある。

「ただし、ミラを助けにいくならば保険はかけられません。寄り道すれば助けだせる可能性が半分以上になります」

リオンが危険性を伝えておく。確かにウィザードの組織を信用させるには直接大人数で押しかけるしかない。いくらウィザードの組織といっても、いきなり電話やひとりですべて来たウィザードなどに二時間以内で敵の迎撃準備を——といわれて信用するわけがない。それに戦力はひとりたりとも削れなかった。それだけで成功する可能性は絶望的に低くなる。

故にこれは二択である。

この選択は大勢の人間の行く末を左右する。でも、秀助の中でミラを救出したいと願う欲求が強くなっていく。

これはエゴだ、と秀助は思う。たまたまその場に居合わせた者が世界の命運を左右する。選択の責任が両肩にのしかかって、世界が滅べば責任の所在すら消えてなくなる。人のエゴが世界を滅ぼす。いいのか。エゴで世界を振り回す。それが正しいのか。正しいわけがないだろう。今この瞬間世界を滅ぼすか救うかを決めているのは冥魔王でもベールⅡゼファーでもなく槍馬秀助だ。

圧倒的なプレッシャーに苛まれる。その秀助に、権がいう。

「信じろよ、仲間を」

「もう一回、わたし達を」

だが、相棒達にここまでいわれてまで——曖昧模煳な”世界”を優先するべきだろうか。

するべきだ、と囁く者がいる。するべきでない、と頭を振る者がいる。

どちらが正しくてどちらが正しくないのか。

結論。どちらも正しくはない。

正しい選択などこの世に存在しえない。あるのは自分が考え抜いて信じられると思った答えだけだ。ならば、それはエゴの塊かもしれない。

エゴを肯定するわけではない。失敗すれば非難を受けることさえできなくなる世界になる。

だが、それでも、槍馬秀助という人間には後悔したくないための選択がある。

「助けたい。僕はミラを。だから、みんなに頼る。手を貸してくれ
る？」

「そういつてるだろう」

「モチのロン！」

『やるならば徹底しますよ、ワタシは』

口々に同意があがる。みな、ミラを助けるため危地に飛び込むのを厭わないという。その様子に影響され、秀助の裡で激情が湧き上がった。

ああ、そうだ。結局見捨てるなんて出来ない。
自分達の無力故にミラが去ったというのなら、力でミラを取り返そう。

「ふ、ふんっ。まどろっこしいのよ、あんたらは。助けにいくなら最初からそういえばいいのに。……パールちゃんも行くんだからね。ベルに地団太踏ませてやるんだから」

「すいませ……いや、ありがとうございます」

途中で苦笑混じりに秀助はいい直す。これは自分がミラにいわせた言葉だった。こういう時は感謝するべきなのだ、と思い至る。ミラにもさよならとかごめんなさいじゃない。またありがとうといわせたい。そういうる状況を作ってやりたかった。

「……すいませんが、私は同行できません」

リオンが控えめな声で断った。

「私は他の所で計画阻止に動かなければなりません。私がミラの護衛を頼んだのもひとりでは限界があったからですし……」

なるほどと秀助は納得する。秀助に任せるより自分で護衛した方が安全だったにも関わらずそうしなかったのは、できないわけがあったのだ。

パールも秀助と同じく喉につかえていたものが取れたような顔になる。

「ああ、だからこないだパールちゃんにベルの計画を密告した時にもすぐに消えたのね」

「……そういうことです。しかし——」

するとリオンが膝を突くと、硝子細工を扱うような丁寧さで掌を秀助の胸に寄せる。ささやきで呪文を作るとリオンの掌からは暖か

く力に満ち溢れた魔力が現れた。

これは急速に秀助の傷を塞いでいき、さいなんでいた痛みもすべて払拭した。

「これくらいの手助けはしましょう。……パールの治療は杜撰ずさんでしたから」

「あ、あんたねえ……！」

眉をつり上げるパールの横で権はなんともいえない表情をしていた。彼の記憶が不安定な原因もやはりパールのせいなのかもしれない。

ともあれ、秀助の身体は十全の状態まで持ち直した。礼をいってもう無用となった包帯を取り払えば、ベールⅡゼファーによる攻撃の傷跡は一切見当たらない。

仲間頼るだけじゃない。自分の力で敵と戦える。その事実が歓喜となって秀助に押し寄せた。

「ベルは冥魔王をすぐラビリンシティに送り込むため、空間を繋げています。その地点に行けばミラもいるでしょう。……ここがそうです」

リオンは宙にラビリンシティの立体地図を浮かび上がらせる。まるでSF映画に出て来る三次元マップだった。青い円錐形の矢印が現在地である東方王国神社を示し、紅い円錐形の矢印が敵陣地を表している。

場所はラビリンシティの最西端であり東方王国神社とは正反対の位置にある嘆きの海と呼ばれるところだった。

「ベルはラビリンシティでの戦いゲームを勝ち抜き、冥魔王という駒で表界を滅ぼします。これをミラを奪い返し阻止する——。タイムリ

ミットは一時間五十八分三十八秒。あなた方の手腕にすべてはかかっています」

では、トリオンは地図を消すと虚空に溶けていった。
もう和室にいるのは秀助、権、ラキ、パールの四人。

「さて、後もう一仕事だな」

「うんうん、早く済ませてお風呂入って布団で寝たいよ」

秀助はラキの何気ない台詞に、疲労の色が現れたのを見逃さなかった。今まで余裕がなくて気づけなかったが、権もどこことなく疲れている。それはそうだ。ベールⅡゼファー達との戦闘はつい数時間前に行われていたのだから。しかもその後は秀助の看病をしていたので疲労が溜まるのも当然である。

秀助は急に申し訳なくなった。みんなミラを護れなくてショックを受けていたのに、自分だけが何もかも背負っていたかのように振る舞っていた。

「みんな……」

「おっと。それ以上はいい。俺はお前の相棒だからな」

「わたしもやれることやっただけだしね。謝る暇があるなら早くミラちゃんを助けに行こうよ。一時間五十八分しかないんでしょ？」

『たった今一時間五十六分五十三秒になりました』

「……このIrisっていうの、本当に細かいのね」

パールが呆れと感心をない交ぜにしたような声を上げた。
そして、ここからが、

——秀助達の反撃開始だった。

＊

闇。もしくは泥。汚泥のような闇。暗黒。深淵なる闇。冥界の黒。狭界、ラビリンスシティと空間が接続され大きな風穴が穿たれているにも関わらず——ソレの世界は相も変わらず光の概念を遮断する。暗黒世界に入り数歩進めば後は不自然に光がなかった。

光の入らない絶対の不可侵領域。もしくはこの黒を巨大な物体かなにかではないか——と考えるものもいるだろうが、ソレに光沢は一切ない。つや消し処理がされた、などでもなく、すべてが均等な闇。

「あ、あああ……u a a……っ」

少女の哭声がする。

ひとりの少女が、磔刑にされた聖人のように両手を広げて”闇”に拘束されていた。

闇から伸びるいくつもの黒い帯が両手足と胴体をきつく縛る。闇は個体であるかのように自分に少女をくくりつけていた。いや、足先や両肘などが闇に溶け込み視覚化できないことから、同化というべきなのだろうか。

闇は帯を無遠慮に少女の身体に這わせる。そのたびに苦痛に耐えるあえぎが洩れた。肉に深く食い込むほどの力で締めつけてくるのである、その痛みは推して知るべし。

その少女を笑みを浮かべてみる魔王がいた。

「痛みに悶える姿、なかなか扇情的ねえ、ミラちゃん。男が見たら欲情しちゃいそう。でもその痛みもいずれ感じなくなるんだから、大事にしなさいね？」

痛覚さえ失わせようとしている張本人であるベールⅡゼファーは

歌うようにいった。

闇に蹂躪される少女、ミラは気丈にベールⅡゼファアを睨む。この責め苦が始まりもう数時間、それでも少女には抵抗する意志が残されていた。

「わ、た……しは、負け、ません」

「残念。あなたには負けしかないのよ。勝つという方法がないんだもの」

ミラはもう負けるしかない。冥魔王に吸収される以外に道はなかった。

助けは来ない。となれば戦闘能力のないミラは一方的に犯されるしか道はないのだ。絶望の未来しかないミラをいたぶるのが心地よいのか、帯は蛇のように這いずりまわる。

「あ、う……ひあっ……あ」

ミラが背をのけぞらせてうめいた。目尻に涙が浮かび、頬をつたう。

そうだ。ミラを助けるような存在はない。むしろ彼らには助けてほしくなかった。でなければ自分から敵に捕まった意味がない。もう傷ついてほしくないから去ったのだ。

しかし冥魔王が復活したら——彼らはどうなるだろう。危害が加わらなければいいのだが。ベールⅡゼファアは約束してくれた。が、果たしてくれるか確認する術は、ない。その時この世に自分の存在はないのだ。仮にベールⅡゼファアが約束を守ったとしても、冥魔王はどうする。これはすべての存在を糧とする忌まわしき煉獄の獣。己以外の物質を喰らわなければ飢餓を抑えられぬ獣に、分別はない。等しく平等に一切の差別も区別もせず、慈悲も見せずに喰らい尽くす。世界を灰燼と帰すまで、永劫に。

ならば、ミラの選択は間違っていたのか。少なくとも選択としては下の下だった。世界と彼らを天秤にかけ、ミラは彼らをとったのだ。

それでも、彼らが傷付くのを見たくはなかった。たとえ自分の行為が結果的に彼らを苦しめ、絶命させるものだったとしても、ミラには耐えられなかった。

だって——人間じゃない私のためなんかにあれほど必死になってくれたから。

「こんなの、槍馬さんの怪我に比べたら……全然平気です」

嘘。全然平気じゃない。痛い。ずっと痛い。脂汗で前髪が額に張り付くほどに痛い。泣きたかった。泣いて助けを請いたかった。だけど、それは何よりミラ自身が許さない。

ベールⅡゼファーには、否、誰が見てもそのやせ我慢は筒抜けであり、大魔王は蠱惑的な笑みを浮かべた。

「やせ我慢ね。でも必死になって虚勢を張る姿は愛らしいわよ」

すっ、とお互いの息がかかるほどの距離までベールⅡゼファーが近づくとミラの頬を指先で撫でた。爪先まで綺麗な造形品のような指が肌を滑るとミラは喉の奥から吐息を洩らす。

「ん……っ」

そんな様子のミラを楽しげに見つめるベールⅡゼファーに、それは忍び寄った。それらは言葉は介さないが、いいたいことはよくわかった。

獲物だ、と。

新たに闇から生まれた帯——獲物を捕まえる触腕といった方が正

しいか——が食事にありつくイカのようにベールⅡゼファーへとりついた。

殺到した触腕は腕を肩まで拘束し、未成熟な身体を縛り付ける。さらにほどよい肉付きの細足にも巻きついた。履いているニーソックスのゴムなどとは比べものにならない圧力で肉を歪めながら、それは拘束範囲を広げるために足を這い上がる。自然と触腕は無防備なスカートの中に入る形になり、

「——調子にのるんじゃない」

ベールⅡゼファーが掌から魔力がほとばしった。稲妻のように吹き出した魔力が足下の触腕を切り裂く。血はでない。しかし痛覚、あるいは強大な力を持つ者を恐れる本能はあるのか、怯えてベールⅡゼファーを拘束しようとしていたすべて触腕を引っ込めた。

足にまわりついた触腕の残り滓を手で払って毒づく。

「補食圏内に入ったら見境なし……駄犬ね。あたしを誰だと思ってるのよ。消し飛ばしてやろうかしら」

「従えられてないん、ですね。飼い犬に手を噛まれる……て、いうんですしたか。こういうのは」

ミラは産まれて初めて嘲笑というのは浮かべた。これが彼女にできる唯一のささやかな反抗だった。

「あらあら。いうじゃない、ミラちゃん」

ミラにできる反抗がそれだけと知っているベールⅡゼファーは余裕の表情で、むしろその言葉を口にする姿を微笑ましげに見る。それがミラには悔しかった。なんら痛痒も与えるに至っていない。

逆にベールⅡゼファアはどんどんミラを追い詰める。

「ところでミラちゃん、あたしはあなたの仲間に出さないとはいったけれど、あちらから攻撃してきた場合の防衛は……正当よね？」

一瞬言葉の意味がわからず混乱して、次にミラは我が目を疑った。
なんで。どうして。なぜ。

こないで。きちゃだめ。いますぐにげて。

ここには大魔王が、暴力の権化がいるのに。

徐々に彼らの輪郭がはっきりと見えてくる。ウィザード三人に魔王一人の構成である彼らをミラは知っている。むしろ彼らくらいしか知っている者はいない。

ここへ彼らがやって来たことに言葉を失ったミラの隣で、ベールⅡゼファアは嗤った。

「さて、ここからファイナーレに向けて踊りましょう……ウィザード。そしてパールⅡクール」

——ミラ消滅まで後一時間三分十八秒。

10…落つる天の星

潮の匂いが風に運ばれ鼻孔を刺激する。

眼下では波が浜に寄せては返し、また寄せている。

秀助、権、ラキは愛用の箆に腰掛けて浮いていて、パールだけは自力で飛行していた。ウィザードも自立飛行は可能だが、魔王ほど速く自在とはいかない。これも力量の差だろう。

「繋げられた空間……あれかな？」

ラキが指差した方向には、サスペンスドラマで事件の犯人が動機を吐露していそうな崖があった。岸壁の先端にブラックホールのような黒い歪んだ穴が虚空に開いている。

「だろうな。あそこから魔力があふれている」

「なら、とつとと殴り込みに行つてやりましょうか——」

パールが意気揚々と飛び出そうとした時、紅い月が空に昇った。世界が一瞬にして紅に染め上げられる。

月匣。

秀助が背後を振り返って目を細める。パツと見ではわからないが、そこが月匣の中と外の境目だ。

月匣とは世界結界を逃れるためだけが使用法ではない。これは世界の一部を隔離する技術である。簡単にいえば、秀助達は月匣という結界に閉じ込められてしまったということだった。

この月匣を作り出したものは考えるまでもない。ベールⅡゼファ―である。

「退路は断たれた、ってわけかな」

「ふんっ、ベルの月匣なんてパールちゃんなら一撃で破れるんだから。最初から逃げ出すつもりなんてないけどね」

パールが腕を組みあまり大きくはない胸を張った。事実、パールⅡゼファールと一対一で張り合えるパールならこの月匣を破ることは、それほど難しくはない。全力の一撃を喰らわせれば硝子のように碎け散るだろう。逆にいえば、パールもそれなりに力を込めなければ壊せないわけである。もしこの月匣に秀助達を入れないよう作れば、パールに余計な力を使わせられるということであり、その分戦闘時に優位に立てる。力量の拮抗した者同士の争いは些細な差が勝敗をわけるとだ。それをしないのはつまり、

「遊んでる、のかな？」

「ベルが余裕ぶるのはいつものことよ。そうしていつつも後悔してるんだから、学習能力ゼロなのね」

パールが人を馬鹿にした笑みを浮かべた。パールⅡゼファールを自分が後悔させてやる、という自信だろうか。きっと彼女の脳裏には打ちのめされて目を回すパールⅡゼファールの姿があるに違いない。その傲慢なまでの自信が今は頼もしいことこの上なかった。

それにパールⅡゼファールはパールに結界を破壊される、ということとを嫌った可能性もある。パールが強い魔力を放てばそれを嗅ぎつけた者達が集ってくる可能性があった。だが月匣を展開すれば内側でどれだけ派手な戦いをしようとも、外に洩れることはない。なら、その嫌う行動をとってウィザードや魔王を引き寄せるのも手ではあるものの、そうすれば今度は対パールⅡゼファールの重要戦力であるパールが弱体化することになる。

どっちにしろ黙って進むしかない——なるほど、大魔王とは力だけではないらしい。

「あそこで大魔王がお待ちかねか……。時間がない。とつと殴り込みにいこうか」

「……そう簡単にはいかせてもらえないみたい」

ラキが不機嫌そうに眉をひそめた。秀助達もラキの視線を追って、その者に気づいた。上空でロープをはためかせた紅い月の下でさえはつきりとわかる灼熱の髪の魔王は、掴みどころのない表情をしていた。

「そういうこと。後一時間なんだ……。君達は邪魔しないでくれないかな？」

ユダⅡカエサル、ミラを奪った魔王のひとり。

全員が即座に身構える。秀助は座っていた箒の上に立ち上がりサーファーのような体勢になり、権はスキーをするような格好になった。

相手は魔王、とはいえベールⅡゼファーよりもずっと劣る。ならば、勝てる。時間はかけられない。早急に撃破するべし。

いつでも殴りかけられるよう拳を握った秀助をラキが止めた。

「ここはわたしひとりでいいよ。みんな先に行って」

平然と喋ってのけられた台詞に、秀助は戸惑う。権やパールも少しばかり驚いていた。魔王をひとりで相手にするのは酷く無謀なことだと思えた。

秀助が判断に困っているのがわかったのか、ラキが明るい笑みを浮かべて心配を吹き飛ばそうとした。

「ユダ相手なら前もひとりで戦ったから、別に勝算がないわけじゃないのよね。だから全員で戦う必要はなし！　もし逆に相手が時間

稼ぎしたら厄介じゃない」

『客観的に判断してもラキが不利というわけではありません。先にお進みください。もう残り五十六分二十九秒しかありません。これさえリオンⅡグンタの言葉から計算を始めただけで正確かわかりませんから、お急ぎを』

「Irisがそうまでいうなら……」

AIであるIrisがいうのなら、本当なのだろうと秀助は制止することをあきらめた。ラキは自分ではなくIrisの主張で納得したらしいことが不満な様子であったが、追求するのは時間が無駄なのでやめておいた。

「そんなわけでユダ、貴女の相手はわたしひとりだけど文句はいわせないからよろしく」

「やれやれ、選択権はなしか。まあ君達全員をひとりで相手にできるとは思っていないよ、私もね」

どうやらユダはラキ以外を妨害する気はないようだった。最初から誰かひとり足止めできればいいと思っていたのかもしれない。そしてこの余裕の表情は、こちらが複数で手出しができないのを知っていた。仮にも魔王を斃すなら消耗は覚悟しなければならないが、まだ厄介なベールⅡゼファアがいる。なら魔力をすり減らすのは得策ではない。

「……ラキ、また後で会おう」

「ん、りょーかい」

気負うことなくラキが答えると、秀助達はユダの下をくぐり抜けていく。時間はない。ラキに感謝するなら、気持ちに報いるため一刻も速くミラを取り返そう。

残されたラキは自然と笑みを浮かべ、ユダのいる位置まで上昇していく。

「また会おう、だってさ。負けられないねえ、これは」

『どうせ最初から負けるつもりなんてないんでしょに』

「当然。マインドセットは大事だよ」

長剣型箒に座ったまま、ラキは同じ目線になったユダに宣言する。

「いっとくけどわたし、今回はムカついてるんだよ。——だから、殺す気でいくよ」

間髪入れずに、ラキの右手から魔法が放たれた。

＊

目標の空間の穴——その上空にまで秀助達はさしかかっていた。遠くでは海が破裂する爆発音がしている。ラキとユダの戦闘が始まったのだろう。

秀助、権、パールは崖に降り立つ。ゴツゴツとした岩の感触を秀助は靴底越しに感じた。あまり足場がいいとはいえない。

そこで秀助は数メートル先にあるブラックホールの前に立つ人影を認めた。畏怖と怒りを持って名を口にする。

「ベールⅡゼファー……」

「わざわざみんなして足を運ぶなんてご苦労なことね。なにもしなければ、まだ最低でも一時間は長生きできたのに」

遠くで争うラキとユダを見てベールⅡゼファーは微笑する。待っていたといわんばかりだった。

次に秀助はベールⅡゼファアの背後に縛り付けられている少女を見つけた。

「ミラッ！」

闇に拘束されたミラは目を睜り、信じられないものでも見るように驚いていた。

じわりじわりとミラの身体は背後の巨大な闇に飲み込まれようとしている。おそらくタイムリミットを過ぎればミラの全身はあれに吸収され、冥魔王が復活する。

「なんで……なんで、槍馬さん達がここにいるんですか……っ!？」
「助けに来たんだ、ミラを！」

秀助の言葉の意味を一瞬計りかねて、ミラは押し黙った。意味を理解したと同時に、泣きそうなほどの嬉しさと駄目だと拒絶する感情が生まれる。

「そんな、だって私は……」
「人間じゃないっていうんだろう？ そんなの今はどうだっていい。待ってて、すぐそこから助け出す！」

トンファータタイプの箒、ドラゴンブルーム式を両腕で構える。
だがドラゴンブルームの形状が今までと若干違い、秀助の肩まで届いている尻部分に新たなパーツを取り付けてあり、全長をさらに伸ばしていた。秀助が今まで月衣に収めたままにしていた一回使い捨ての箒用オプションパーツである。

ミラは自分のことが秀助に知られていることにも驚き、そして関係ないといい切ったことにも驚愕させられた。それで何もいい出せなくなり言葉を詰まらせる。

が、すぐ叫ぶような声を上げた。

「槍馬さん、避けて——！」

秀助はミラに叫ばれる一瞬前にその接近に気づいていた。

左側面からの爪による攻撃。そちらを向けば今まで姿を見せなかった堕とし子が結晶爪を振り下ろしている。

ドラゴンブルームで爪を防御すると、その鋭さに刃が装甲にわずかだが埋まった。ドラゴンブルームを切り裂くとは、恐るべき切れ味である。

「防がれたか」

確認するかのように堕とし子が呟く。その横っ腹に宙を疾駆する盾型箒が迫った。

ダンッ、と轟音。盾は堕とし子でなくさっきまで対象がいたはずの岩盤を叩き砕いていた。

「お前は俺が相手をしてやる」

片方のアイゼンブルグを射出した沢木権が堕とし子にいい、さらにもう一回打ち出す。盾とはいえ、この質量が身体に当たったと考えるとその威力は堕とし子とて馬鹿にできない。

ジャンプして躲した堕とし子にすかさず手元に戻しておいた盾を打ち出す。避けられたらまた手元に戻していた方で牽制した。

権は油断なく堕とし子を凝視しながら隙を見逃すまいとする。

「秀助、あいつは俺が相手をする。お前はパール様とふたりでベールⅡゼファアをなんとかしろ！」

そういうと片方の盾の先端から剣が飛び出る。アイゼンブルグの裏側——ウェポンマウントラッチにセットしてある武器だ。その筈を権は掴み、堕とし子に向けて横に薙ぎ払う。

「権！」

堕とし子もこれは一対一でなければ危ないと判断したのだろう。秀助達から交戦区域が離れていく。崖から飛び降りて戦場を変え、視界からふたりが消えようとした時、最後にパールが海風を受けながらも命令した。

「権っ、パールちゃんに無断で死んだら承知しないからね！」

それに拳をあげて応え、権と堕とし子は崖を飛び降りた。視界から消え失せた戦火はどんどん遠ざかっていった。音はもう海の細波と大差ない。

さて、とベールⅡゼファアが静かになった断崖にて告げる。

「始めましょうか？ あたしは二対一でも構わないから。だってパールひとりに負ける気はしないもの」

ベールⅡゼファアはパールⅡクールを退けた経験は幾度かある。だから余裕。銀髪の少女は力に裏付けされた自信を持っていた。しかし、それはパールの堪忍袋の尾を無遠慮に触る態度だ。

「……へえ、たいした余裕じゃないベル。身の程ってやつをわきまえた方がいいんじゃないの？」

「怒る辺り、あんたも認めてるんじゃない？ 力の違いってやつをね」

バチンッ、と炸裂音がする。パール足下にあつた岩が盛大に碎けた。

小刻みに身体を震わせたパールが振り返りもせず、秀助にいう。

「秀助、ミラはあんたに任せるわ。……パールちゃんの邪魔だけはするんじゃないわよ！」

返事を返す間も与えずに、パールはツインテールを揺らめかせながら灼熱の魔弾をその手からベールⅡゼファーに放った。

「ちょ——っ」

だが、これには味方である秀助が焦った。ベールⅡゼファーは今、ミラと近い場所にいる。それでは彼女も巻き込まれてしまう。走り出した時には既に魔法は着弾していた。爆風がベールⅡゼファーのいた場所を覆い隠す。

それを突き破り、ベールⅡゼファーは天へと踊り出た。それをパールが追っていく。

爆風が完全に晴れると、それがただの目眩ましで威力はほとんどなかったことが秀助にはわかった。どうやらパールはベールⅡゼファーを遠ざけてくれたらしい。意外な所で氣を利かせてくれていた。

「ミラ、待ってて。すぐそこから助け出すっ」

空を指すように坂となっている崖を秀助は平地と大差なく駆け上る。ミラの捕らわれた場所まではすぐにたどり着けた。

秀助の眼前で、闇に捕らわれたミラが困惑していた。こんな時の適切な対応が思い浮かばないようである。

苦心の末に、ミラが投げかけるのは疑問。

「どうして、みんなだけでこんな危険な所に来ちゃうんですか……？ 死ぬかもしれないですよ」

「なにを今更。ウィザードなんていつも死と隣り合わせだよ」

秀助はミラをここから引きずり出せばいいのだろうと判断して、ドラゴンブルームを一旦月衣に収納し闇色の触腕に手をかける。触腕はぎゅちりとミラの身体に食い込んでいて、自然とそれを外そうとする秀助の手も身体に触れてしまう。

「ひゃっ、どこ触ってるんですか！」

「ご、ごめん、わざとじゃないんだ」

「わざとだったら怒ります！」

こんな緊迫した状況なのにドギマギしながら、秀助は触腕を掴み、龍使いの発達した筋肉により強引に引きちぎる。ちぎる、といってもそれは肉なんて物質ではなかった。少なくとも、抵抗する力はある。それでも引きちぎる時の手応えは紙を破るようであり、血もまったく

この調子ですべての触腕を引き剥がせば——と、次に取り掛かるうとしていた秀助に闇の中から触腕が機関銃のように襲いかかった。

「……っ!？」

注意が逸れていたために、ミラを捕らえる闇の中から現れた無数の触腕への対応が遅れる。とっさに飛び退こうとして、右腕と左足を捕まえられた。続々と現れる触腕に左腕と右足も拘束される。

「槍馬さんっ」

しまった、と舌を打つ。油断した。

これを力強くで外そうとしても触腕が複数あるために強靱さが増している。紙一枚ならともかく、それを十枚二十枚と重ねたら破けないのと同じだ。

だが、焦りはしても慌てはしない。龍使いとは、その身体が武器なのである。手足を拘束されようとも、それは驚異きょうぎを収めない。

両手を手首だけ動かし触腕を掴むと、秀助は体内の龍ロンを放出する。

「《竜炎》ッ」

両手から炎が現れ、触腕を高熱で焼いた。これにはたまらず両腕を捕まえていた触腕は闇の中に引き返す。自由になった両手に炎をまとわせたまま両足に向けると、その触腕も脅えて闇の中に帰っていく。

拘束がなくなり、秀助は《竜炎》で作り出した炎を消し去った。

「これくらいなら問題ないよ」

己の無事をミラにアピールする。封印が解かれていなくても活動できるのは驚きだったが、これくらいならばどうということはない。

「ミラが気に病む必要はないんだよ。ここに來たのだって、君を助きたいからだ。ミラだって、こんなのに取り込まれたくないだろう？」

ミラを捕らえる触腕を一本一本引きちぎる。《竜炎》はミラの身体も傷つけてしまうため使えない。素手で無効化しにくいしかなかった。彼女を捕らえ逃がすまいとする触腕は多く、腕に疲労がたま

る。
ミラは口をぱくぱくとさせていたが、声を出さない。触腕を払っていく秀助を見て逡巡した。

「取り込まれたく、ないです」

「だったら助ける。断られても助けただろうけど、さ！」

ミラの言葉にそれでいい、と思いながらまた一本触腕を取り払う。本心を隠して嘘をつかなければならないようになどもうしてやるものか、という意地があり、本心を明かしてくれたことへの喜びがある。

「……その、えと、やっぱりここはありがとうございます、でいいんですよね」

「お礼はまだいいよ。それにこれは勝手にやってることだし——」

これでは強要しているみたいではないかと頬をゆるめ、秀助はまた新たな触腕に手をかける。

「あつ、槍馬さん——」

切迫した声。天から招来する魔力。巨大な光の塊が秀助へと打ち出されていた。

それが《ディヴァイン・コロナ》という魔法と判断するより早く、秀助は月衣に両手を突っ込み、

——轟音。

11…終わらせない明日に

魔法が放たれる。時にそれは鋼鉄の沸点すら凌駕するほどの火焰であつたし、疾駆する闇色のランスでもあつた。まばゆい光がまるでUFOの軌跡のように直角軌道しながら、相対する者を付け狙う。魔法の応酬。紅い世界を飛び回り、ふたつの影はドッグファイトを繰り広げる。

高層ビルに比肩するほどの高さの水柱があがつた。高熱の魔法が着弾し、小規模な水蒸気爆発が起きる。

砂浜も魔法により薙払われ、波でも消しようのないほどの傷跡が残された。岩場も崩落し、紅い風景と相まって世界の終わりすら予見させる。

それほどまでに破壊は壮絶だ。特大の暴風が好き勝手に暴れまわっている。

しかし、それを起こすのは自然、ましてや戦闘兵器ですらなく――ふたりの女性だった。

一瞬たりとも機動を止めずにふたりは間隙なく魔法攻撃を放つ。瀑布のごとく攻撃を繰り返しながら、圧倒的な破壊が目標を外しあつて周りに被害をもたらず。根元を吹き飛ばされた崖が自分の重量に耐えられなくなり落下。なに、気にすることはない。所詮月匣の中の被害は外に出力されはしないのだ。なにを壊そうと知ったことではない。

ロープを姿勢制御システム的な物として使いながら飛び回り、ユダが火焰を生み出す。それがラキの操る箒のうしろを掠めた。その装甲がわずかな間真つ赤に染まる。近くを擦過された時、熱風に煽られたラキもその熱量の危険性は感じとっていた。

それでも、魔法の威力だけならばラキも負けてはいない。

回避運動を行いながら前面に魔法陣を展開。魔法を増幅する触媒としての力がある長剣型箒により威力をブーストし、質量を持ち対

象を破壊する攻撃力を持った光——《スターライト》を打ち出した。流れ星のような一撃は宿敵ユダに向かい、命中する。派手な爆発をあげるが、ユダは健在だった。しかも軽傷である。並の侵魔なら消し炭になっていただろう。

そして気を休める暇はない。仕留められなかったのなら、敵はすぐに反撃する。ユダも類に漏れず、既に魔法の照準をラキに固定、ロックオンシュート発射。

紅蓮の炎がラキの視界を覆い隠す。こんなにも範囲が広い攻撃、もう今からでは躲せない。

ラキが短く呪文を囁く。するとラキの正面に漆黒の球体が撃ち出された。墨汁を混ぜたシャボン玉のようにも見えたそれは、頼りがいがあると言い難い。

球体に炎が接触する。その頼りない障害物は破壊され、炎はラキの身体を焼き尽くす——そんなことはない。炎はその球体を破壊できず、左右に分散し海面に直撃するしかなかった。

ダークバリア防御魔法。それをとっさに発動することによって、ラキは危険を回避したのだ。

牽制に弱い魔法をばらまくラキに、箒へ挿入されたIrisが指摘する。

『このままではジリ貧です。時間も稼がれている。接近して一気に畳みかけることを推奨します』

「あんまり無茶、いわないでよねえ……！」

文句をいいながら、ラキもそうする他ないとはわかっている。この戦い方は魔力の保有量を競っているようなものだ。そうなれば魔王にウィザードが勝てる見込みはない。ラキとて尋常でない量の魔力を有しているが、魔王を上回るほどではなかった。そうなればラキが息を切らして負けるのは必至である。

遠距離からの魔法攻撃だけでは厳しい。向こうの防御魔法で減衰

させられる。ならば、もっと接近するしかない。少なくともこの破壊一直線の戦いに変化は生まれる。

行くしかない。そう決めれば実行するのみ。

「《サンライトバースター》！」

まずは目眩ましの魔法を放つ。無数の光弾が別々の軌道を取りながらユダに殺到する。それに遅れラキは穂先——長剣型箒の先端、剣先をユダに向けて飛び出した。

光弾を避けきれずにユダへ命中、そこへスピードが乗った箒による刺突を繰り返した。端から見ればただの突進だが、その威力は凄まじいものである。

岩すら粉々に砕くだろう一撃をユダは防御魔法を展開して間一髪受け止める。しかしこれを防ぐためにユダはあえて《サンライトバースター》をなにもせず喰らっており、負傷していた。

後方からエメラルドの放射光を撒き散らし前進しようとする箒と、通すまいとする防御魔法が拮抗する。

そんな中で、ラキは上半身をたおした前傾姿勢の状態でユダを見た。

「いっつも、いっつも、人の前に現れて余計な迷惑をかけてくる……っ、貴女の目的はなんなのよ？　今回わたしの前にいるのだって偶然じゃないでしょう！」

「そう、偶然ではない。必然だよ。君がここにいるのはね。私がここに来たことが必然なのではなく、君がここにるのが必然なのだよ」

「……なによ、それ？」

意味が分からないとラキは眉をひそめる。対してユダは負傷していながら、笑みを見せた。

「たとえどんなことになるろうと、君はここに來ていた。來なければならなかった。それが君の存在理由だからさ！」

「訳の分かんないことをまくしたてないでよっ」

ギリギリギリギリと劍先と防禦壁が奇声をあげて押し合う。どちらが競り勝つかはわからない。不吉な不協和音が鳴り響く。

『ラキ、このまま押し切ってください。戦闘開始から十分以上が経過しています』

「わかってる！」

残り時間四十分程度。まだ半刻もある。それならまだ余裕はあった。慌てず、だがこの一撃でユダを早急に撃破する。

喉元に刃を突きつけながらも、それでさえユダに焦りはない。ただ、面白いジョークを聴いたように微笑を洩らした。

「もうすぐ君は死ぬ。ラキという君は死ぬ。これは決定だ。覆せない。それを覚えておくといい」

「わたしは、貴女に殺されはしないわよ——っ」

刺突で駄目なら、とラキは掌を天空に突き出し魔法陣を展開した。

——それ以外の力も加えればいい。

魔力が膨れ上がり、強大な魔法を形成する。

「星屑招来——《スターフォールダウン》！」

それは《冥》の属性最大威力を誇る驚異の魔装。月匣の空に巨大な魔法陣が描き出され、こことは違う空間に接続し、それを召還する。

魔法陣から顔を出したのは直径何メートルもあるかわからない星屑の群だった。落下する隕石はその周囲を完膚なきまでに破壊し尽くすものである。

天空を埋める幾千の星星^{ほしほし}を見上げ、ユダは感嘆する。

「ほう、この状況で《スターフォールダウン》か……。君も巻き込まれるぞ」

ユダの問いに、ラキは鼻を鳴らし躊躇なく宣言した。

「それで貴女を潰せるなら、安いモンなのよねっ！」

元より、魔王に単独でトドメを刺そうと思うならばこれくらいの無茶は承知の上だ。問題ない。

そしてラキは星屑に命令を下す。

「落ちろ！」

今までで一番の嵐が吹き荒れた。地上に解き放たれた隕石達が雨霰と地上を襲う。

海を割って海底を外気に曝した。底を抉り、海の深度を深めていく。荒れ狂った海水は次々と襲いかかる星によって、空中に止まり続ける。砂浜の原型をなくすほどに叩き割り、岩場は最初からなかったように消し去られ、消滅。

それは地形を変えるほどの圧倒的という言葉すら生温い所業だった。神々の怒りとはこのようなものなのだろう。

そのような破壊は、無論ラキとユダも例外なく捉えていた。

総ての隕石が吐き出され終えて、魔法陣が消え去る。

海水が地上に戻され、巨大な津波を起こす。周辺の地上面積が減り、塩水に領土を侵略されていた。

『……ラキ、生きてますか？』

神々の鉄槌を受けた世界に声がした。そしてそれに応える者もいる。

「なんとか、ねえ……」

ラキだった。

その身体は衣服ともどもボロボロだったが、五体満足で生存している。Irisを搭載した箒でなんとか浮遊を続けていた。

《スターフォールダウン》を発動し、隕石が自分に直撃する寸前にラキは防御魔法を作り出して嵐を凌いだのである。もつとも、それを維持するのに魔力をかなり使ってしまったうえにダメージも完全に防ぎきることはできなかったが。

「ユダは？」

『斃しました。消失を確認しています』

それでやっと一安心した。あれでユダを斃せなかったら間違いくこちらがやられていた。そうならないためにラキは隕石の接触直前までユダに刺突攻撃をやめず、相手の防御魔法を《スターフォールダウン》から逸らしていたのだ。

「……じゃあ、今度は秀助達の所に加勢に行かないとね」

『その身体ですか？』

「援護くらいならできるわよ、なんとかね」

何故だか、ラキは胸騒ぎを感じていた。速くミラと秀助達の所に行かなければと――。

＊

防ぎきれなかった墮とし子の結晶爪の斬撃を地面に転がって躲すと、真後ろにあった樹木が豆腐のように両断された。

凄まじい切れ味だな、と沢木権は冷や汗を流しながらも反撃に転ずる。身体を投げ出した反動で一回転して起き上がると、手元まで戻ってきていた剣付アイゼンブルグを振るった。これを墮とし子は避けて自然と距離が開いた。両者は間合いを計りながら膠着状態に入る。

時間が消費されていく。だが、これでいい。早く墮とし子を斃して秀助達の方へ駆けつけるのが無論一番いいが、こうやって墮とし子を引きつけているだけでも意味がある。

「オマエの目的は時間稼ぎだな」

「さあ？ ご自由に推察してくれよ」

わざわざ肯定してやる義理もない。これで思考して隙でも見せてくれればいいが、そう簡単な相手でもないだろう。

海岸近くの雑木林前で対峙していると、冥魔の闇に汚れた墮とし子が権に向かって問いを投げた。

「オマエは、あの魔王の落とし子だな。何故オマエは、あの魔王に頭こうべを垂れるのだ？」

おかしいことを訊いてきて警戒心を強める。何を考えているのか、その言葉の裏を探ってみる。会話でこちらの隙を作ろうとでもいうのだろうか。

権は今回、いつにも増して相手の動きに注視している。何故なら、権には相手を斃すための攻撃手段がたったひとつしかないからだ。

権は本来なら味方を敵の攻撃から守るディフェンダーであり、自ら進んで戦うことはない。アイゼンブルグに隠していた剣も万が一の保険である。これも積極的に使った経験はなく、故に敵を斃すつもりなら僅かな隙を的確に、文字通り突くしかない。

「……パールⅡクールが俺の主だからだ。お前だって冥魔王に従っているだろ」

「違う。従っているのではない。従わざるを得ないだけだ。オマエもそうではないのか？」

「俺には意志がある。唯々諾々と従っているだけなら、それはマリオネットと変わらない」

パールの命令に逆らえる気はしないが、今まで本気で抵抗したくなるようなことを申しつけられた経験はないし、もし殺されるとしてもやるとは思えない。逆らったことこそ今までないが、少なくとも権は自分の意志で命令を遂行している。そもそも一度拾った命だ、今更失うことに恐怖は覚えない。

墮とし子の白濁とした瞳に怒りと哀しみの感情が現れ、すぐに消える。

「……そうか。オマエとは相互理解が得られる立場だと思ったが、どうやらオレとは似て非なるものらしい」

「こっちは端から理解しあえるなどとは思ってないぞ」

墮とし子の腰が沈み、弾丸のように疾走する。疾い。先程の会話の余韻を一切感じさせない冷酷さで結晶爪による突きがくる。

権はアイゼンブルグにてそれを受け止める。鉄壁の箒は難攻不落の防壁となって致死的攻撃のことごとくから権を守り抜く。

ウェポンマウントラッチで剣を固定し先端から刀身を覗かせるもうひとつのアイゼンブルグにより攻撃、しかし間一髪で躲され続け

る――。

その攻防が幾重にも繰り返される。堕とし子はアイゼンブルグのひとつによる自在防御を突破できず、権の不慣れな攻撃では致命傷を与えることが困難だった。

「オレは、」

盾と結晶爪で打ち合いながら、堕とし子が地獄の底から湧き上がる唸り声を発した。

「オレは死んだ所を冥魔王に取り込まれ蘇生された。だれも望んでなどいないのに。……そして拒否などさせず無理矢理使役された。何故ならオレは冥魔王の身体の一部になってしまっているからだ。脳の命令に指は従うことを拒否できない！」

攻撃に感情が乗った。黒鐵のアイゼンブルグを揺るがし、傷をつける。

「オレは堕とし子となり良心や何もかもを奪い盗られた。なら、オマエが奪われたものはなんだ！」

奪われたもの――。権の身体が強張る。敢えてあげるなら、記憶か。

パールに落とし子とされた時、権は記憶を失った。総てでなくとも、思い出をいくつも喪失した。それをすぐに総てこぼれ落とさず思い出したい、そう渴望するだろう感情すらない。これは、奪われたものなのか。魔王によって篡奪されてしまった沢木権の構成材料なのか。

そうなのだろう。パールによって権は大切なものを失ったのだろう。許すことなど出来ないことだ。魔王は打算と利己的感情により

構成される。そして長命により発生する暇を浪費したいという娯楽への欲求。それを埋めるためならば他者を貶めることすら厭わない。ならば、強奪されたことに対する憤怒をパールにぶつけるべきなのか。

ハッ、と権は失笑を洩らした。考えて、堕とし子の言葉に笑いを堪えることができなかった。

「知るかよ、そんなことは——！」

繰り出した刺突が落とし子の鱗に覆われた左肩に接触し、表面の結晶による鱗を砕いた。権が発言を一蹴したことに動揺でもしたのか。

そうだ、知ったことではない。沢木権は今、自分の意志でここにいることは結局の所変わらない。堕とし子が命令されて戦っているのとは違う。権はこの作戦に手を貸したいから戦っているのだ。

記憶が奪われた？ 確かに、それは事実だ。大切な事実だ。しかし、それだけで権はパールに反抗したくなどならなかった。もしかすると、そう従順になるように感情をいじられているのかもしれない。自分に意志があると思ひ込む権を裏で嘲笑しているかもしれない。だが、それはやはり可能性の話にすぎない。

大事なのは、今なにをしているかである。権はまた戦友である秀助と共闘できている。親友と再会できたし、これまで見たこともない生活が出来た。パールに生き返らせてもらえなければ、この生活がなかったことは確実だろう。それに感謝している。だから、今更パールに抗おうなどとは恩知らず過ぎて思えない。

「俺はお前とは違って魔王の落とし子人生をそれなりに楽しんでるんだよ。それを知った風に否定されたくはないなッ」

「オマエに、冥界の闇に侵され絶望を知った気持ちがわかるものか！」

「だったらお前も落とし子の楽しみを知ったように叩くんじゃねえよ！」

凶刃と守護の盾が金属音を立ててぶつかり合う。いや、それは金属のぶつかり合いではなく意地と主張のぶつかり合い。

冥魔の堕とし子、それは魔王の落とし子とは別物であろうと権は思う。きっとパールではなく冥魔に使役されていれば権も目の前の堕とし子のようになっていただろう。だが、それでも、総ての責任を冥魔王に丸投げにして命令に従うことをしようがないからと割り切るような奴に負けたいとは、パールの落とし子である沢木権は思えない。

「これ以上長引かせるのは止めだ。これで、終わりニシテヤルルル——ッ」

顔の右半分覆う鱗により顔が引きつり、堕とし子の言葉が不気味に歪んだ。

肥大化した左腕を堕とし子が大きく振りかぶる。それは同時に多大な隙を見せたが、権はそこに付けいることはできない。今攻撃したところで、この堕とし子は動きを止めることはないと本能的に察知した。

堕とし子が轟腕を権に向けてはじき出した。五指の爪が地面を抉りながら、すくい上げるような一撃を繰り出す。

一对の盾、アイゼンブルグを前面に交差させて配置。万全の体勢でディフェンダーの真骨頂である防御を行う。

だが、無駄。

特大の力を内包させられた轟腕はアイゼンブルグをもろともせず、それごと権を殴りとばした。

「ガア……ッ!？」

アイゼンブルグごと権は上空に打ち上げられる。とんでもない衝撃。ウィザードになってから権はこれほどの一撃を受けた経験は数えるほどしかない。

スローモーションの視界に砕けたアイゼンブルグが見える。交差させた時上になっていた方だ。今まで鉄壁を誇っていたそれはひしやげ、無惨に内蔵部品を撒き散らしている。

それでもまだ権の手元にはフレームを歪ませはしていても原型を保ったままいるもうひとつのアイゼンブルグがあった。それは剣を装備させたものであり、同時に攻撃の切り札を載せた筈。

——ああ、まだいける。勝ってみせるさ。

空に浮く権に影がかかった。紅い月を背にして、堕とし子がトドメとばかりに轟腕を振り下ろそうとしていた。魔力が轟腕に収束し、先程の比ではない攻撃が繰り出されるであろうことが容易に判断できた。

権は手元のアイゼンブルグの裏側に付けられた持ち手を握り締める。

チャンスは一度きり。それは堕とし子の攻撃が権に命中するその瞬間。絶対に権が攻撃を回避できない状況になった時、これを確実に堕とし子にぶち込む——。

「打ち抜かれろッ」

堕とし子の結晶爪が迫る。カウントダウン開始。

三。焦る気持ちを抑える。

二。逸る気持ちを抑える。

一。解き放つ準備をする。

「——ビームブレードユニット、起動」

刹那、アイゼンブルグ先端の刀身が眩い光に覆われた。権の切り札^{カイ}、一撃の威力を増強させる最大出力のビームの輝き。

墮とし子が気づいた。遅い。もう遅すぎる――。

ズブツ、と結晶爪が権の身体を貫く。同時に、幅二メートルを越えるビームを纏った刀身が墮とし子の身体を両断していた。

権は落下していくなかで、驚愕に目を瞠って絶命し消え去っていく墮とし子の死体を見た。

――あの世には、冥魔がいらないといいよな。

なんてことを権は思い、身体は腐葉土に墜落した。

柔らかい土だからなのか、あまり痛みはない。もしくはもう痛みを感じる余裕すらないのか。

また死ぬのか、とぼんやりと考える。だが、前に死を経験した時に感じた死神の歩みを察知できない。あの時は生命を刈り取るモノの気配のような得体の知れないものを身近に察したのに、今はそうではない。

凜々（リンリン）と可愛いらしい音色が鳴った。血に塗れた手で懷を探ると、銀色の鈴がある。この間パールに渡された代物だ。それには彼女の魔力が込められており、力が権に流れている。

そういえば、と権は記憶を掘り起こす。ビームブレードユニットの出力はあんなにも高かっただろうか、と。

そこで権は笑みを浮かべた。気付かぬうちにこの鈴のバックアップを借りて攻撃の威力が底上げされていたのだ。そのお陰で墮とし子の結晶爪が深く身体に侵入する前に相手を斃せた。これがなければ、相討ちだっただろう。

血の滴る手の甲をおでこの上に落として、嬉しそうに権はつぶやいた。

「……ありがとな、ご主人様」

そうして、微笑みながら権は目を閉じた。

＊

《ディヴァイン・コロナ》の直撃による強大な爆発。巻き起こる爆風の中から、ひとつの影が衝撃により飛び出した。

「——ッ」

槍馬秀助。

月衣からドラゴンブルーム式式を取り出し、それを交差させて間一髪魔法の直撃を受け止めていた。接触の時後方に飛んだため、負傷は最低限に抑えられている。少なくとも、今度は一発で行動不能に追い込まれてはいない。

五体満足——それを確認するより秀助は自分のすぐ近くにいた少女の身を案じた。

「ミラ!？」

「けほけほっ。だ、大丈夫です!」

爆風により巻き上げられた粉塵が晴れると塵を吸い込んだのか、むせながらもミラが無事を主張した。

《ディヴァイン・コロナ》により破壊されたのは先程まで秀助がいた崖一帯だった。ミラのいる穴は周りに足場もなく、ぽつりと宙に浮いている。

この魔法をわざわざ秀助の方へ撃ってくるモノなど、考えるまでもなかった。

「あら、避けたの。進歩してるみたいじゃない」

輝明学園の女子制服の上にポンチョを羽織った魔王が浮遊しながら

ら先程まで秀助のいた方角に掌を向けていた。大魔王ベールⅡゼフ
ァー、彼女がパールとの戦闘中にわずかな間をぬって撃ったのだ。
《天》属性屈指の魔法を。

「ベル、あんたの相手はこのパールちゃんでしょうが、余所見する
んじゃないわよ！ ミラって娘にも当たったら冥魔王とかいうのだ
って復活させられないんじゃないの？」

「心配しなくとも威力は絞ってあるから平気よ、パール。あんたが
考えるようなことは全部想定済みだから」

「こ、こんの——ッ！」

恥辱を受け、怒り心頭とパールがベルに魔法を打ち込んだ。これ
もやはり並の威力ではなかった。ひとつひとつがウィザードにとっ
ては必殺となる攻撃の乱舞に戦々恐々としながら、秀助は箒を両手
に持ったまま月衣による飛行でミラの元に再度接近していく。

ミラの身体はさっき見た時よりも闇の中に埋まっている。残り時
間が減っているのだ。まだまだ余裕はあるはずだが、嫌な予感がす
る。

半分以上闇に取り込まれたミラに危機感を煽られながら、秀助は
今の内に触腕排除に取り掛かろうとミラまで後少しと迫りながらも、
舌打ち。ミラを捕らえる闇に波紋が広がっていた。

また触腕が来るか、と秀助は警戒するが違った。触腕ではなく、
表界にて邂逅したアレがゆっくりと染み出した。

そう、名前はダークドールだったか。

悪魔の肖像の影を立体化したような冥魔は一对の翅を広げて闇か
ら生み出されると飛行する。数は片手の指を全消費する五体。それ
らがミラへの接近を妨害するため秀助を包囲するように現れた。

「触腕で駄目なら冥魔で足止めか、くそっ」

それほど強い冥魔でないとはいえ、一对多の現状は芳しくない。
ダークドールがこちらに狙いを定めるとそれぞれ頭上、眼下、右
方、左方、眼前から秀助に牙をむく。

ダークドールの攻撃にはプラーナイターがある。かすり傷でも
否応なく生命力をかすめ取る攻撃。一発当たれば反応が遅れて総て
の攻撃がヒットする可能性もある。

危険。どれも当たりたくはない。しかも厄介なことに影であるダ
ークドールには物理攻撃が通用しない。

だというのにダークドールの挙動は前回よりも一段と疾くなって
いた。冥魔王により強化されている。

「K i i i l l ! ! !」

距離が直線であり最短の前方にいるダークドールが真っ先に秀助
へと肉薄する。錐と同じく鋭く尖った五指を矢の如き速さで突き出
す。

だが、この距離はダークドールだけでなく秀助の間合いでもある。
身体を逸らして紙一重でこの突きを回避、そして《竜炎》でドラ
ゴンブルーム式に火焰を纏わせ殴りつける。

正面のダークドールは炎に焼かれ、海へと自由落下していった。
それと入れ違いに眼下のダークドールが襲いかかる。さらに左右と
頭上のダークドールも同時に秀助へ接近していた。

避けられない。そう判断し、ならばと秀助は歯を食いしばる。

「《剛竜》ッ」

龍使いは《竜鱗》と呼ばれる鱗状の龍を常時身体に纏わせること
ができる。それは龍使いの肉体を銃弾すら通さない屈強なものに変
えるのだ。《剛竜》は一時的に全身に龍を駆け巡らせることにより
肉体強度をさらに跳ね上げる技法だった。身体の硬度が常識では考

えられない高みに到達する。

総てのダークドールの攻撃が秀助に命中した。だが、貫けない。肉体ひとつで魔を狩ることのできる龍使いの身体に傷を付けることは、できなかった。

そして秀助からプラーナも奪えず、周囲に密集したダークドールはまさしく獲物。

ドラゴンブルーム式が疾風を作り出す。否、秀助の龍で生み出された風がドラゴンブルーム式を中心に竜巻のような旋風を撒き散らしている。龍使いの技法《墜竜》。

秀助は手の中でトンファー型箒を器用に扱い、空中で身体を独楽のように捻りながら――振るった。

一閃。

《墜竜》の効果で風の力を入れたドラゴンブルーム式を使い、秀助は一对多を想定した龍使いのテクニク《一閃》で上下左右のダークドール総てを一瞬で吹き飛ばした。

手応えはあった。それでも、全員を一撃で仕留めるには惜しくも至らない。

ダークドールの一体は消失したものの、他三体は手負いながらも健在。ギリギリで急所を外され致命傷にならなかった。思わず舌を打つ。今ので斃し切れなければ無傷での勝利はもはや不可能だ。《剛竜》もそんなにホイホイと使っていては龍の酷使で身体が保たない。

こうなれば負傷覚悟で短期決戦を挑むか？ と今度は秀助から殴りかかろうとすれば、ダークドールが踵を返して飛翔する。どこへ行くのかと思えば、その先にはミラを捕らえる空間の穴がある。

三体のダークドールの身体が変異し、布、あるいは紐のように広がった。そして、ミラに飛びかかった。

「んう!？」

ミラをほとんど黒色に隠して拘束すると、ダークドールは本体である闇と融合を始めた。遠目でもミラが急速に取り込まれていくのがわかる。

「な……ッ、ミラ！」

秀助が飛び出し、闇の穴へと全速力で向かう。だが闇の浸食するスピードは今までとは比べ物にならないほど迅速で残酷だった。

ミラが辛うじて外界に露出する右目で秀助を見て、手を伸ばした。

「槍馬さ——」

秀助も手を伸ばし掴もうとして、

その手は虚しく空をきった。

さっきまであったはずのミラの身体は、もうどこにも見当たらなかった。

——どこからか、獣の咀嚼音がする気がした。

12…夜闇の世界で守る者—Night Wizard Knight—

空間が割れた。裂けた。活断された。

空間の穴がこじ開けられ、広がる。闇が蠢き、波打ち、呼吸した。咆吼する。爆弾が爆発したのではないかと思うほどの轟音が質量を伴い空気を震撼させた。

今まで不定形だった闇が徐々に自らを形作るため中央に収縮し、粘土をこね回すかのようにしてその姿を浮き彫りにしていく。

焦げ茶色の毛並みを持った鷲頭、身体の節々を黒光りする甲冑で覆ったあべこべな姿。下半身は長年封印されてしまっていたからなのか、形作れず闇の泥をスカート状に広げていた。

さらに、巨大だ。五、六メートルはある。この禍々しい存在は、これでもまだ弱い状態なのだろう。過去に封印されなければならぬほどの力を、確かにこれは手にしていた。

“冥魔王” 悪食のけもの”。その復活を秀助は間近で呆然と見上げていた。

浮遊する冥魔王が秀助を目視し、無造作に籠手を付けた獣の腕で薙ぎ払う。秀助はそれを躲す気すら起きなかった。

誰かが秀助の脇腹に手を回して、引き寄せる。何メートルもある冥魔王の腕が振るわれ、その風圧で海上が割れた。恐るべき力。

秀助が霧のかかった頭で振り返ると、長剣型箒で滑翔するラキがいた。

「なにやってるの、秀助！ 危ないじゃないっ」

「ミラが……喰われた」

謔言をばやくように口にした言葉が秀助にも信じられなかった。ミラはもういない。目の前で消え去ってしまった。助けられなかったのだ。リスクがあったのを理解して、それでも取り返すと誓っ

たにも関わらず。

絶望が両肩に重くのしかかり、喪失感が胸に開いた。風さえ吹き抜けるように、心にぽっかりと穴が開いているようだった。

「そんな、まだ時間はあったはずでしょ！」

『リオンⅡグンタの予告時間が間違っていたのか、それともイレギュラーが起きたのか。そのどちらかしかないでしょう』

ラキとIrisの声も耳に入らず、食い入った様子で秀助は冥魔王の巨体を見ていた。凄まじいまでの虚無感に支配されて、あの悪魔に復讐してやろうという気持ちすら浮かばなかった。

「冥魔王の封印が解けた……。ふふっ、このゲームもあたしの勝ちね、パール？」

ベールⅡゼファアが哄笑して敗者達と冥魔王を傲岸不遜に見下ろした。勝者となったことによる愉悦が表情にはっきりと浮かんでいた。

ベールⅡゼファアの計画を成就させてしまったのが腹立たしいのか、パールが掌を冥魔王に向けて魔法を紡ぎ出す。

「こうなったら、冥魔王だけでも吹き飛ばしちゃえば——」

冥魔王が復活してしまっただけではミラを助け出しベールⅡゼファアの計画を潰す、という本来の目的は達成できずパールが負けた事実はなくならないのだが、それでも勝手に神社の下宿人を消し去った冥魔王はとても気に入らなかった。数千年の眠りから蘇った冥魔王はその瞬間に最凶の魔王の逆鱗に触れてしまっていた。

「深紅の空に更なる鮮血を描き出せ、悠久の真紅！　《エターナル・

ブレイズ・ザ・デストラクション』！」

冥魔王を中心として直径二百メートル以上はある魔法陣が頭上に展開される。そこからは人間からして見れば途方もない量の魔力が流れ出していた。それはラキがユダに放った《スターフォールダウン》よりも恐ろしい破壊を引き起こすもの。

「ちょっと、これはヤバイでしょう——」

ラキが秀助を落とさないよう腕に力を込めて、冥魔王の近くから全力で退避する。余波に巻き込まれる可能性もある、もっと遠くに行かねば安心などできない。

「焼けて爛れて、爆ぜて消えなさい！」

パールが指をはじき、その焼滅魔法は発動された。

圧倒的な魔力の解放。月匣の中が閃光で真っ白に染まり、人間なら自覚させることもなく一瞬にして灰も残さず消し去る火焰が吹き荒れた。

——だが。

その魔法が発動する一拍前、鷲頭にある双眸をぎょろりと開き冥魔王が吼えた。複数の大砲が発射されたような野太い叫び。そうして冥魔王の能力がついに発動された。

プラーナ吸収能力。

紅い月の昇る世界のプラーナを我が物顔に喰らう。海水が涸れ、岩場は分解され、存在するためのエネルギーであるプラーナを湯水のように飲み干す。

プラーナを奪う対象はそれだけではない。人間と魔王——そして魔力の塊である魔法すら例外ではなかった。

まさに月匣内を焼き尽くそうとしていた《エターナル・ブレイズ・

ザ・デストラクション》、それを分解しプラーナとして冥魔王はいつも簡単に胃袋へ納めてしまった。

発揮されるはずだった破壊はその予定自体を壊され、用をなさぬ魔法陣は霧消した。

一気に大量のプラーナを平らげられたからか冥魔王は歓喜して、さらにプラーナ吸収のスピードを上げていく。いや、力を増やして吸収能力の出力が増したのか。冥魔王は芋づる式に強化されていた。

「そんなっ、アレを消すなんて嘘で……くう！」

パールが身体を抱いて呻いた。その顔にはどんな時も充分すぎるほど漲っていた覇気がなかった。憔悴している。こめかみに脂汗が流れた。狭界においてプラーナの豊富なはずの魔王すら苦しむほど冥魔王は暴食なのである。

パールだけでなくベールⅡゼファーも勝ち誇った表情を捨て去り、身をよじっていた。

「このっ、恩知らずなゲテモノ喰らい……あたしからもプラーナを奪おうってわけ？ 復活しても見境がないのね！」

罵倒する魔王を嘲笑うように冥魔王は喉を震わせ、次に紅い月を見上げた。

——これのせいで狭い空間からしかプラーナを奪えない。そう目覚めばかりの胡乱な頭で判断して、冥魔王は空に向けて口腔を開く。魔法陣を描きだし、

「G u u u u U U U U U ! !」

魔力の奔流を発射した。

まさしく竜の吐息ドラゴンブレスとしか形容できないそれはベールⅡゼファーの

月匣を硝子細工のような容易さで砕いた。

紅い月が消滅し、月匣が壊れた。紅色の世界は通常世界に復帰する。そこは本来のラビリンスティ内の嘆きの海と呼ばれる場所だった。

真夜中でありながら豊潤なプラーナに満たされた色鮮やかな世界、まだ一片のプラーナも喰らっていない真新しい世界に冥魔王は容赦なく牙をたてた。海水をまるで美酒のように嚥下し、雲を綿菓子に見立て咀嚼する。

冥魔王の身体が十メートルを超える巨体にまで成長した。世界を滅ぼす化身に相応しいまでの邪悪にして醜悪なおぞましい化け物。^{フリークス}

魔王すら餌食とする毒牙は離脱したとはいえ秀助とラキにも等しく噛みつき、プラーナが吸収されたせいで空中にとどまることが出来ずにふたりは砂浜に落下していた。

波は来ない。海水が信じられないほど減っている。やけに砂浜が広がった。が、いずれこの砂浜すらなくなるのだろう。

「……っ、あ、あ、くう、ひい……!？」

ラキが首を絞められたような奇声を洩らして砂浜にうずくまる。さすがに燃え尽き意気消沈していた秀助もラキの異常に気づいた。

「ラキ？」

プラーナが奪われ身体が動かし難くなりながらも、四つん這いになって秀助はラキに近寄った。それだけの動作をするだけでフル馬拉ソンを完走したほどの体力を消耗する。

ラキは目を零さんばかりに見開いて両肩を抱きながら砂浜に横たわっていた。爪を血がにじむほど肩に食い込ませているのにその苦痛を無視せざるを得ないほどの何かがラキを苛んでいた。プラーナ吸収の為ではない。確かに秀助も気をしっかり保たないと気絶しそ

うだったが、ここまで苦しんではない。

「しっかりしてくれ、ラキ！」

『槍馬様、』

ラキの背中をさすりながら呼びかける秀助の名を砂浜に転がる長剣型箒からIrisが呼んだ。

『大変なのは承知していますが、ワタシをラキの元に引っ張ってもらえますか？ そうすれば彼女の症状は止まります』

「……？ わかつ、た」

息を切らしながら少し離れた所に投げ出されていた箒を掴むと引きずりながらラキの方へと持っていく。まるで車を牽引しているような負担が腕にかかった。

なんとか箒を運び終えると、Irisが謝辞を述べる。

『ありがとうございます。最後に、彼女の手をこの箒へ導いてください』

いわれるままに何とか肩に食い込んでいるラキの手のひとつを引き剥がして箒を握らせる。

「これで、いい？」

『はい。これでラキは回復すると共に、アナタはミラ様と再びお会いすることができます』

「——え？」

意味がわからなかったし、その言葉の意味を吟味する時間もなかった。ラキが身体を仰け反らせ、絹を裂くような悲鳴をあげた。

「きィ、ああああああああああああああああA A A A A
A A A A ! !」

鼓膜が破れるかと思うほどの大音声。叫びを止めて沈黙するラキを秀助は驚きながら見守っていた。

すると彼女は両手を砂浜についてむくりと上半身を起こした。頭髮や衣服に付着した砂がばらばらと落ちる。

『お目覚めですか、ラキ？ いや、それとも別の名前で呼びますか？』

「今はラキでいい。そっちのが秀助も分かり易いだろうし」

『では今しばらくはラキ、と。それにしても随分気持ちよくお休みでしたね』

「皮肉らないでよ。わたしだってプラーナを吸収されるまで気づかないとは思わなかったんだから」

砂を手で払い落として、ラキは理解できない会話にぽかんとしている秀助を見て微笑んだ。

「ごめんね。混乱してるでしょ？」

「えーと……君はラキだよね？」

なにをいっているのだろう、と秀助は自分で正気を疑ってしまうものの、見逃しきれない違和感がある。

姿形はラキのままだし、一人称や口調にも変化はない。なのに秀助は目の前の女性とは初対面のように思えた。喻えるなら着ている着ぐるみは同じだけど中の人は別人、か。

「んー、まあラキって呼んでもらって構わないけど、正確にはもう

ラキであつたもの、かな」

「どういう、こと？」

「それを説明するには……少し突拍子のない話になるけどいいかな？」

秀助は無言で頷き、ラキの説明を訊くことにした。

一拍間を置いて、ラキは話を始めた。

「冥魔王を封印したのがウィザードと魔王キースⅡラグランジュである、とはリオンⅡグンタがいつてたよね？ その時の戦いで魔王は致命的な傷を負ってしまった。傷を癒やすには長い間眠りにつかなければならない。けど、冥魔王の封印が解かれる心配があつた。だから、魔王は人間に転生することを決めたの。ウィザードとして人間に生まれ変わり、冥魔王が蘇った時に魔王だった記憶が復活するよう細工をしてね」

『そしてワタシはその補助、及び安全装置ですね。ラキと共に転生し、ワタシが隠れ蓑とするに相応しい器——今回は”Iris”という人工知能の皮をかぶったのです。冥魔王復活の予兆が見られたらラキの記憶を刺激する発言をし、不確かな時などは思い出すのを阻害するシステムとしてキースⅡラグランジュに制作されました』

とんとん、とラキは自分のこめかみを人差し指で叩き、Irisも自分のことを説明した。前々からこのIrisはおかしなAIだと思っていたが、人間の手ではなく魔王に作られたものであつたらしい。でも秀助は驚きながらも納得してしまう。それなら饒舌さにも得心いった。

「……つまり、今の君はラキじゃなくて魔王キースⅡラグランジュってことなの？」

「ちよっと違うかな。ラキであつた頃の記憶も身体もそのままだし

……。どちらかといえば、キースⅡラグランジュの記憶を手にしたラキ、かな」

「うーん？ 頭が混乱してきた……」

「あははっ、難しく考えることはないよ。わたしがラキであったことには変わらないわけだし」

頭を抱える秀助にラキが苦笑した。物わかりの悪い弟に指導する姉のようだった。

「それにわたしが秀助に伝えたいのは、このことじゃないの。重要なのは、ミラもわたしの一部であるということなの」

「え？」

「あの封印を施したのはキースⅡラグランジュ、当時のわたしなの。その封印にはわたしの力の大部分を割いて作った。だから今回人間を模倣して作られたミラはわたしの別の人格といえるのよ」

それがいったいなにを指すのか、愚鈍になっていた秀助の頭では処理しきれなかった。

突然、秀助はラキに抱きしめられた。暖かく、柔らかい身体に包み込まれる。何故か、数時間前までは自分の側にいた少女の香りがあった。

「ミラが消えてしまった時、あの娘の記憶と感情がキースⅡラグランジュの記憶と一緒にわたしの中に溢れてきた。もう、あの娘は口に来ないから、わたしが変わりに伝えるね」

殊更に強調したわけでもなかったし、力強くいわれたのでもなかった。耳元で囁かれただけだ。なのに”彼女”の台詞は深く秀助の中に浸透した。

「ありがとう」

たった一言。飾り立てられてもいないし、美しい言葉だけで構成されているわけでもない。

だけど、それが彼女の総てで、秀助にはそれで充分だった。

「……………っあ」

視界が魚眼レンズを通したように歪んでいた。そうして秀助は自分が泣いていることに気づいた。悲しいのか嬉しいのかそれとも悔しいからなのかはわからない。でも涙がとまらなかった。とめたいとも思わなかった。

嗚咽する。無様にラキに縋って泣いた。とてもみっともなかったが知ったことではなかった。ラキはなにもいわずに秀助が泣き止むのを待っていてくれた。

l r i s が溜息に似た音声を発してひとりつぶやく。

『わたしは、自己陶醉もほどほどにしろといってたんですがね』

ミラを褒めることは間接的にラキ自身を褒めることになる。そうやってl r i s は試しに早期覚醒を煽っていたのだけど、今更いたところで意味はないだろう。

どれくらい泣いていたのか秀助にはわからない。涙を拭った時には砂浜がほとんど冥魔王の餌食となっていた。

「……………あんたら、この非常時になに抱き合ってるのよ？」

頭上から呆れと怒りの混じった声がして、秀助は慌ててラキから飛び退いた。にやにやとからかうような笑みを浮かべていたラキから視線を移すと、上空からジト目でパールがふたりを見下ろしてい

る。

「い、いや、これは別にふざけてたわけじゃないんですよ？」

「そうそう、愛の営みですよ」

「違うだろう！？ あんまりややこしいことはいわない！」

顔を赤くしていると、パールが怪訝そうに眉をひそめ秀助とラキを見た。

「にしても、アンタら……」

「——どうしてまだピンピンしてるのかしら？」

パールの言葉を忌々しい敵の声が取って代わった。パールの頭上にはベールⅡゼファアーがおり、その場の全員を眼下に収めていた。

すぐさま秀助は砂浜だった場所に放られていたドラゴンブルーム式式を手にとって警戒するが、ベールⅡゼファアーはその機敏な一挙手一投足に怪訝を強める。

「アンタ、何者？　なんでウィザード程度が今でもここに存在できるの？」

「——？　なにをいって、」

そこで秀助も己の異変に目があった。なんで自分はこんなにも動けるんだ、と。

ここはさっきまで冥魔王のプラーナの捕食圏内だったはずだし、今も変わらない。何故なら、ベールⅡゼファアーとパールがじわりと汗をかいている。プラーナ吸収を受けているからだろう。その膨大な魔力量があるからこそ、彼女たちはまだここで行動できている。

なのに秀助は、ここで十全の挙動ができた。しかも驚くべきことにプラーナ吸収を受けている感覚がなかった。体内のプラーナ量の

減少が停止している。武道家、しかも体内の龍ロウを扱う龍使いである秀助だ、この自己診断に誤りはない。

秀助の背後でラキが箒を手に取り立ち上がり、ベールⅡゼファアに気負いなく向かい合う。

「ウィザードだから、ですよ。無事なのはね」

ラキの箒に変化が起こる。劇的なものではないが、確かにそれは変わった。ウィザードのために人が作り出したはずの箒というガジェットではない、別の片鱗を持つなにかへと。

生命の息吹。それがラキの箒に息づいた。

箒とは科学と魔法のハイブリッドで生まれたものである。科学を使用し過ぎれば常識遮断を持つ侵魔やウィザードにはダメージを与えられないがためだ。故に機械的でない部分も多々あるはずであり、魔法的な動作は不思議に思うことではない。が、ラキの手にする箒は通常のウィザードが使うそれとは一線を画するように見えた。

ラキの手の中で異質な空気を放つ有機的な長剣型の箒に、ベールⅡゼファアはほうと声をあげた。

「デモニックブルーム……。なるほど、そいつが動けるのはアンタのせいなのね、魔王キースⅡラグランジュ」

デモニックブルーム、秀助は噂程度にその存在を知っていた。所持者の能力を飛躍的に上昇させる謎の箒。風の噂にはそれを扱う者は魔王となる、らしい。その噂はベールⅡゼファアの反応をみる限り、どうやら真実のようだった。

「現世では呼ばれるならキースⅡラグランジュよりもラキの方がしっくりくるんだけど。まあいいか。ご推察の通り、これはわたしがやってるよ」

「なら、ここで始末させてもらおうわ」

ベールⅡゼファーが無造作に魔法を放った。それでも充分過ぎる威力。

「だから、ベルの相手はパールちゃんだったのよ！」

パールがそれを防ごうと割り込むが、ベールⅡゼファーはその対応を見越していたのか別の魔法を既に放っていた。距離が離れたふたつの魔法を同時に無効化するのには、ほぼ不可能。それでもパールは最初の魔法を腕で弾き飛ばしながら、二発目のベルの魔法に自分の魔法を撃った。瞬間的に出したものであるにも拘わらず、ベールⅡゼファーのものより威力はある。それでもコントロールが甘かった。魔法は接触し合いながらも相殺するには至らない。

秀助とラキに攻撃が迫る。

直撃。

だが、当たったのは秀助とラキではない。その前に現れたひとつの鉄壁だった。鋼の盾、それを秀助はよく知っている。

「まったく、おちおち寝てもいらんないのか」

難儀そうに言って、沢木権が少し離れた海岸から腕をつきだしていた。

「権、その傷……」

「傷口はなんとか塞いだ。動き回るのは、さすがに辛いんだが……主人に死ぬなっていわれたからな、斃れないさ」

「ふんっ、権に死なれたら神社の管理が面倒なだけよ。修理させなきゃいけないんだから」

アイゼンブルグを回収しやってきた権に、パールは自分のことを話に出されたのが恥ずかしかったからなのか突き放すようにいった。それに権は肩をすくめる。

一対だったアイゼンブルグはひとつになっている。おそらく片方は行動不能となってしまうたのだろう。今は月衣に収めているはずだ。

フルメンバーが揃ったことにベールⅡゼファアは舌打ちする。

「面倒臭いわね、全員揃っちゃうなんて。でもこうなったら全員まとめて、あの世に送ってあげる」

ベールⅡゼファアが魔法を放とうとして——無数の大量のプラナを感じて、手を止めた。

それがここに接近してきている。これほどはつきりとしたものなら、全員が気づいた。しかもそれらは目視できる距離にまで迫っている。

空を埋め尽くさんばかりの大量の侵魔。十、二十、三十ではきかない。異形の大群は空を五割も隠すほどの数。いや、空の面積の方がわずかに少ないかもしれない。どちらにしろ凄まじい軍勢であることに変わりないが。

一生に一度お目にかかれるかわからないほどの軍勢に秀助たちは啞然とするしかなかった。圧倒的なまでの物量。もしあれが自分たちに対峙するベールⅡゼファアへの援軍であったならば、勝利は絶望的などというレベルではない。そもそも話にすらならなかった。だが、ベールⅡゼファアも眉をひそめているため少ないとも彼女に関係はないようである。

侵魔の先頭だけは人の形をした女性で、彼女がこの集団を率いていた。プラナ量からして間違いなく魔王だ。

魔王は秀助たちではなく、巨大化を続ける冥魔王に釘付けとなっていた。

「リオンⅡグンタの報告にあった通りだ……。このような害悪が蘇るとは、な」

魔王、いや侵魔達の息は荒い。プラーナ吸収によることだろう。

低級の侵魔の幾体が耐えられずに消滅した。全体の数からしてみれば微々たるものでしかないが、このままでは戦力が悪戯に減るだけである。プラーナを大量に吸収されていて、魔王はすぐに決着をつけようと焦った。少なくとも、ベールⅡゼファーやパールにも気づけないほどに。

魔王の号令で魔法攻撃を得意とする侵魔が遠距離から攻撃を繰り出した。ひとつひとつはベールⅡゼファーやパールのものに比べたら兎戯にも等しかったが、それも数が集まれば馬鹿にできない威力を孕む。

魔法が大気を疾走し、余波が秀助たちのいる浜辺にも吹き荒れる。台風のような横殴りの暴風が身体を叩いた。

魔法が冥魔王に命中、身体に余すことなく降り注ぐ。魔法の数は冥魔王を覆い隠すほどに大量だった。

なのに、攻撃を指示した魔王は絶望しか感じない。当たれば魔王でもただではすまないほどの魔法を浴びたにも拘わらず、冥魔王は対した痛手を受けていなかったのだ。

冥魔王が億劫そうに驚頭を侵魔の一団に向ける。目には怒りが浮ぶ。突然の攻撃に冥魔王は憤怒して、籠手に包まれた両手を開く。胸を中心に巨大な魔法陣が完成する。

「みんな、伏せて！」

ラキの注意と同時に、身体全身を使った魔法陣から怒濤の魔力がほとばしった。ウィサードでは一生かかっても、何度転生したとしても使い切れないほどの魔力が消費された理不尽なまでの凶悪な光。

それが巻き起こした衝撃は台風や暴風など目ではない。もはや気化爆弾の爆発すら越えていた。

侵魔たちに魔法が接触——たった一瞬で総ての侵魔が焼き払われた。魔王とて例外ではなく、跡形もない。

悪夢としかいいようがなかった。

「な、なによこれ……。下手したら、シャイマールクラスとかになるんじゃないの!？」

さすがのパールも驚愕を露わにする。シャイマールとは、かつて裏界に大公を超える”皇帝”として君臨していた魔王である。今でこそ不在であるが、シャイマールの力は魔王と何十億もの侵魔の総てを力で支配できるほどであり、その絶大さがわかる。人間が容易に太刀打ちできるようなものではない。こんな化け物の中の化け物ともいえる存在が表界に侵入してくることを想像すると恐怖しかない。

「シャイマールクラス、とまではいかないわ。けどプラーナを吸収し続ければそれを凌駕するほどの存在となる……。予想以上だわ、冥魔王。このままあたしのプラーナを吸い尽くされるのは勘弁だけど」

パールⅡゼファーは不敵に笑う。もう勝利を確信しているのだから。

だが、ラキは笑いこそしていないものの絶望はしていない。こんな状況なのにだ。それが秀助には不思議でなかった。秀助は胸の裡で焦燥と恐怖が爪を立てて暴れまわっているのに。

「冥魔王は、斃せるよ。わたしたちならね」

そうして、ラキは確固たる口調で宣言する。

全員が予想外の言葉に仰天した。

「だが、あの冥魔王の力は凄まじいぞ。俺たちはなんでかプラーナ吸収を受けていないが、それだけじゃ近づくことだってできない」「いいえ。ウィザードならあの冥魔王”悪食のけもの”に対抗できるのよ。冥魔王が過去に誰によって封印されたのか覚えてる？ キースⅡラグランジュとウィザードでしょ」

キースⅡラグランジュとは、ラキと置き換えても差し支えないだろう。

「その時、キースⅡラグランジュは《小さな奇跡》を発動させたの」

《小さな奇跡》。それは限られた大いなる者達に与えられた、不可能を可能とする奇跡。たった一度の”小さな奇跡”、それを起こすことができる類い希なる力。

「それで冥魔王を斃す、とかはできなかったけど、キースⅡラグランジュは他の奇跡を実現させた。それは冥魔王の魔法攻撃とプラーナ吸収能力はウィザードの月衣で遮断される、というもののね」

「ってことは、アンタらウィザードは距離をとって戦えばあの化け物相手に無傷で勝てるってわけ!？」

パールの反応も無理はない。ベールⅡゼファーやパールより遙かに格下の魔王とはいえ、一瞬で屠ることができる冥魔王にウィザードは無傷で勝てるかもしれないのだ。卑怯なんてレベルではない。

『いえ、そこまでは都合よくありません。さきほどのような威力の魔法は月衣だけでは遮断し切れませんし、正確には減衰させているだけです。プラーナ吸収も接近し過ぎれば危険です。しかもこちら

は接近して強力なダメージを与えていかなければ、すぐに再生されますから』

今まで黙っていたIrisがラキに変わって欠点を並べる。こうして欠点を見てみると、有効なアドバンテージではあるが圧倒的な優位に立てるわけではないのがわかる。

厳しい。この優位を以てしても、あの怪物に勝てる可能性は決して高くない。ウィザードと冥魔王の個体ポテンシャルが違いすぎる。そう悩んでいると、ベールⅡゼファアが訊ねてくる。

「……あたしがいるのにそんな詳しいことまで話しちゃっていいわけ？ 冥魔王を復活させたのは誰だと思ってるのよ」

「なによ、ベル。この期に及んでまだ邪魔してくる気？ 蠅みたいにぶんぶんと……いい加減にしないと殺虫剤かけてやるわよ」

「パール、アンタの寿命は確実に下がったわ。むしろあたしが下げる」

眉根をひくひくと震わせてベールⅡゼファアが拳を握りしめると、秀助は脊髄反射的に身構えてしまう。だがベールⅡゼファアがその拳を振るうことはなかった。

「まあ、いいわ。やってみなさいよ、アンタたち。あたしは見物させてもらうから」

拳を解いたベールⅡゼファアの台詞に耳を疑った。さっきまでは苛烈な攻撃をあんなにも加えてきたのに、突然邪魔はしないといいたのだ。

パールは勘ぐり、不審そうな目向ける。

「ベル……もしかしてアンタ、冥魔王が予想以上に強そうだからパ

ールちゃんたちに始末させようとか考えてんの？　自分で復活させ
ていて」

「うっさいわね、違うわよ。アンタたちが足掻く姿を空の上から鑑
賞してあげようとおもったの。精々足掻きなさい、あたしが退屈し
ない程度にね」

ベールⅡゼファアの言葉に偽りはいいのか、彼女の身体はさらに
上空へと飛翔する。あっという間に有視界に小柄な少女の姿はな
くなった。だがベールⅡゼファアは魔王である。秀助や権の視力では
見つけられないが、魔王ならこの距離でもこちらを確認できるのだ
ろう。パールも天空にベールⅡゼファアがいることはわかってい
ようだった。もっとも実際に視力で確認したのか、プラーナの集中
具合などで確認しているのかは、どちらもできない人間には推し量
ることはできない。

しかしこれで厄介な敵が減った。これだけ距離が開いていればも
しベールⅡゼファアが攻撃してきたとしても回避は充分可能である。
興奮して甲高い声をあげながら目に付いたものを手当たり次第に
破壊しそれをプラーナに分解して吸収している鷲頭の冥魔王をウキ
は見る。

「ここであの冥魔王を斃さなきゃ、世界は滅んでしまう……。みん
な、戦う覚悟はあるかな？」

全員が頷く。今もプラーナを吸収され続けているパールも賛同を
示していた。

『冥魔王を斃すには短時間で致命傷を与えるしかありません。プラ
ーナ吸収で自己修復してしまいますから。どんな傷でも五分もあれ
ば修復できてしまうでしょうね』

「なら、五分以内に回復しようのない致死的なダメージを与えれば

いいんでしょう？ ……やってやるさ」

それが秀助のミラに対する贖罪だ。たとえミラの記憶などがラキにも総て受け継がれたとはいえ、やはりミラは死んでしまったことに変わりはない。秀助が助けられなかったことに変わりはない。ならせめて、冥魔王はこの手で止めてみせよう。ここで斃さねばウィザードが優位に立てるといっても、プラーナを吸収し過ぎて滅ぼしようがなくなる。封印すら不可能になる。

「——うん、じゃあ冥魔王をやっつけちゃいますか」

＊

冥魔王は久方振りの外界に歓喜していた。封印に捕らわれていないとは、こうも素晴らしきことなのか、と。

その懐かしくも新しい刺激に酔いしれながら現れた敵を屠り、生命を喰らい、この世界を蹂躪する。この世界はそれほど広大というわけではないが、そのわりにプラーナの保有量は拔群だ。これら総てを我が物とすれば表界も単独で滅ぼすことは造作もないことだろうと愉悦に胸を満たす。

悦に浸って甘美なプラーナを味わっていると、冥魔王は夜闇の中を高速で接近してくる金色の輝きを捉えた。

疾い。このプラーナ吸収空間においてこの機動性は冥魔王とて予想外だった。

胸元で衝撃、冥魔王の巨体が揺れた。パールによる至近距離からの魔法攻撃を受けた冥魔王が傾ぐ。

「ほらほら、どうしたのよノッポ、このパールちゃんが相手をしてあげるわよ」

それは裏界屈指の大魔王によりもたらされたもの。冥魔王のプラーナ吸収能力で魔法を無効化するには、一端それ以外のプラーナを吸収の出力を落として対象魔法に集中せねばならない。全盛期の力ならばそうではなかったのだが。不意打ち気味に放たれれば冥魔王でも有効打となりうる。

「G a a a a a a A A A A A !」

冥魔王は怒り猛り、電柱をいくつも束ねたような太い屈強な轟腕を振るう。その一動作によるものだけで地面を砕き、地形を変えるほどの理不尽な破壊力を秘めている。人に命中すればトマトのように破裂するだろう。

パールは空中を疾走して轟腕を躲し、それが巻き起こす烈風にも負けず魔法を釣瓶撃ちした。それを吸収し無効化しようとして――冥魔王の鷲頭の側頭部に魔法が叩き込まれた。鋭く強力な一撃。

それは冥魔王がパールに気を取られた隙に移動したラキが放ったものだった。吸収能力の集中をし損ねた冥魔王にパールの魔法が連続して襲いかかる。

「G u U ! ?」

ボクサーで喻えれば今のパールの魔法はジャブのようなもののはずだったが、大魔王のポテンシャルから放たれる魔法は一発一発が重かった。

ラキが小さくガッツポーズをとる。

「これで全弾命中！ いや、月衣があるからプラーナ吸収もされないし、記憶が戻ってもウィザードのままで良かった」

『その代わり魔王だった時よりも力は劣化していますがね』

冥魔王が先程頭を狙ったのはパールと同じ魔王ではなく、ウィザードであると正しい判断をする。永年の封印で混濁した意識でも自分を闇の中に追いやった者共のことは覚えている。奴らにはプラーナ吸収能力が効かなくされた。厄介。しかも、と冥魔王はラキを睨む。どういふことか、あのウィザードはかつて自分を窮地に陥らせた魔王の転生体ではないか。

憎々しきで烈火のような感情が全身を焼いた。鷲頭をラキに向け、嘴を開く。魔法陣が展開し、口腔からは紅蓮の炎が噴き出した。

しかし、それは鋼の自立駆動盾型箒による防御行動でラキに達することはなかった。

本来ならこのくらいの盾は呆気なく破壊できるはずなのだが、ウィザードの月匣により魔法が減衰されてしまい盾はビクともしなかった。

「今だ、秀助！」

たったひとつになってしまったアイゼンブルグに身体を隠し炎を凌ぎながら、権は合図をする。その時秀助は肉薄したために起こった少量のプラーナ吸収に耐えながら、既に鷲頭の上でドラゴンブルーム式を振りかぶっている。

「《雷竜》——！」

雷をほとばしらせながら火を噴き続ける冥魔王の頭に鉄槌がごとく落とした。トンファーにより力が乗った重い一撃を受けると同時に竜を形作る紫電が体内を駆け抜ける。

落雷に撃たれた冥魔王は堪らず魔法を中断してしまった。炎が途切れ、冥魔王の鷲頭が左右に揺れる。

——効いている。

鷲頭を蹴り飛ばし冥魔王後方、プラーナ吸収を遮断できる位置ま

で離脱しながら、秀助は確かな手応えを感じていた。あれほど驚異的な戦闘能力を見せつけてきた相手とやり合えている。これもラキ——キースⅡラグランジュが起こした奇跡のおかげなのか。月衣の恩恵である。そして大魔王のひとりが一緒に戦ってくれてもいる。ならば、勝てない相手ではない。いや、必ず勝つ。打ち斃す。

だが、冥魔王はそんな甘い期待を打ち碎くべく吼える。

「……G A A A A A A i ! !」

籠手で覆った獣の両手を冥魔王は天にかざす。すると魔法陣がまたしても現れ、両手の先で巨大な魔力の塊により球体が形成された。

『魔力増大、来ます』

「やばっ……みんな回避！」

瞬間、球体が弾ける。それは雨となり冥魔王の半径五百メートル圏内に降り注いだ。

いきなり現れたそれはとてもではないが回避しきれない。秀助達に出来たのは防衛行動までだった。

交差させたドラゴンブルームを叩き、雨が身体に容赦なく牙をたてる。防御魔法も盾も所持していない秀助はもろにその攻撃に曝されることになっていた。急所をドラゴンブルームで守り、龍をかけ巡らせ身体を硬化させて凌ぎきる。それでも月衣により弱体化した魔法だというのだから信じられない。

魔法が発動されてから数秒後に雨は止む。しかし秀助には数分も続いていたように錯覚させられるほどに恐ろしかった。

他の三人も防御魔法、あるいは盾を持っていたため無事だったが、何度も喰らっては堪ったものではなかった。しかも、

「もう再生が始まっているのか！」

パールやラキ、秀助が与えた傷が徐々に塞がっていく。ものの数分で総ての肉体損傷がなくなるだろう。

相手の攻撃を耐えている間にも冥魔王は回復を進めてしまう。このままではたちごっこだ。

冥魔王が闘争に声を上げながら両腕を振り回す。あんな轟腕が振り回されればそれだけで威圧効果は充分にあった。月衣が遮断できるのは魔法だけで、あれに当たればウィザードはただではすまない。

「あの腕が邪魔で近づけない……っ！」

「それなら、バツサリといっちゃえばいいのよ」

いつの間にか冥魔王の前方から離れたパールが鼻を鳴らした。ラキに近づき耳打ちする。

「同時に左肩に魔法を撃つわよ。片腕がなくなればマシでしょ」

「了解。……秀助、なんとか一瞬冥魔王の気をそらせない？」

プラーナ吸収による無効化を警戒しているのだろう。秀助はしばし迷って頷いた。

「わかった、なんとかしてみる！」

そういつて秀助は冥魔王の頭上を駆けて前方へと移動する。注意を引くにはまず相手の視線を釘付けにする必要があった。

狙い通り、冥魔王が秀助を見た。猛禽の瞳が自分の前方に現れた獲物を認識し、腕で薙ぎ払う。

それをなんとか回避するが、凄まじい風圧で一瞬身体のバランスが崩れる。そこを狙って冥魔王の口腔から断続的に火焰の魔法が放たれた。不安定な体勢のまま緊急回避——しかし何発かが身体を焼

いた。今着ている輝明学園の制服——ベールⅡゼファーにボロ切れにされたものとは別の月衣にあった予備——は月衣にある守護と制服の繊維に刻まれた加護で燃えることは辛うじて免れる。

続いて第二波が胸部に現れた魔法陣から放出される。

それは紅でも蒼でもない漆黒の紅蓮——冥府の奥底で燃え猛る炎だった。《ブラックインフェルノ》と名付けられた魂さえも消失させる地獄の業火。

その高位魔法は月衣の効果を意に介さない。秀助自身を灰塵と変える黒炎であることは簡単に想像できた。

避けられない。あまりにこの炎は大きすぎる。視界総てを覆う逃げ場なき暴力。

危機に陥った秀助の前に頼もしい鉄壁が現れる。アイゼンブルグを手にした権だ。黒炎をアイゼンブルグで防ぎ、秀助を守った。だがいかに強固な筈といってもこの大質量の炎を完全に防ぎきることは不可能である。

恐ろしい勢いで噴出する黒炎と拮抗しながら権は秀助に叫ぶ。

「この攻撃が終わったら、お前もすぐに反撃してやれ！」

「ああ、わかった」

そして、アイゼンブルグが溶解し始める。あまりの高熱に鉄壁を誇る筈も限界がきた。アイゼンブルグが爆散するのと《ブラックインフェルノ》が消失したのは奇跡的にも同時だった。

権が力を失って干からびた穴だらけの大地に落下していくが意識は保っていた。

「秀助、やれ」

「——《伏竜》ッ」

破ッ、と拳を突き出すと同時に身体を駆け巡っていた龍のエネル

ギーを一点に集中して飛び出した。離れていた距離を一気に零にし、竜を形作った龍が冥魔王の首筋に喰らいついた。

それだけではない。接触と同時に、撃ち出された龍が冥魔王の神経系に衝撃を流し込んだ。

「GUU!？」

龍使いの二重攻撃、《竜尾》。それは攻撃で敵対象を滅すること
ができなくとも、なんらかの障害を与えるものだ。身体を駆け巡る
衝撃に冥魔王の動きは僅かな時間確実に停止した。

その好機をラキとパールは逃さない。

「《ソードレイン》！」

「《ソードオブスルト》！」

無数の光剣と巨大な煉獄の剣が冥魔王に向かって打ち出された。

ラキが放ったのはウィザードが近年作成した対冥魔王用魔装、《ソ
ードレイン》。大量の光剣はそれぞれが冥魔に対して有効な攻撃力
を持った破碎の雨^{レイン}。

同時にパールが放ったものは、《ソードレイン》の光剣を総て合
わせたほどもある巨大な炎の剣^{ソードオブスルト}。巨人が振るう刀剣のようなサイズ
の剣は、冥魔王の腕、あわよくば首を跳ねようと高熱を発して駆け
抜ける。

冥魔王の意識に開いた空白、そこを狙った一撃——誰もが当たる
と確信した。

だが、冥魔王はそれに反逆する。

魔法が撃たれたと同時に、放心していたはずの冥魔王が迫るふた
つの剣を仰ぎ見た。

「ッ!？」

《竜尾》は決まったのに、なんで、と秀助が瞠目した。あまりに復帰が早すぎる。まるで、元から効いていなかったのような対応――。

――《苦痛耐性》、苦痛や毒など身体に干渉してくるものを無視、無効化できる能力によるもの。そう秀助が判断できた時には冥魔王は上空の魔法に掌を向けていた。

異界へのゲートが開かれる。

一カ所の空間が捻れ、穴が開く。それは冥魔王が封印されていた世界とラビリンスシティを繋いでいたブラックホール状のものに似ていた。

その穴から身の毛もよだつほどの悪意が漏れだし、背筋を複数のムカデに這いずりまわられたような不快感がこみ上げる。

悪意、殺意、敵意、憎悪、嫉妬。様々な負の感情が溢れ出している。穴の先にあるその最厄の坩堝は冥魔の世界、冥界であった。

冥界へのゲートが開いたのは僅か一瞬だったが、《ソードレイン》を総て飲み込んで消失した。《ヴォイドエフェクト》、冥界に魔法の力を流し込み無効化する強力な能力である。

それでも《ヴォイドエフェクト》の効果範囲は特別広いわけではない。パールの《ソードオブスルト》は難を逃れて冥魔王に接近する。

それを冥魔王は柱のような腕を振るい、叩き割った。

爆散。

炎の剣が碎けた瞬間に爆発を起こした。身を炙る熱風が人間や様々なものを舐めた。

「H a a a a k i i i i i ! ! !」

冥魔王、健在。左腕の肉がいくらか吹き飛んでいるものの、致命傷には程遠い。

爆煙を引きながら自分の戦闘能力を見せつけるように吼えた。それは見るものを絶望させるには充分過ぎるほどの暴力を持って空気を震わせる。

《竜尾》、《ソードレイン》の即時無効化、《ソードオブスルト》を叩き落とし爆発にも耐え抜く強靱さはまさしく冥魔王の名にふさわしいものだった。

「いや、まだよ——秀助、行って！ 冥魔王の左胸には心臓と呼べる器官があるから、それを！」

ラキの叫びを聞くや否や秀助は躊躇なく飛び出していた。颯風になって空を疾駆する。遠距離からの強力な魔法を打ち消してしまうなら、人間と同じ左胸にある心臓は至近距離での攻撃で破壊するしかない。

冥魔王が秀助の接近に身体全体のサイズに匹敵する魔法陣を前面に作り出した。これは魔王と侵魔の集団をものの数秒で消し炭としたものと同じものである。ラビリンシティから汲み上げられた魔力が魔法陣に収縮した。これに当たれば月衣があろうがなかろうが関係なしに消し去られるだろう。

ならば、先手をとればいい。攻撃こそ最大の防御だ。

秀助の身につけた実家の槍馬流の理念は、槍がごとき鋭利さで敵を穿つものである。

つまり、直線距離の槍馬流の速度は疾い——。

冥魔王に迫りながら、呼吸を整え龍を活性化させる。体内を流れる龍が増大することにより、秀助のプラーナが増した。《気功》と名の付く龍使いの技法である。身体に力がたぎり、ドラゴンブルームによる一撃も跳ね上がる。

でも、足りない。冥魔王の筋肉は積層構造の装甲板よりも頑強で分厚い。この拳では力不足だ。

ならば、さらに力を上乘せする。

「——破アツ！」

掛け声とともに脳内でスイッチを切り替え、活性化させた龍を爆発燃焼させる——《竜神変》を発動した。燃焼の影響で大気が震え、氣が風のように吹き上がり髪を逆立てさせる。《氣功》の効果を跳ね上げ、プラーナが通常とは比べものにならぬほど上昇した代償として身体に負担がのしかかるが、この程度ならまだ無視できる。

さらに秀助はドラゴンブルーム式式後部に搭載したオプシオン、エネルギーブースターを起動させた。ミラ救出前まで月衣で保管していたパーツだ。

そのエネルギーブースターが火を噴いた。一対の筭から噴き出すふたつの光はまさに大空に光臨する天使の翼。途端に秀助の勢いが加速し、冥魔王に肉薄する。プラーナ吸収が始まるが、龍使いの力でプラーナを遥かに高められた今の秀助には耐えられる。

魔法が放たれるよりも早く秀助はドラゴンブルームを冥魔王に叩きつけた。ライトグリーンの噴射光を撒き散らすエネルギーブースターの勢いと《竜神変》の力を乗せられた一撃は冥魔王の左胸をえぐった。

ドラゴンブルームの強固な外装が加えられたあまりの力に悲鳴をあげる。だが主人の全力を確実に冥魔王に伝えていた。三重にも及ぶ攻撃の相乗効果を利用した秀助の切り札^{ジョーカー}の炸裂。

「Gooooooooooooooooo!!」

想像以上に、冥魔王の筋肉の束は硬かった。それは常識遮断の効果がなかったとしても生身で大気圏突入に耐えうるほどだ。ドラゴンブルームが胸筋をえぐっても心臓には達しない。

そして冥魔王の魔法陣が充填^{チャージ}を終えた凶悪な光を放った。その中には秀助も完全に含まれていた。

白銀の閃光。

それが発射されようとしているのが秀助にはやけにゆっくり見えた。死を間際にして感覚が間延びしている。

——まだいける。

その中で秀助はまだ諦めていない。魔法が放たれ秀助の身体に接触するまで、一瞬の空白がある。ならば、それに全身全霊をかけよう。

本当に最後の奥の手——龍使いの奥義がひとつ。

《気功》、《竜神変》——そのふたつを使用することによりさらなる増強効果を可能とする最後の起爆剤。デトネーター

爆発燃焼して燃え上がる龍をさらに昇華させる技法、

「——《爆功》」

轟々と燃える龍に火薬を流し込むイメージ、そして爆発。

龍の過剰使用に全身が哭いた。今にも身体が押しつぶされ、骨は枯れ木のようにへし折れ、内臓を果物みたいに晒して死んでしまいうようなほどの苦痛。一瞬後には身体が原子崩壊していてもおかしくないほどの負担が押し寄せた。

少しでも保てばいい。斃せるならばこちらの勝ちだ。

毛細血管が千切れる。構わない。敵の魔法はすぐ目の前である、今更この程度は知ったものか——。

ドラゴンブルームに亀裂が走る。その中で、秀助は練り上げた龍を吐き出した。

莫大なプラーナ、龍、あるいは気で作り出された竜——それは神々しいまでの光の衣をまといて顕現した。

「撃ち抜け——ッ」

衝撃。

魔法と竜、競り勝ったのは、竜。

魔法が解き放たれるよりもほんの一刹那早く、竜は轟く咆哮をあげて冥魔王の心臓を喰い潰した。左胸を貫通した竜はそのまま天空へと突き抜けていった。

冥魔王の左胸にはぽっかりと風穴が穿たれて向かい側が妨げられることなく窺える。

「G、G u o……？」

微かに動く鷲頭。それが自分の傷口を確認できたかはわからない。ただ致命傷を受けたのだけは理解できた。

プラーナ吸収は完全に収まっている。それは冥魔王の命運が尽きたことを意味していた。巨体が力を失い、自由落下。海水の枯れたそこに大量の粉塵を巻き上げて斃れた。

冥魔王は完全に事切れていた。

「冥魔王を、斃せた……」

ラキが感極まったように呟いた。彼女は前世から因縁があったのだ。それは感無量の喜びなのだろう。

「あらら、冥魔王を本当に斃しちゃうなんてね。凄いじゃないのアンタたち」

いつの間にかベールⅡゼファアが秀助のすぐ近くに浮いていた。身構えることはない。そんな余力は残されていなかった。今は酸素不足の肺に栄養を与えて破裂しそうな心臓を落ち着けようとつとめることしかできない。

顔を向けることが精一杯の秀助に変わって、パールがベールⅡゼファアに指を突きつけた。

「そうよ、ちゃんと見た？ ベルの野望はパールちゃんたちが挫いてやったんだから！ あっはは、ざまあみなさい！」

軽快であり不遜にいうパールも満身創痍だった。なにせ彼女はウイザードではない。冥魔王のプラーナ吸収を常時受けていなければならなかったのである。おまけに強力な魔法の使用も重なり、狭界にいながら魔王パール・クール力の力は恐ろしく消耗していた。

それはみんなも同じだ。冥魔王は斃した。でも、このパール・ゼファアが腹いせに攻撃を仕掛けてきたなら一方的にやられるしかない。

それが心配であったもののパール・ゼファアが攻勢にでる様子はまったく見受けられなかった。

「まったく、相変わらず生意気ね、パール。……まあいいわ。今回はアナタたちの勝ちね。認めてあげるわ。腹は立つけど、あたしは小細工なく勝負の決まった盤面をひっくり返すほど無粋でも無礼でもないのよね。パールみたいなお子様ならともかく」

「……喧嘩売ってるなら買わせてもらうけど」

「買うほどお金もないくせに？」

ぷるぷるとパールがまだ闘志を燃やし始めるもののパール・ゼファアのいうとおり、買えるだけの力が今はなかった。その皮肉を甘んじて受けるしかない。

ラビリンシティの敷地を維持するプラーナを喰らい内包したからか、死した冥魔王の崩壊速度は緩やかだった。普通の侵魔ならばすぐに分解消滅しているのに。よくもこんな相手に勝利できたものだ。秀助自身も夢を見ているような心地だった。

パール・ゼファアもほどけて消えゆく冥魔王を視界に収める。

「で、いつまで覗き見を続ける気なのかしら。リオン？」

するとベールⅡゼファアの言葉に応え、突如虚空が陽炎のように歪み、気だるげな女性が現れる。長い黒髪と抱えた書物が印象的で、その場の全員が彼女を知っていた。

秘密侯爵リオンⅡグンタ。

「さすがに見破られてしまったようですね、ベル」

「当たり前よ、この程度ならわかってね。さっきからあたしみたい
に傍観してたのも気づいてたわよ」

「こちらにも事情がありましたから。ともあれ、皆さんお疲れ様で
す。冥魔王による世界の危機は阻止されました」

リオンに労ってもらいようやく戦いが終わったと確証できた。も
しこれで冥魔王が再び蘇りでもしたら堪ったものではない。秘密侯
爵のお墨付きが出れば安心というものだ。

呼吸を整えて秀助が体調を回復させていると、ベールⅡゼファ
ーがリオンに笑みを浮かべた。

「それで、アンタはいつまでそんな三文芝居を続ける気なのかしら、
ユダⅡカエサル？」

瞬間、重力を押し固めたような力場を発生させる漆黒の弾丸がリ
オンの腕を撃ち抜いた。

「——ッ!？」

抱えていた書物を支えられなくなり、滑り落ちる。それを胸でし
っかりと受け止めたのは髪の高い女性だ。その姿を見て秀助たちは
我が目を疑う。

「リオンⅡグンタ、だって……ッ？」

その書物を受け止めたのは、なんとふたり目のリオンⅡグンタだった。頭が混乱する。腕を撃たれたリオンとおそらく魔法を撃ち書物を奪ったリオン、何故同一の人物がふたりもいるのか。

「返してもらいますよ、この書物は。自分の命と同じくらい大切なものです」

無表情の中に僅かな安堵の色を浮かべたリオンに対し、傷を負ったリオンは焦燥混じりの舌打ちをした。

「油断したか……こちらの正体まで見破られるとはな」

「だって今のアンタ、プラーナがすっからかんじゃない。世界結界もないのに不自然すぎるのよ。だいたい、本物のリオンと知り合いのあたしが気づかないと思った？ 自意識過剰ね」

そうして傷を負ったリオンの姿が霞む。霧状のものが身体から立ち上っていた。霧が収まるとリオンだったものはまったく違う人物になっていた。

赤毛のポニーテールに魔術師然としたロープ、ユダⅡカエサルだ。

「……リオンⅡグンタが動いているのはわかっていたんだ。私はパールⅡクールにベールⅡゼファアの情報を伝えた覚えなどなかったからね」

「ええ、察しの通りパールに接触したのは私です。彼女ならベルの計画を止めようと関わってくれると思っていましたから。パールは予想通り関わってくれました。まさか冥魔王を斃すほどの活躍をしてくれるとは考えていませんでした」

「……まったく、あたしの計画が他の魔王に利用されているなんてね。腸が煮えくり返るわ。リオンもさっきじゃなくてもっと前にいってくれればよかったのよ」

「仕方ありません。私も書物をユダに奪われてしまっていましたから。ベルに接触して大幅に予言を変えてしまうと私の動きを気取られてしまいますから。書物の予言が変わってしまえば事前に私がわかっていた情報の有用性もなくなり、取り返す機会を逃すところでした。パールに情報を伝える程度の干渉なら平気だったのですが。私以外が書物を読むには解読に時間を必要としますから」

最後に顔を背けて、

「……それにベルはぼんこつだし」

「あんかいった？」

「いえ、なにも」

ベールⅡゼファーにリオン、ユダの間だけで会話が成立してしまっているため秀助たちは置いてけぼりをくらってしまい、いまいち話が理解できない。ただ、今までリオンと思い接してきた相手はあのユダと呼ばれる魔王が変装していた存在だった、というのはぼんやりとだが理解できた。

困惑している一同の中、比較的近くにいた秀助にリオンが微笑みかける。

「はじめまして、ですね。槍馬秀助。あなたからすれば私の顔をした者には何度も会っているはずですから不思議でしょうが。私も書物に記述されたあなたのことは存じていますよ」

「はあ、どうも……」

初対面なのに初対面じゃないリオンに対応がわからず、曖昧に返

事するしかない。

「ど、どうということよこれは！　なに、アンタらふたりしてパールちゃんを利用したわけ？」

「有り体にいえば、そういうことですね」

「……」

悔しさが言葉にならないのかパールは器用に宙で地団太を踏んだ。それとは対照的にパールの隣のラキはユダを見て動揺していた。

「ユダⅡカエサル……そんな、貴女はわたしが斃したはずよ」

「辛うじて行動できるだけのプラーナを残して写し身を作ったんだ。そのほぼ全力の写し身を君にけしかけたのさ。その私を斃せて君はユダⅡカエサルが死んだと勘違いしただろう？　それが狙いだっただのさ」

写し身、魔王が作り出す分身のことである。ベールⅡゼファーやパール、リオンなどの高位魔王は力が強すぎて世界結界内に侵入できないのでプラーナを割いて作った写し身を使って行動するのだ。本体は常に裏界にある。さらに写し身はやられた場合でも本体ではないので死なないメリットがあった。もっともプラーナを多く割いた写し身がやられればそれだけ本体も影響を受けてしまうし、強力な魔王くらいしか使わない。ユダはそれを使用して死を偽装することでラキたちの目から逃れたのである。

「もっとも、今の私は死んでも同然の力しかないが……」

ユダが懷から金属細工の施された代物を取り出す。秀助はそれに見覚えがあった。忘れるわけがない。それは彼女が常に身につけていた代物である。

それはミラのカチューシャだった。カチューシャをユダが持っている理由が秀助にはわからなかった。しかしラキとリオンはそれを見て顔色を変えた。

「それは……っ」

「今の君になら分かるだろう、この鍵のことが」

ユダがプラーナをカチューシャに流し込むと形が変質する。不定形になり、あるものへと変化する。それは古風な鍵だった。

「ベル、あの鍵をユダに使わせてはいけません！」

「遅いよ」

微笑を浮かべてユダが鍵を掲げた。すると、あの驚異が再臨した。即ち、プラーナ吸収。

鍵が周囲のプラーナを吸収する。それはウィザードの月衣があるうと無関係だった。それは力の方向性を失った冥魔王の死骸から優先的にプラーナを吸収し、鍵は膨大な量のそれをユダへと送り込んだ。あつという間に風前の灯火だったユダのプラーナ量が冥魔王クラスにまで上昇していく。

「くっ、リオン……これはなに!？」

「ユダが鍵を死亡した冥魔王から回収していたとは……。これは冥魔王を封印する鍵、ミラを補助する魔道具です。ミラは冥魔王の一部を秘めていて、それもプラーナ吸収能力を持っていました。あの魔道具は同じプラーナ吸収能力を付与され、奪われたミラのプラーナをすぐさま奪い返し個体を維持するため魔王キースⅡラグランジュによって制作された……」

『キースⅡラグランジュの《小さな奇跡》による遮断能力は冥魔王にだけしか対応していませんでした』

そこでラキが失態に呻いた。

「だからわたし自身が作ったあれの吸収能力を月衣は防げない……
っ」

「そう、君は自分が作ったものにより滅ぼされる。この魔道具を手に入れるこそが私の目的だった！」

ユダは笑みを酷薄なものにした。その身体が流れ込む力によって変形していく。身体が膨れ上がり、四肢は屈強なものになった。美しい女性の顔には血管が浮かび上がり、自信に満ち溢れた表情を張り付ける。体長は三メートルまで巨大化する。それはユダと冥魔王を足して割ったような姿だった。

「はんっ、そんなに大きなプラーナを吸収したら自我を保てなくなるだけなのよね。中級魔王程度がパールちゃんたちを超えた力を望むなんておこがましいにもほどがあるわ」

「大魔王パール＝クール、私はそれほど弱くは、ない……」

器に収まり切らぬプラーナを得れば、その者の自我は崩壊してしまふ。そうなればただの衝動に任せて行動する猛獣と成り下がるのだが、ユダにその兆候は見られなかった。彼女は高らかに自分の名を口にする。

「私は反逆の魔王ユダ＝カエサル。私は冥魔が意志に反逆する！」

ユダから一定量のプラーナが消失した。それは大海の水をバケツ一杯分汲んだ程度であったが、それでもかなりの消費である。

全身が僅かな間、炎状のものに包まれた。炎が消えると平然としているユダが残されていた。

「……これで私は自我を保ち続けて、強大な力を手に入れることができるのさ」

『叛逆の魔王、ですか。リオンⅡグンタへの完璧な変装もそれによるものでしょうね』

「肯定。あの時私は自分の身体に反逆した。そうして好きな姿を写し、声色まで模倣できたのさ。もっとも代償として正体をほのめかす発言しなければいけなかったけどね。リオンⅡグンタと”呼ばれています”、とかね」

ユダの嘲りに秀助が驚く。それは初対面の時にリオンに扮するユダが発したものだ。確かにあの時のユダはリオンとは呼ばれていたが、あくまで呼ばれていただけである。嘘はいつていなかった。最初からリオンではない、といわれていたのに気付かなかったことに臍を噛む。

「リオンⅡグンタの真似をして槍馬秀助にミラを預ける。彼女の名前はその時に名付けたのでね、私以外の者は個体名がミラと正確にはわかっていなかっただろう？ ああ、そうそう。ところで槍馬秀助、君は何故自分がミラを預けられたかわかるかい？」

「……………」

「君は強いが、ひとりなら狭界のベールⅡゼファアからミラを守り抜けるほどではないからだ。最初から君はミラを奪われ、キースⅡラグランジュの転生体であるためにミラへ引き寄せられたラキと共に此処に現れる、ということは書物に書き記された運命だったのさ。もっとも、本来のリオンⅡグンタにより予想外の人物がふたりも参入してしまったけどね。だから私もユダとしてベールⅡゼファアにつかざるを得なかった。ちなみにこのふたりがいなければラキは瀕死の重傷を負い、君は冥魔王と差し違えて死んでいたよ。……そして、私はラキを始末して今のようになこの鍵で冥魔王の力を得て

いた」

秀助は言葉を失っていた。最初からミラを奪われることは予定されていたことだった、といわれたのである。つまり秀助はミラを最低限守り、しかし守護をし切れない半端なウィザードとしてこの魔王の計画には適任だったから選ばれたに過ぎなかったのだ。

ユダの正体も見抜けず、情報は筒抜けで、初めから予定調和として利用されていた。ならばこれまでの自分の行動の意味はなんだったのだ。これは滑稽としかいいようがなかった。ずっとユダⅡカエサルの掌で踊らされるマリオネットだったのである。胸にぽっかりと穴が開いたように空虚となり、疲労でない理由で四肢に力が入らなかった。

「実際問題、ミラはウィザード組織に預けられていれば限定的に表界でも動けたんだ。世界の守護者”真昼の月”アンゼロット——今は不在らしいが——の宮殿に助けを求めれば特によかった。私がラビリンステイに呼んで大金を渡したのは此処にいる必要があると思わせる為だね。断片的に書物を解読し、急ごしらえの計画だったが、君は存外に上手くやってくれたよ」

敵に褒められても死にたいくらいの悔しさが胸を焼くだけだった。無力。あまりに、無力。

「……おかしいとは思っていましたが、この計画は練りに練られたものではなかったのですね」

「ああ。奇跡的に貴女から書物を奪えたのは僥倖だったよ」

「……あれは、私としたことが不覚をとりました」

「そうしてベールⅡゼファアが兼ねてから私の狙っていた冥魔王を復活させることを知って動き出したのさ。前からちよっかいを出していたラキに最後の接触をした後にね。転生体自身に危機が迫って

も冥魔王などに影響しないことを確認してしまったからさ。そして復活解除の危険が訪れ生まれたミラを攫い——後は君らが知る通りさ。断片的な予言で行動するしかなかったからね。何度も本気で焦ってしまったよ」

だが、ユダはミラのカチューシャを冥魔王の死骸から探し出し、使用し、強大な力を手にした。しかも現在進行形でこの場の全員からもプラーナ吸収をしている。封印状態の冥魔王と相克させる目的で作られたものだからか、出力はそれほど高くはないものの消耗しきったこの面子で果たしてこの魔王に勝てるだろうか。

いや、無理だ。特に秀助は——戦う意志という名の槍は完全にへし折られてしまっていた。まだドラゴンブルームの柄を掴んでいるのが不思議でしょうがない。

溢れんばかりの力を手に入れたユダは小馬鹿にするように首を傾げて全員を睥睨する。

「出始めに君たちが私の相手をしてくれるかな？ この身体に慣れておきたいんだ」

ベールⅡゼファアは増長するユダを不快げに睨む。

「力を得たからって図に乗るんじゃないわよ。余所から手に入れたもののくせに」

「かの高名な大魔王が入手方法に手段を選ぶのかい？ この力は自分の策略で手に入れたものだ、私の力といっても間違いないよ。ベールⅡゼファア」

慇懃無礼な態度のユダにベールⅡゼファアは苛立たちを募らせる。無論ユダの対応にもだが、それは今も自分のプラーナを吸い取られ続けていることに対してでもあった。

「そんなに戦いたいならこの際相手になってやるわよ——《ディヴ
アイン・コロナ・ザ・ランス》！」

間髪入れずにベールⅡゼファアが槍状に収束された突貫力を強化された魔法を撃ちだす。その孕む熱量が周囲の大気を歪ませ、まばたきひとつ待たずにユダに命中した。秀助に撃ったのとは違う手加減なしの最大出力。魔王でさえ当たれば致命傷を受けるだろう威力の爆発。

ランスが碎けて爆風が舞う。雪崩のような衝撃破が秀助たちを叩き、吹き飛ばす。

放心状態に陥っていた秀助も反射的に空中でブレーキをかける。常識遮断の月衣があればこのくらいの芸当はやってできないことはなかった。

そして、見てしまう。徐々に晴れる爆煙の中で仁王立ちする姿を。

「ふむ、さすがに天下の大魔王……全力で防御しても破られるか。調子に乗って魔法を喰らうものではないな、やはり」

右肩から腹部にかけて傷を負いながらもユダⅡカエサルがそこにいた。しかも傷は膨大な筋肉に阻まれ骨や臓器には達していない。

プラーナ吸収と防御魔法で軽減させたとはいえ、今の一撃は下手をすれば山も谷も吹き飛ばし地形を変えかねないほどに強力な物だったのだ。それを受けて今後の教訓にしようとするくらいには、ユダは元気だった。

これにはベールⅡゼファアも焦りを見せ、こめかみから脂汗を流した。今の攻撃は強力な魔王相手でも下手をすれば一発で勝敗を決するものである。これで決着事態がつくとは考えていなかったものの真っ向から防御され生き残られるとは予想だになかった。あまりに強固な防御能力。しかもユダはプラーナ吸収によって得たそれ

で自己修復を開始していた。完全に治られてしまえばせつかくの魔法が無駄になってしまう――。

続けざまに第二射を敢行しようとしたベールⅡゼファールと同じく、ユダもまた天に掌を向けていた。

「こちらからも、いかせてもらおう」

ユダの掌に雷光が落ちる。否、それは落ちたのではなく、掌から伸びた。あまりにそれは長く、長大で、掌から生まれたとすぐには把握出来なかった。

それは富士山など世界に名だたる標高を記録する山々よりもなお長い光の剣。眩い閃光を放ち、闇を打ち払い、世界を両断せんとする。

「では――」

「……ッ、《ヴァニティワールド・ジ・アンリミテッド》！」

「――参る」

ベールⅡゼファールの魔法によりユダの全方位を黒い膜、小型の世界が覆った。その外延から真っ赤な破壊光が無数に解き放たれる。それらは膜を突き破ることなく反射し、向かい側でまた反射し、世界の中を縦横無尽に暴れまわった。飢えた複数の獣を檻に閉じ込めたら、こんな暴力の嵐を巻き起こすだろう。

だが、ベールⅡゼファールの魔法とて長大な剣も包み込むには至らない。破壊光によるダメージを顧みず、ユダは剣を振り下ろした。剣は一度もつかえることなく世界を両断し、ベールⅡゼファールに切りかかった。

「くうッ、」

それをベールⅡゼファアが間一髪で躲せば、ラビリンスシティの地形に剣は命中——断ち切った。

轟音。

何千メートルにも及ぶ光剣は岩盤を切り裂き、縦一文字の傷跡をラビリンスシティの深部にまで刻みつけた。

破壊光につけられた身体の穿孔を確認しながらユダは剣を解除する。

「燃費と取り回しに難あり。他のものを使う方がいいかな」

その刀剣型魔法の性能を評しているユダに、ベールⅡゼファアは壮絶に笑う。

「上等ッ！」

大魔王と冥魔王の力を手に入れたものの大激突が開始された。

爆発、爆風、衝撃。

ベールⅡゼファアとユダの魔法が乱舞しあい、全員が当たらないように回避する。もし一発でも防御魔法なしに喰らえば無事にはいられない。

最強同士の攻防——であったが、今まで絶対的な能力を有していたベールⅡゼファアがなんと圧されていた。

プラーナの吸収能力が決定的な戦力の差となっている。ベールⅡゼファアの力は常に減少し、それはユダに流れ込む。時間が経てば経つだけ不利になるうえ、ベールⅡゼファアは前から冥魔王にプラーナを奪われている。これはかなりのハンデだった。

しかも現状のメンバーでもっとも強いのは間違いなくベールⅡゼファアである。リオンは侯爵であり大公に及ばないし、パールは消耗し切っている。ウィザードの力が魔王に及ぶわけは当然ない。

仮に全員が束になったとしてもこの力を持つユダに勝てるだろう

か。秀助には自分が養分になる未来しか想像できなかった。こんな肉体も精神も疲弊した状態でなにができるというのだろう。

流れ弾を避けながら、秀助は何故まだ自分が生にしがみついているのかと思った。死にそうになったこともミラを助けようとしたことも、魔王の手の内であつたのに？

「ああつ、もう！ ベルだけに活躍させるなんて癪に障る！」

「パール、間違っても乱入しないように。今のあなたでは危険です」「わかってるわよ。いつものパールちゃんなら指を銜えてなんかいないのに……」

リオン、パール、秀助、ラキは取り残され戦闘を見守っていた。だが趨勢はもうユダに偏っているのは目に見えていた。ベールⅡゼファアの常に物事を楽しむように持ち上げた口元が歪んでいる。

「……槍馬秀助」

宙を滑ってリオンが秀助に近づき、ささやき声で呼びかける。そちらに顔を向ければ長い黒髪に隠された無表情が覗いていた。

「あなたにお願いがあります。ユダⅡカエサルを斃してください」「……………僕、が？」

リオンの言葉は不思議だった。あんなものには全快の秀助でさえ手も足も出ないのは明白なのに、今の自分がどうできるものか。秀助の心情は完全に悲観的になってしまい、滅びを諦観してしまっていた。

リオンは億劫そうなゆったりとした動作で首肯する。

「無理だ。……勝てるわけがない」

「それが、できるのです。今、これができるのはあなたしかいない。龍使いとして洗練されたあなたでしか」

龍使いであることが重要、そこでラキがなにか察したのか弾かれたようにリオンを見た。

「まさか、鍵の主導権を握るの？」

「その通りです。プラーナの増幅、循環、使用——それを巧みに扱う龍使いであるからこそ可能です。ウィザードが魔王や侵魔に対抗するために連綿と受け継がせた技術、それは恵まれた戦闘能力を持つ魔王だからこそ持ち得ないもの……」

「どうということ？」

リオンとラキは相互の理解を得たようだったが、秀助は龍使いが必要とされていることしかわからない。

「ユダⅡカエサル力の源はあの”鍵”です。あれがプラーナ吸収を行い、力を得ている。この”鍵”はプラーナの供給量や細工によってプラーナ吸収などを変化させます。なので、プラーナの扱いに長けた龍使いである槍馬秀助が”鍵”に接触、その技能によりコントロール権を掌握し、今度はユダのプラーナを吸収する。そうすれば、ユダⅡカエサルを撃破できる」

そして、とりオンが区切り、秀助の瞳をじっと見た。心の奥底まで見透かすような魔王の双眸——。

「——ミラを生き返らせることができる」

秀助の全身に電流が走った。知らず目をこぼさんばかりに瞠り、息を呑んだ。心臓が一瞬止まって、今度は早鐘を打った。

間違えのないようにしばらく意味を頭の中で噛み砕き、咀嚼し、嚥下する。

「ミラが……生き返る、だって？」

「ええ。鍵を使いプラーナを吸収すれば、その中には取り込まれたミラの残滓があります。それを龍使いの技能を活用して再構成すれば——彼女はこの世に再誕する」

可能性は決して高いとはいいい切れませんが、とりオンは最後につけた。それでも秀助にはたいした問題ではなかった。ここで忘れてはならないのは、ミラをまだ助けられるということなのである。

知らず生唾を呑み込んだ。いつの間にか胸の空白がどこからか湧き上がる希望と闘志が埋め尽くしていた。

——ああ、なんで今まで挫けていたのか。

冥魔王を斃し、自分の失態で更なる敵を作ってしまった。なら、最後まで責任をとって始末するべきなのである。そう決めた。敵を斃すと決めたのだ。

情けない。初志貫徹できなかったのが情けない。ミラのがわかと燃え尽きたと思っていたものが再炎するのは笑い出したくなる。

でもまだ遅くはない。ミラを助け出し、世界も救う。それが今の秀助の意志。

「……やるの、秀助？」

「まだ総てを助ける選択があるのなら、僕はそれに全存在を賭けたと思う。それが責任だし……そうしたいから」

秀助はいくらか破損したドラゴンブルームを持ち上げ、手元のスィッチで用を果たしたエネルギーブースターを分離する。眼下の地面に落下していった。

身軽になったドラゴンブルームを握りしめ、ダンスをするように舞うユダを直視する。

ラキはその姿を見て不安な表情を浮かべた。それは死地に人を送り出すのにも似ていた。

「でも、そんな身体じゃ厳しいよ。リオンもいったじゃない、秀助は冥魔王と相打ちになったって。もしかしたら、秀助は……」

「やらなきゃ、どうせやられるだけだ。もうこれ以上、後悔はしたくない。だから、行かせてもらう」

「……なら、私は援護をさせてもらいましょう」

ラキは黙考し、破顔した。
肩を落として頭を振る。

「わかったよ。そういうことならわたしも援護する。……やるなら、勝ってね。ミラも連れて」

「うん、勝つよ。それに、助けてみせる」

命を賭けた男の誓いだ。

「ふんっ。そーいうことなら、まあパールちゃんも手伝ってあげるのもやぶさかじゃないわよ。他人に見せ場譲るなんてめったにないんだから感謝なさいよ!」

「はい、ありがとうございます」

ぷい、と顔をあらぬ方向にしているパールに秀助は笑みを洩らした。

「では、私がベルを下がらせます。同時に駆け出してください。できる限りのフォローはしますがその後はあなた次第です」

呼吸を落ち着け、体調を調整する。武術家の基本にして極意。呼吸により身体の龍の脈動を感じ、自己診断し、体内に巡らせる。怪我による苦痛を和らげ、吸い取られるプラーナ量を正確に把握しながらも、現在最大の動きをするようプラーナを管理する。脳内も透き通り、クリアになった。指一本一本にみなぎらせる力でドラゴンブルームを握りしめ、構える。

秀助が体勢を整えたのは確認してリオンが静か、だがベールⅡゼファーにはつきり届く声で、

「——ベル、離脱してください」

書物を手にした秘密侯爵の指示は的確なものである。ベールⅡゼファーは疑問を差し挟むまでもなく緊急離脱する。入れ違いに秀助は一陣の疾風となり駆け抜けた。

秀助の接近、それをユダは余裕の表情で待ち受ける。

「槍馬秀助、君の役目はもう終わった——現世から消え失せるがいい」

秀助は応えない。そんな余裕はない。そして秀助は相手の余裕につけ込み勝利する。

両手のドラゴンブルーム、それを唐突にユダへと投げ飛ばした。ブーメランのごとく回転しながらユダへと飛来する。

「なに——ッ？」

ユダは偽のリオンⅡグンタとして秀助に接触しておりドラゴンブルームで戦っていることを何度も見ている。なのにそれを棄てたことに困惑する。

「自暴自棄か!？」

交差させた両手を抜き放ちドラゴンブルームのフレームをV字に歪め弾き飛ばす。その隙に秀助は接近、だが拳の間合いにはまだ遠い。

ユダは迎え打とうとすれば、秀助は月衣に右手をつき入れていた。それを居合い抜き、手に握ったものを解放する。

空を乱舞するのは数百枚の紙片。リオンⅡグンタだったユダが秀助に渡したラビリンステイにつなぎ止めるための資金――

こんなもので、と構わず魔法を放とうとして絶句した。

見えない。紙片があまりに多く前方が一切窺えなかった。おかしい。いくら多いとはいえ紙片が完璧に視界を覆うわけがない。

そこでユダは紙片の周りで渦巻く気流に気づいた。初歩的な魔法による風の制御だった。他の仲間による援護である。

――どこだ？

槍馬秀助はどこからくる？

ユダは僅かな時間を脳内で引き伸ばし思考する。秀助がやって来るであろう位置。おそらくウィザードを突撃させるということはない。かしらの策があるに違いない。確実に迎撃しておかなければいけないだろう。

相手のステータスを浮かべる。武術家、負傷者、人間。様々な特徴から判断する。

真っ正面？ 有り得ない。こちらにがむしゃらな攻撃をされれば最初は正面にくる可能性が高い。こちらの視界を隠すなら、少しでも隙のあるところからくるはずだ。

頭上？ そこは紙片がない。そちら側に行けば打撃をする前に探知できる。

右側？ 上記ふたつよりも可能性はあるかもしれないが――
――すると、左側から紙片を撒き散らし攻撃がユダにきた。

左か、と掌を向けて防御魔法を発動し受け止める。だがそれは拳ではない。それは光球、魔法だった。紙片の穴からはデモニックブルームの刃先をユダに突きつけたラキがいた。

「ならばッ」

ちょうど下から攻撃がやってきた。ユダの真下に秀助以外が移動したら紙片がなく丸見えである。故にそれは秀助でしか有り得ない。さらには魔法によるものですらなかった。

ユダは防御ではなく、溜めていた攻撃魔法によって迎え撃つ。

——命中、相殺。

砕け散る音。霧のように光る金属片。

それは人間ではなく、ただの剣だ。ユダは驚愕で目を見開く。強化された視力で干からびた海底で、ほとんど基板しか残ってないアイゼンブルグから搭載された刀身のみを撃ち出した沢木権の姿を見つけた。してやったりと笑みを浮かべている。

なら、槍馬秀助は何処だ——ッ？

紙片に大穴が空き、少年が躍り出た。秀助は拳を大きく振りかぶり中央から堂々と突破していた。

「なん、だ……と!?!」

ユダ・カエサルは忘れていた。槍馬秀助の武術家としての流派を忘れていた。

槍馬流古武術。それは人体を^{ランス}槍となし最短で最大の攻撃、突貫力を生み出すもの——。ユダは正面から来るわけではないと思った。最短でも危険すぎる。無謀な賭け。だから小細工に逃げると思いこんでいた。そう、ユダは槍馬流の理解が浅すぎた。

槍馬流はもし最短が危険ならば——突破できるよう手を打つ。できる状況へと場を支配するのだ。

ユダは紙片に目を眩まされた時、秀助の仲間を疎かにした時、既に勝敗は決していた。

秀助は全身の発条で拳を引き絞り、

「返すよ——手切れ金だッ！」

秀助の拳がユダの胸を殴りつけた。

それ自体は傷すらつけられない。だから秀助は龍使いの能力を解放した。プラーナの操作、鍵を検索、発見。

「来いッ」

秀助とユダの境からプラーナが吹き上がる。拳の先に魔法陣が展開し、蒼色の球体に包まれた鍵を引きずり出していく。

「さ、せ、る、かあ……アア！」

ユダが鋭利な爪を苦し紛れに繰り出せば秀助の肩に深々と突き刺さる。鍛え抜かれた鋼鉄の筋肉も易々と切り裂いた。苦悶の声が洩れる。それでも秀助は止まらない。

鍵に自分の増幅したプラーナを注ぎ込み、ユダが流し込んだプラーナを洗い流す。鍵とユダの間で循環するプラーナを巧みに断ち、操作し、方向を変える。秀助はプラーナを吸収してはならない。冥魔王クラスのプラーナを突然受け止めるには人の器はあまりにも卑小すぎる。

しかしそれを霧散させることならば——できる。

鍵に効率良くプラーナを送る。最早鍵は秀助にとって肉体の延長線上にあった。長年日々の鍛錬で体内の龍、プラーナを操ってきた

秀助は鍵を瞬く間に掌握していた。

主導権を奪う。鍵は秀助の手の中。奪われていく力にユダが恐怖する。

「ここまで来て、ウィザードに負けるなどとは……」

「勘違い、するな」

プラーナ操作による負担と肉体的損傷により血を吐き出しながら、秀助は一蹴する。

「お前は通過点なんだ。僕の目標は……ミラなんだ！」

ユダのプラーナを分解、指向性のない力として放出させながら、秀助は最後の目的を遂行しようとした。

ミラの残滓を探し出す。冥魔王に吸収され、巡り巡ってユダの身体に取り込まれた彼女を探しだそうとする。それは困難な所行である。溶け合ったミルクとコーヒーを分離させるようなものだ。しかも身体が死にかける状況で行っている。

秀助はミラを思い出す。彼女の仕草を思い出す。声を、髪型を、顔を、笑顔も泣き顔も。

戻ってこい。戻ってきて。そんな奴から出てきてくれ。

知り合って日は浅い。だけど、ミラはそんな奴と一緒に死んでしまふべきでは絶対じゃないはずだから。

だから早く戻ってきて、

——みんなで一緒に笑いあおう。

＊

リオンⅡグンタは書物を開く。そこには常人には解読できない複雑な文字列が隙間なく記載されている。文字は端から薄れていき、

別の文章が記述されていく。

変化を眺めながら、横で息を呑み秀助の動向を見つめていたラキに語りかけた。

「あなたは知っていますか？ 本来起り得るはずだった槍馬秀助の死因を」

「……………え？」

「ユダⅡカエサルは解読の際に少々間違った翻訳をしていたのですよ」

誰にも問われることなく情報をリオンⅡグンタが話すなど、とても珍しい。本人でも驚いていたが、まあいい。これは魔王の気紛れだ。

「彼は冥魔王と差し違えるはずだった、ではありません。確かに彼は死にましたが、差し違えた相手は他にいるのです」

取り戻し開いた書物に書かれていたことだ。もっともそれは既に書き変わってしまったが。

「それは、ユダⅡカエサルなのですよ。彼女は私の本を奪わずとも、ラキのようにこの場に引き寄せられる野心を持った因子だった」

そして圧倒的に不利な状況で秀助はユダと差し違えていた。全身全霊を賭け、相打ちとなった。しかし今は本来いなかった仲間がいる。

ならば、結果はわかりきっていた。

「そう、すべてはこの書物にある通り——」

幾多の人に支えられた戦士は炎髪の悪魔と対峙する。かの者は消え去った姫を取り戻し、そして――

＊

光がはじけた。

プラーナが一カ所に集結する。

ユダの身体から放出されたプラーナはひとつの形を作る。

それは人だった。

少女である。カチャーシャをなくして印象が変わったセミロングの頭髪が揺れていた。

華奢な女の子の身体を秀助は抱き止める。肩に突き刺さっていたユダの爪は消滅していた。

「ふう……ん？」

秀助の腕の中で少女が身じろいで目を開く。寝ぼけたような眼で見上げて、ミラは急に声をあげた。

「あ、あれ……槍馬さん？　なんで、私は取り込まれたはずじゃ……。まさか槍馬さんも喰べられちゃったんですか!？」

「はは、違うよ。ミラが出てきたんだ」

ようやくミラは自分の状況を認識した。ここは間違いなく自分の消えたはずのラビリンシティであり、そこに再び舞い戻ったのだと。

そうすれば、ミラの瞳から涙が滲み出て――すぐに決壊した。

「槍馬さん……」

ミラが秀助の胸に顔を押しつけた。小さな肩が震え、ボロボロの制服が涙で濡れた。傷が痛むのも構わずに秀助はミラを落とさないよう片手で腰を支えている。

「怖かった、です。死んじゃったと思って、暗闇の中にいて、もうみんなに会えないと思って、すごく……すごく……！」

冥魔王に取り込まれる、それはとんでもなく恐ろしいことだったのだろう。秀助は泣いて縋るミラを優しく迎えた。片手にかかる重みは助け出したものの尊さの価値だった。

「お、のれえ……」

ユダが苦しげに身じろぐ。その身体は分解され片腕と片足が既になく胴体も砂のように崩れ落ちていた。

このような姿になってもまだ、ユダはしぶとく生き残っている。消えていく手を秀助の持つ鍵へと伸ばす。

「それ、が……あれば、私はまた、あの力を……！」

「残念だけど、」

秀助は球体に包まれた鍵をユダへと向け、

「ここで終わりだ」

鍵には顔を上げたミラも手を添えていた。

瞬間、秀助のプラーナが最大出力で流し込まれて鍵の吸収能力が跳ね上がった。それをユダは至近距離で受けてしまう。

プラーナがなくなれば、後には死という崩壊しか存在しなかった。

「馬、鹿な……ああ——」

それが、ユダⅡカエサルという世界を破滅に追い込んだ魔王が残した最後の言葉だった。

鍵は負荷に耐えられず、碎けて消えて役目を終えた。

きらきらと舞い落ちていく姿は、勝利を祝福しているようだった。

終…エピローグ

「あー、ったく、今回は酷い目にあったわ。まだ疲れが抜けないわよ」

全身に溜まった疲労を追い出すかのようにベールⅡゼファーが椅子に腰掛け深々と溜息をついた。

ここは裏界、そこにあるベールⅡゼファーの領地と呼ばれる空間の一室。淡いほのかな光だけで照らされた部屋の後方では、ふたつの歯車状のものが重なりあってゆったりと音もなく回転している。

輝明学園の制服の上にポンチョをまとったベルを見て、リオンⅡグンタは常の無表情で告げる。

「ベルがユダを放置しなければよかったのです。どうせ初めからミラを連れ出したユダが私ではないと気づいていたのでしょうか？」

その間に本物のリオンもいなかった——書物奪還のため運命を変えないよう潜伏していたからベルの前に姿は現さなかった——とはいっても、ベルは大魔王なのである。あの場でベルは初めて騙されていたことを知った、という風になっていたが大魔王が中級魔王の変装程度見抜けないわけがない。仮にベルが変装していたユダをリオンと呼んだとしても、それはユダⅡカエサルという名前を知らなかったから名称がないと不便なため便宜上に使っただけだろう。

書物を抱えて椅子に腰掛けるリオンにベールⅡゼファーは愉しげに笑った。

「完全には気づいてなかったわよ。だからユダが出てくるか試すために冥魔王をみすみす斃させたわけだし。まあそれにそっちの方が面白そうじゃない？」

今度はリオンが溜息を吐いた。ベルのこの悪癖のせいでいったい幾度の作戦が失敗したことか。ベルの慢心、油断、それにゲームとして戦いを楽しむ思考パターン。それは高位の魔王ならある程度持ちあわせてはいるものであるが、ベルはその特徴が抜きん出ている、複雑な作戦をたてて世界を滅ぼそうとする。そして決まって失敗する時は典型的な策士策におぼれる、な形である。

今回だってベルがユダⅡカエサルを早々に滅し書物を取り返してくれていたなら、ここまで複雑なことにはならなかった。まあそれは理想論で書物の紛失はリオンの不手際であり、奪還までは望みはしないが。

「これだからベルは……」

「もう過ぎたことなんだからいいでしょ。面倒だったけどそれなりに楽しめたしね。……パールは鬱陶しかったけど」

どうやらベルはリオンがパールに頼ったことにご立腹らしかった。ベルとパールは犬猿の仲、水と油の間柄である。その相手をリオンが頼ったことは少なからずベルのプライドを傷つけていたのだ。

しかし、だからこそリオンはパールに近づいたのであった。現在事実上裏界でもっとも強力な魔王はベルである。それと敵対できるパールはそれほどまでに強いのだ。しかも彼女はベルへの対抗意識で簡単に動いてくれる。これほど都合の良い相手はいなかった。

「あらあら、それはすみません。でも結局は彼女も私に利用されていたわけですし、それを鼻で笑えば苛立ちも収まるのではありませんか？」

「さらっと恐ろしいこというわねアンタ。……で、さっきから上機嫌だけどなんかあったの？」

「わかるのですか？」

「まあね」

付き合いが浅い人間ならば気づかないだろうが、リオンの微笑からは機嫌の良さが窺えた。

「そういえばさっきまで出掛けていたようだけど、なんかあったの？」

「あの事件の後、槍馬秀助に情報提供の見返りとして知り合いのロングヌスを紹介してもらったのです」

「なに、アンタ人間の男にそんな飢えてたわけ？」

ベルは椅子から身を乗り出してリオンを見た。普通魔王は人間の男を墮落させ籠絡するものである。リオンも手作りの”男を落とすための方法を、思いつくかぎり記した書物”なるものを持っていた。それほどまで面白みのある男だったのだろうか。しかも相手がロングヌスとは。ちなみにロングヌスとは世界の守護者が作り上げた仮面をつけたエリートウィザード集団であり、日夜裏界と対立している者たちである。

「いえ、そのロングヌスが所持していた列車型大型輸送用錬金兵装”ギャラクシアンライナー”に乗車させてもらったのです。いずれは手に入れて愛でたいものです……」

「ああ、そう」

この鉄子め、とげっそりした顔でベルは手を振った。リオンの鉄道愛好はベルには理解できない領域であった。錬金兵装とはウィザードの一種である錬金術師が作成したものである。以前から錬金術師が作り出すとある列車型錬金兵装を狙っていたとは訊いていたが、まさかこの事件のどさくさに紛れて乗車を果たしていたとは。怪我の功名とでもいうのだろうか。

未だにうつとりとするリオンを尻目に、ベルは次のゲームに思いを馳せた。

「さて、次はどんなことを起こそうかしら――」

大魔王の暇つぶしは終わらない。

＊

とんてんかん。

とんてんかん。

とんてんかん。

金槌で釘を打つ。これでいったい何本目だろうか。三桁になってからは頭が痛くなって数えるのをやめた。

目に汗が入り込んだので、首にかけたタオルをメガネの下に潜らせて拭いた。そのタオルもすっかり汗をすって重い。

この作業は終わる時がくるのだろうか？　そう疑問に思っている
と、背後から鈴を転がすような声がした。

「こらっ、サボってないでとっとと続けなさいよ！　まだ全然直ってないじゃない」

巫女のような服装をした少女、魔王パールⅡクールに急かされて
沢木権は不平を訴える。

「いやいやいや……こんなの素人がどうこうできるレベルじゃねーぞ、と。本当にマジで無理なんですが」

権は半壊した東方王国神社を指差した。ベルの《ディヴァイン・コロナ・ザ・ランス》により破壊されてしまったそれらを、なんと

権は直せと命じられていた。しかしそれはあまりに無謀である。いったい倒壊した場所の合計は何坪あると思っているのか。手に余るなんて次元の話ですらない。

作務^{さむえ}衣姿に金槌という出で立ちの権にパールは慈悲を与えなかった。

「文句いう暇あるならきりきり働く！ 馬車馬のように奴隸のように強制労働の囚人のように！ それともこのパールちゃんに逆らおうっていうわけ？ 遺骨すら残らないようにして欲しいわけね」
「……わかりました、やります。やりますとも」

権は涙目で口に銜えた釘を金槌で目の前の柱に叩きつけた。一応図面やら工具やらは渡されたが、これが直る頃にはいったい何年が経っているだろう。

パールが他の部下を使うなりすればすぐに修復は終わるだろうに。これはパールが苦勞する権を見て愉しみたいがために行わせているに違いない。権は一時でもパールに感謝の念を抱いた事実を撤回しなかった。

作業に戻った権を見て満足そうに頷くとパールは唐突にあの日のことを口にした。

「あー、今頃あの三人はどうしてるのかしらねえ」

それが秀助たちのことを差しているのは間違いなかった。

さて、と権も首を傾げるしかない。それはこちらも知りたいところなのである。

「元気なのは間違いないんじゃないでしょうかね」

ラキ以外のふたりは今は表界にいた。ラキの方の消息はわからな

いが、酷いことにはなっていないとは思う。三人とも平穩無事に過ごしているはずだ。少なくとも権のように拷問じみた作業をやらされてはいないだろう。それがとてもとても羨ましい。

結局、権は秀助にも記憶喪失の件を話さないでいた。いつかは打ち明けられる日が来るといいと思う。あの事件がいい刺激になったのか、あれ以来記憶もほとんど戻ってきて自分に定着してくれている。だからまずは表界に行ったなら両親に顔を見せよう。心配をかけていただろうし。

で、あるものの、目下のところこの建物を直さないことには表界なんかいかせてもらえないんだろうな、と苦笑した。それなら手早く直したいところだ。

「……本当、あいつらはどうしているんだか」

「あ、権ストツ——」

がつんと、

金槌で自分の親指を叩いて権が絶叫することになったのはどうでもよいことだった。

＊

私立輝明学園。

東京池袋に本校を置き、全国各地に複数の分校があるこの学園は前身が私立輝明義塾という明治初期に設立されたものである。神道系の学園であり——もっともその他の宗教を否定や受け入れ拒否をしているわけではないが——ルーツは古く、幼稚舎から高等部まで備えた規模の広い歴史ある学舎まなびやとして認知されている。

だが、それはあくまで一般人の視点で見たらの話である。ウィザードや魔王からすればまた違った側面が垣間見えた。いや、こちら側が本来の輝明学園のあり方なのである。

ウィザードの養成場。

明治初期に私立輝明義塾が設立されたのは当時散発していた呪術結社による霊的攻撃へ対抗するためであった。日本政府の要請により日本最大の陰陽師派閥であるところの御門家が開設したのだ。

呪術結社の危険がなくなった時を境に一般人も学生として受け入れ輝明学園となり、普通の学校法人として運用され——やがて、裏界から侵魔が侵攻してきた。こうして若いウィザードの教育が余儀なくされ、輝明学園は今に至る。

つまるところ、ウィザード側からすれば次世代の戦士が育成される場所であり、魔王からしてみれば厄介な敵が増やされることである。

特に槍馬秀助の通う私立輝明学園秋葉原分校は六名に一人はウィザードと、非常に数が多い。まあそれでも一般生徒はウィザードのことを一切知らずただの学生として青春を謳歌し卒業していくのだが。

その輝明学園秋葉原分校に所属している槍馬秀助は、久しぶりに登校していた。と、いつても本日は休日である。今日までなんの連絡もせずに休んでいたので、直接足を運んで報告していた。

学園の事務室で書類に事細かに記入しているのは自分が長期休暇をとってしまった経緯についてだ。輝明学園はウィザードの養成場であり、そのため任務や仕事による欠席には寛容である。この書類を提出し、事実確認をしてもらえれば休みは公欠こうけつにしてもらえる。もっとも空白だらけのノートだけは友人に写させてもらわねばならないが。

書き終えた書類をウィザードである教師——生徒と同じく教員全員がウィザードではない——に提出すると、秀助は事務室を後にした。

リノリウムの廊下を歩きながら凝り固まった肩をほぐす。首を回せば小気味よい音がした。

正門の方から聞こえてくるクラブ活動の声を耳にいれながら、深

い感慨に耽る。まるであの事件が夢のようだった。非常識を日常茶飯事とするウィザードは、そこから日常に復帰するのも早い。人間は食事をとる前後に一々緊張し、その日の食事を何度も思い出したりはしないだろう。ウィザードにとってはそれほど侵魔との戦いは身近にある。

だからだろう。あまりにスムーズに事務も終わってしまうので何事もなく日々が経過するように感じてしまう。

そこで秀助は自分が簡単に流した不自然な部分にようやく気づいた。

「……なんで正門がこんなにうるさいんだ？」

休日なのに。文化系クラブの密集したクラブ棟や体育会系クラブのある体育館ならともかく。

——これは、まるで……。

輝明学園に在籍する学生なら一度は体験するであろう騒ぎに似ていた。玄関までいくと、案の定秀助の予感が的中した。

赤と青の仁王像が辺りを威圧するように左右に建ち、鳥居もある輝明学園特有の正門。そこから玄関までは神社と同じ石畳で繋がっている。

その正門近くで、たったひとりの女の子に無数の生徒が群がり、口々にあることをまくし立てていた。

「プロレス研究会に入りませんか！ 女子也大歓迎です！」

「いえ、ここは是非オカルト同好会に！」

「巫女服って興味ないかな？ 巫女部に入れば自分専用のがもらえるよ！」

「あもう、星は好きですか？ 星占いもやってる天文部に……」

「さあ僕たちと一緒に文学について語り合おう！」

「いやいや、ここは我らがTRPG部へ！」

「SF研究会、SF研究会に何卒入部を！」

「エコロジーでボランティアなエコボラ部もオススメですよ、一緒に地球を綺麗にしましょう！」

この輝明学園には部員不足の部活が多く、どこも新入生がくれば猛烈な勧誘をしかけるのだ。三年も在籍する秀助には見慣れた光景である。入学当時は自分もそうだったと懐かしむ。いつも武術の稽古があったので結局帰宅部であるけれど、せっかくなのだから少しくらい部活をやっておくべきだったかなと後悔した。

秀助は渦中の少女を見て苦笑いを浮かべた。彼女は転入生ではないというのに彼らはよくやる。それほど熱心になるくらい今の部活が好きなんだろう。なにせ彼女は転入生ではなく、まだその予定の娘なのだ。よく嗅ぎつけたものだと感じる。

無数の人に詰め寄られてあたふたする少女——ミラが秀助の視線に気づいた。彼女は助けを求めようとするが肉の壁に阻まれて姿が見えなくなる。

今日秀助が学校を訪れたのは自分の書類の提出だけではなかった。それはミラの転入届けを出すためでもあったのである。

再構成されたミラに起こった変化があった。それは、月衣の変質。不完全な月衣は再構成させたウィザードである秀助の影響で完全なものになったのだ。ウィザードとしての力こそないものの、これでミラは表界でも生活をできるようになっていた。

身寄りのないミラのことを家族に相談すれば槍馬家に居候することになり、この年ならば学校にも通わせようとなった。息子が可愛い娘を助けてきた、と人一倍喜んだ父親が昔のコネを使いウィザード組織に事情を話し、戸籍を用意させてこの輝明学園へ行かせることを決定したのであった。

ミラは作られた時に人間らしく振る舞えるよう、最低限の知識は与えられていたが学園生活は初めてである。正確に言えばミラはまだ生後一ヶ月も経っていない。秀助は彼女のフォローを仰せつかつ

ていた。

とはいえ過保護はよろしくない。しばらくは様子を見ていよう。近くの壁に背中を預けて眺めていると、真横に気配が現れた。

「や、秀助」

笑顔のラキが同じように背中を壁に預けていた。あの事件でどこかへ去って以来会っていなかったので、秀助は驚く。

「ら、ラキ？ いったいどこに行ってたの？ ってか、いつの間に……」

『記憶に覚醒したラキはもう魔王ですし、あの後やってきたウィザードの団体に見つかりたくなかったのですよ』

Irisの合成音声もあの日以来だ。しかしラキが目覚めてからは以前よりさらに生々しさが増していた。

ユダを斃した後に騒ぎを聞きつけてやってきたウィザードの組織。確かパールやベル、リオンも早々に退場していたことを思い出す。

「魔王、ね。別にラキはラキじゃないか」

「あはは、ありがと。でも裏界の魔王たちからも睨まれちゃうからね、ウィザードと仲良くし過ぎたら。これからは、もうほとんど会えないかな」

魔王も魔王で大変なようであった。初対面からあまり印象は変わっていないのに、もうラキは遠くにいった人に見えた。短い期間だったが、秀助にとってラキはかけがえのない戦友である。もう会えない、というのは非常に悲しかった。

眉尻を下げた秀助を見てラキは嬉しそうする。

「別にみんなと全然会えないわけじゃないけどね。そんなにがつかりしちゃって……」

ベソをかく子供を見つめる眼差しを向けられても不快感はいっさいない。魔王であるラキと秀助では年の差が三桁は余裕で違うはずである。転生したラキの身体自体はまだ二十年程度しか経っていないけれど。

ちらりと、ラキは人に翻弄されて目を回すミラを盗み見る。

「今ここに来たのは、秀助にお願いがあったからなの」

「お願い？」

「うん。……わたしの名前を決めて欲しいの」

ラキの台詞に秀助は首を傾げた。彼女にはちゃんとした名前がある。なのに、どういう意味だろう。言葉を計りかねていると、Irisが説明してくれる。

『今のラキ——彼女は、三者の記憶が入り乱れています。キースIIラグランジュの記憶、ラキの記憶、流れ込んだミラの記憶。それらは彼女の中で合わさっています。強い力を持っているので彼女の基本である性格が変わってしまうことはありませんが、それでもラキではないのですよ』

「そういうこと。だから心機一転して名前を変えようかなー、って。そしたら秀助に決めてもらおうかなと思ったのよ」

「……そんな大事な役目が僕なんかでいいの？」

他人の名前を決めるなんて責任重大である。それを自分に任せてもらっていいのだろうか？

「こういう時に頼むっていったら、秀助しか適役が浮かばなかった

んだもん」

『どう転んでも彼女の『ハイパー・アンドロメダ』やら『ボルニクス・リア・ディゾン三世』、『ラッキーマラー』よりはマシになりますから安心してください』

「それは全部冗談でいったの！ 秀助、可愛い名前でもよろしくね」

秀助は考える。キースIIラグランジュでもラキやミラでもない。彼女の名前を考える。不思議と頭に曇りはなく、雲一つなく冴えていた。勧誘の喧噪も遠くなり、BGMとなる。

秀助はまぶたを下ろす。まぶたの裏の暗闇には和気藹々としたBGMと自分の呼吸音だけがあった。なんとなく息を止めてみる。そうして、脳内に様々なものを思い描く。あの事件の始まりから終わりまで、ラキやミラ、権にパール、リオンとベル、ユダと冥魔王も忘れてはならない。全部を走馬灯のように上映した。

いろんなことがあった。本当に、いろんなことが。

呼吸をしていなかったけれど、あまり苦しくはなかったので時間はそれほど経っていないのだろう。

まぶたを上げると彼女がこちらを見つめていた。相変わらずの整った顔立ち。でも、直視されていて気恥ずかしさはなかった。彼女は純粋に秀助の答えを待ち望んでいた。

もうすぐミラの勧誘は終わるだろう。ミラが折れて入部先を決めたからか、それとも周りが一通り勧誘を済ませてしまったからなのかはわからない。

きっと、ここから彼女の新しいなにかが始まる。それが幸せでありますように。秀助はそう願う。

思い浮かんだそれを脳裏で反芻させて、満足する。ああ、これがいいな、と。可愛いかはわからない。気に入ってもらえるかはわからない。彼女の反応を楽しみにしながら、秀助はゆっくりと名を紡ぎだす。

「君の名前は――」

ナイトウィザード2nd 狭界に鳴り響くカプリチオ
f i n . .

終…エピローグ（後書き）

気づけばすごい文字数になってしまっていました。完結いたしました。

10月から始まり2ヶ月経ったところでの終了。一年前の今頃はナイトウィザードのアニメが佳境に入っていた時なので、放送終了一周年記念作品と呼べなくもない。

いやあ、《ディヴァインコロナ》をアンソロ表記の《ディヴァイン・コロナ》にしてしまったり、後半部活勧誘シーンでふたりほど原作キャラクターがいたりと言りたいことはありますが、蛇足的になりそうなので今はここまで。

後のキャラクターデータの方でもいくつか触れるでしょうし。

この作品はTRPGのナイトウィザード2ndを下敷きに制作されています。TRPGとは……まあGoogle先生に頼ってください。長くなりますので。

ナイトウィザードは去年にアニメ化されたほど人気のあるTRPGです。内容はこの作品を見てくれた方はわかると思いますが、ウィザードと侵魔、冥魔の戦いとなっております。詳しいことはナイトウィザード リプレイ を購入してくれればw

感想批評待ってます。一言だろうとんでもOK、気軽にどうぞ。では。

e x .. キャラデータ

槍馬秀助

ふたつ名

至高の桃色パンダ

ウィザードクラス

龍使い

スタイルクラス

アタッカー

属性 火／地

筋力 15

器用 8

敏捷 7

精神 8

知力 4

信仰 6

知覚 8

幸運 7

未装備 最終値

命中 16 15

回避 11 12

攻撃 29 36

防御 15 17

魔導 7

抵抗 7 6

魔攻 6

魔防 5 6

耐久力 32

魔法力 15

行動値13（総合レベル修正有）

移動力 ベース／未装備／最終値2

特殊能力

月衣

月匣

物理攻撃UP（修正済）

ウェポンマスタリー…箒（修正済）

伝家の宝刀…ドラゴンブルーム式式

気功

竜爪

一閃

魔法

なし。

武装・魔装

ドラゴンブルーム式式

輝明学園改造制服

CF修正値2

プラーナ内包値8

解放力2

所持品

O-phone

Mugenkun

幸運の宝石

エネルギーブラスター

ライフパス

出自

ハラペコ

生活

守るべき者^{ミラ}

コネクション

レオン／借りがある

ミラ／守るべき者

性格

無邪気で冷徹。

無邪気、というけれど子供っぽいわけではなく、邪気のある言葉を吐かない。しかし、同時に冷徹な思考回路を持ち合わせている。

ラキ

ふたつ名

暖かなる錆色バジリスク

ウィザードクラス

侵魔召喚師

スタイルクラス

キャスター

属性 冥／天

筋力 6

器用 8

敏捷 7

精神 1 1

知力 1 1

信仰	6	
知覚	6	
幸運	8	
未装備	最終値	
命中	7	5
回避	6	5
攻撃	7	21
防御	6	6
魔導	15	17
抵抗	12	11
魔攻	22	26
魔防	13	
耐久力	17	
魔法力	25	
行動値	13	11
移動力	ベース／未装備／最終値	2
特殊能力		
月衣		
月匣		
魔法攻撃力UP		
伝家の宝刀（SL3）	..デモニックブルーム	
八界の嵐		
荒廃する世界		
魔法		
サンライトバースター		
ダークバリア		
ヒール		

武装・魔装

デモニックブルーム

CF修正値2

プラーナ内包値8

解放力2

所持品

疑似人格システム”Iris ver. 2”

”Iris”用追加データカード

ライフパス

出自

死亡。一度殺された記憶を持つ。

生活

死んでいた！！戸籍上は死亡している。

コネクション

京上司郎。

性格

かつては上品だが今は笑顔を絶やさない。

作成段階でデモニックブルームをとるために相当無茶をしたため性能は微妙。

本来は侵魔召喚師の力でラストの融合ユダ戦でアゼル・イブリスを召喚し、プラーナ吸収能力で拮抗している間に攻撃して追い詰めるシーンがあるはずだった。しかしユダは『死に反逆』し斃しきれず、秀助の突撃シーンに繋がる予定だったのだが、話が長くなりすぎるので全面カットにされてしまった。アゼルが影で泣いている。

友達のベルも泣いている。一番の被害者は活躍を奪われたユダだったりする。

ちなみに『死に反逆』はルール上はHPが0になった瞬間に2D6を振り、出目の分回復して自動復活というものだった。プラナーナ吸収能力でMPは不足しないということで永遠に使用でき、ほぼ不死身である。

沢木権

主要三人で沢木権だけキャラデータ未作成。落とし子ディフェンダーは作るのが飽きたため。哀れ。

武器はアイゼンブルグ。巨大な積層シールド状パーツが左右から守る。伝家の宝刀ひとつで入手可能。

後450000V・でビームブレードユニットとウェポンマウントラッチでバスタードソード、刀身射出機構。しかしキャラ作成時の残り資金450000V・では足りないので買えない。哀れ。作中の後半説明場面には大抵いない。哀れ。

ちなみに作中段階では三人とも十レベルを想定している。

作成には用いたものは以下の通り。

ナイトウィザード2nd Edition

// ソースブック スクールメイズ

// ソースブック ラビリンスシテイ

ナイトウィザード The ANIMATION DVD初回生

産限定版の全巻に付属するブックレット

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3500f/>

ナイトウィザード2nd 狭界に鳴り響くカプリチオ

2010年10月10日11時53分発行